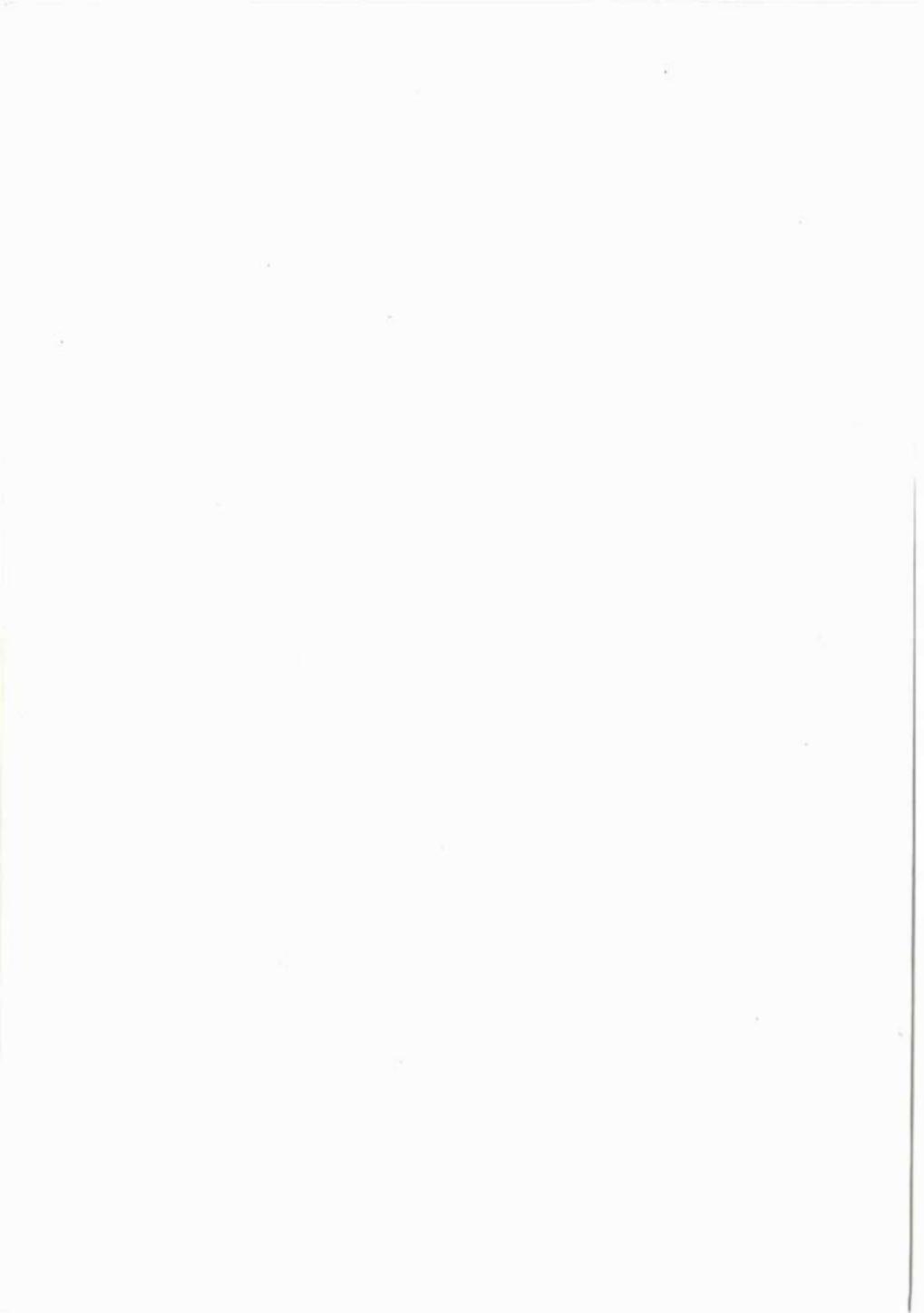


興道寺古墳群

県営中山間地域総合整備事業 美方地区に伴う発掘調査報告書

2002年

福井県美浜町教育委員会

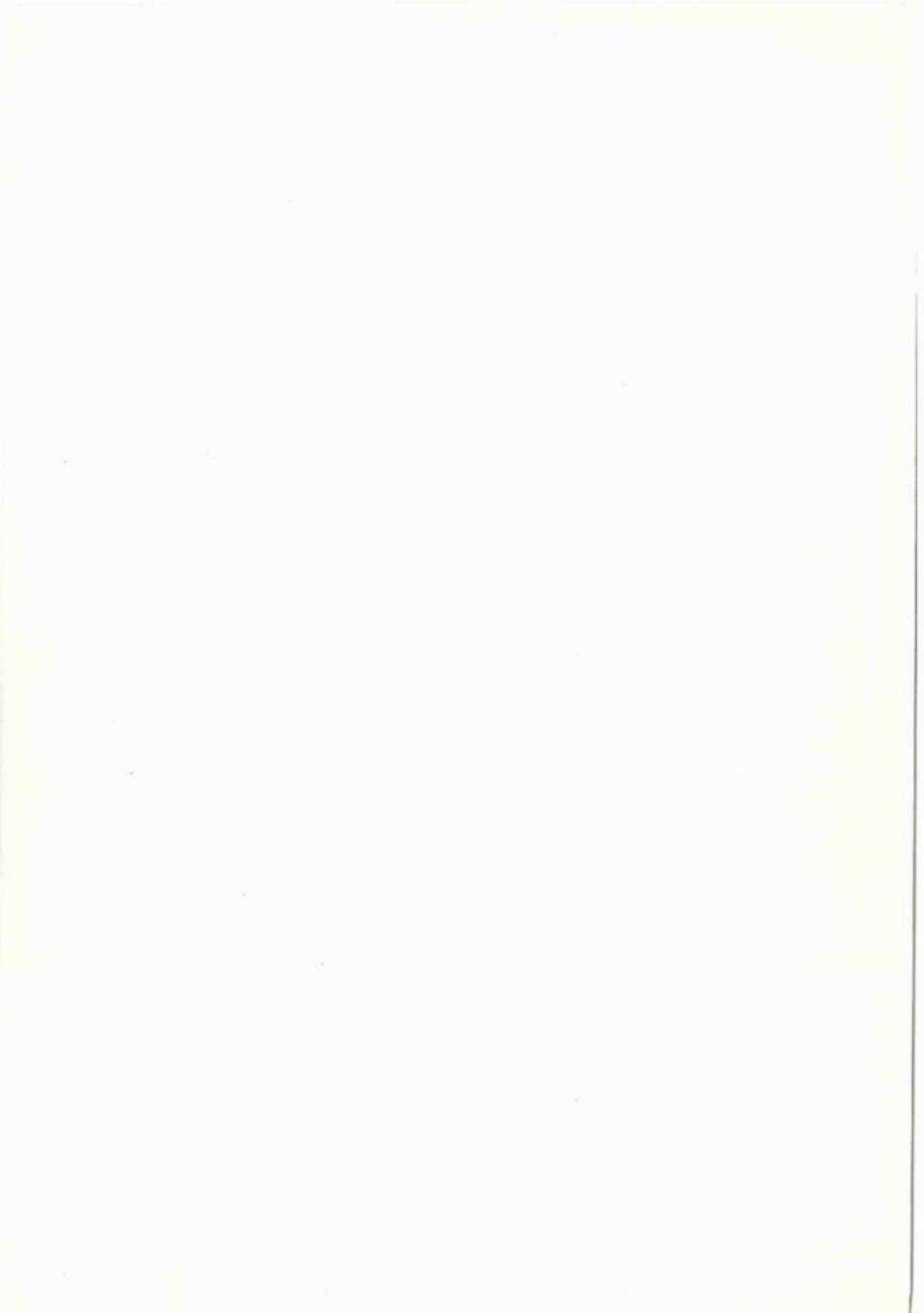


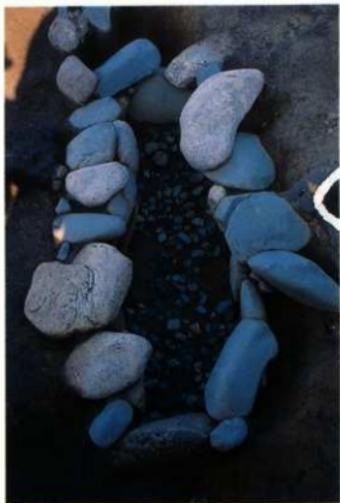


調査区周辺（西から）



調査区全景（西から）





S Z 2 石室完掘



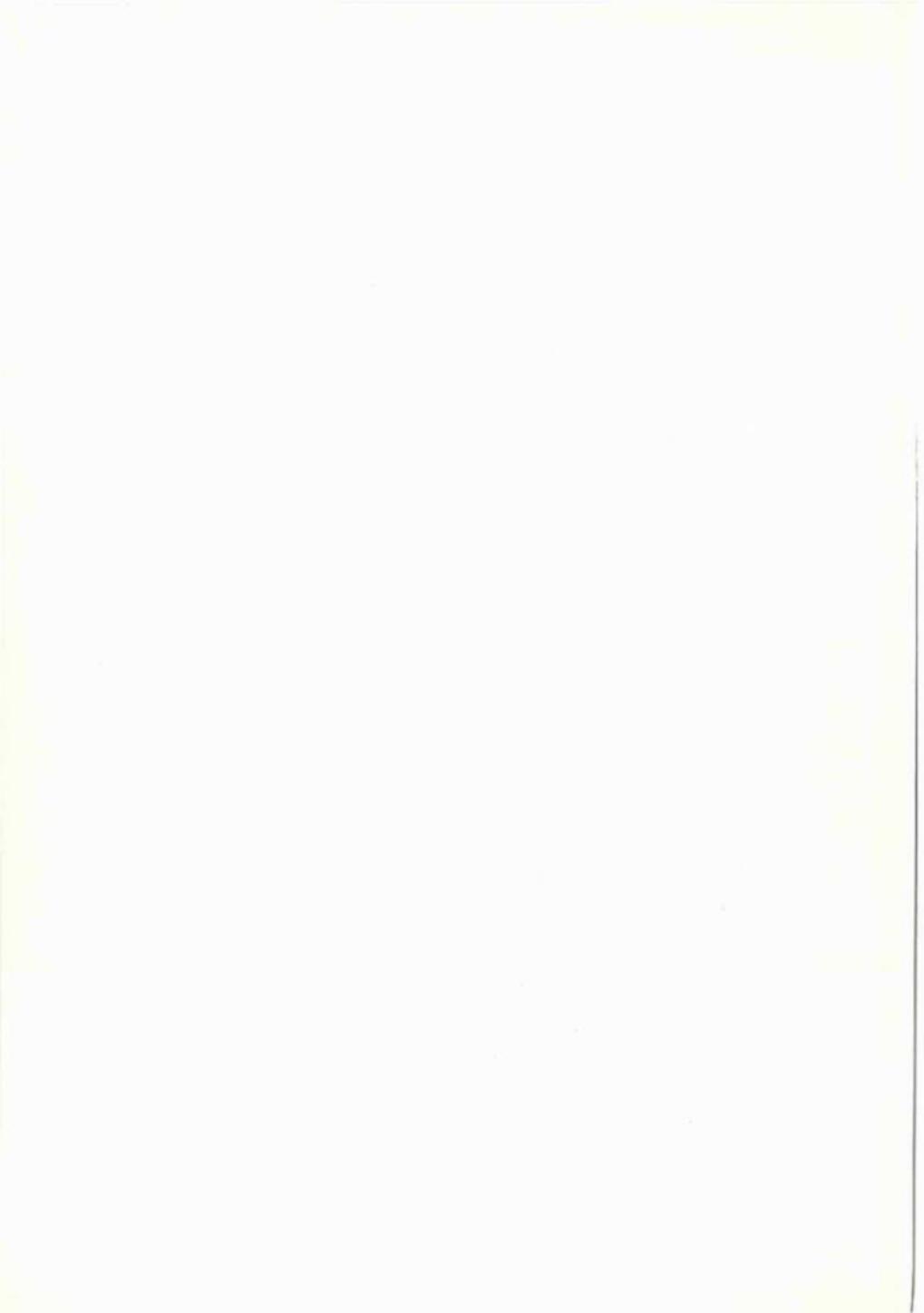
S Z 2 石室遺物出土状況



S Z 3 周溝遺物出土状況



古墳時代須恵器群



序 文

美浜町には約130にも及ぶ遺跡が残されています。過去に発掘調査が行われた獅子塚古墳、興道寺窟跡、口背湖遺跡、淨土寺古墳群、松原塗跡など、ここに全てを記すには枚挙に暇がありませんが、いずれも美浜町、あるいは若狭地方の歴史・文化を考える上で重要な遺跡群です。

今回、美浜町教育委員会が発掘調査を行いました興道寺古墳群からは、耳川流域における古墳時代後期の墓制の一端が私達の前に姿を現しました。

本書には本発掘調査の成果が十分に収録されています。本書が多くの方々に活用されることにより、美浜町の歴史や文化を探求するとともに、遺跡の保護についてより一層の理解、認識を深め、文化財愛護、郷土愛の啓発、普及につながることを切望いたします。

なお、調査に際して多大なる御理解、御支援を賜った福井県嶺南振興局二州農林部農村整備課、調査全般に際して御指導、御教示を賜った福井県教育庁文化課文化財保護室、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター、美浜町文化財保護委員会、また調査に従事された調査作業員各位、並びに暖かいご支援をいたしました美浜町興道寺区など、関係機関、関係者各位の深いご理解とご協力に対しまして、誠んで厚く御礼申し上げます。

平成14年3月

美浜町教育委員会

教育長 浅妻 保

例　　言

- 1 本書は、興道寺古墳群（福井県遺跡番号30074、美浜町遺跡番号K D08）の内、美浜町興道寺25号中町10-52番地、及び12-18番地に所在する埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 県営中山間総合整備事業美方地区に伴う緊急発掘調査として、埋蔵文化財発掘調査委託契約に基づき、委託者福井県嶺南振興局の費用負担により、美浜町教育委員会が調査を実施した。
- 3 調査は下記年度にわたって実施した。

平成12年度	平成12年10月5日～平成12年12月28日（現地調査）
	平成13年1月9日～平成13年3月23日（整理）
平成13年度	平成13年7月1日～平成13年3月20日（整理・報告書刊行）
- 4 調査体制は下記のとおりである。

調査主任者	浅妻　保（美浜町教育委員会教育長）
事務局	南　正明（美浜町教育委員会事務局長、平成12年度） 中川　利夫（美浜町教育委員会事務局長、平成13年度） 西田　宏（美浜町教育委員会文化財保護活用政策参事）
調査担当	松葉　竜司（美浜町教育委員会芸術科）
調査員	上田　智也（美浜町教育委員会嘱託、平成12年度）
調査作業員	秋山喜久枝、上野山稔、上村芳男、大村義弥、川口瑞絵、久保正、久保正男、鈴木梨沙、武田絵里、田村千賀子、道幸明、橋本友美、藤長和夫（ア順）
- 5 本書中の各遺構平面図は原則的に現地での実測図によったが、一部空中写真測量図にて補足した。
- 6 出土遺物の実測の一部を（有）前橋文化財研究所に委託した。
- 7 出土遺物の写真撮影の一部をA Vプロジェクト 武藤茂樹氏に委託した。
- 8 出土耳環の元素分析を（財）若狭湾エネルギー研究センター研究部 丸山忠司氏に依頼し、その保存処理を株式会社吉田生物研究所に委託した。
- 9 出土須恵器の胎土分析を大谷女子大学文学部文化財学科 三辻利一教授に依頼した。
- 10 遺跡周辺の地理的環境の条件把握を京福コンサルタント株式会社に委託した。
- 11 本書の執筆分担は、本文目次に記した。本書の編集は松葉が行った。
- 12 現地調査・報告書作成で下記の個人・機関に御指導、御協力を賜った。記して感謝申し上げる。
福井県教育庁文化課文化財保護室、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター、福井県立若狭歴史民俗資料館、福井県嶺南振興局二州農林部農村整備課、美浜町興道寺区、美浜町シルバー人材センター、株式会社かんこう、財団法人若狭湾エネルギー研究センター、株式会社吉田生物研究所、京福コンサルタント株式会社、株式会社吉田紹
青池啓彦、赤澤徳明、鈴木真山美、綱谷克彦、入江文敏、上野晃、河村健史、（故）武長篤行、大河芳男、富山正明、鳥居直也、中川圭三、中司照世、中西昭二、長友仁郎、畠中清隆、服部修一、丸山忠司、水野和雄、三辻利一、武藤茂樹、森川治、森川昌和、山口光（敬称略）
- 13 出土遺物・記録類は美浜町教育委員会が保管している。

凡　　例

- 1 遺構実測図中の方位は真北を示し、座標は国家座標第IV座標系に基づいている。
- 2 遺構実測図の縮尺は1/50を基本としたが、出土状況図など一部は縮尺を変えている。
- 3 遺構番号は発掘調査時の番号を再整理し、新たに振り直した。
- 4 遺構一覧表中、土壙・柱穴の平面・断面形状の分類基準は以下のとおりである。
 - 平面 I 円形のプランをもつもの。正円に近いものをa、長梢円のものをbとに細分する。
 - II 方形のプランをもつもの。正方形に近いものをa、長方形に近いものをbとに細分する。
 - III 長方形のプランをもつもの。
 - IV 不定形のプランをもつもの。
 - 断面 I 丸底状であるもの。深さにより、浅い方からa、b、cとに細分する。
 - II 平底状であるもの。深さにより、浅い方からa、b、cとに細分する。
 - III 尖底状であるもの。深さにより、浅い方からa、b、cとに細分する。
 - IV 不定形であるもの。
- 5 古墳石室の石材の積み方を以下のとおり呼称する。石材間を埋める小石は詰石とした。
 - 平積み 奥に控えを取らず、縱位に積んだもの。縱平積み、横平積みとに細分する。
 - 長手積み 奥に控えを取らず、横位に積んだもの。
 - 小口積み 奥に控えを取り、横位に積んだもの。
- 6 遺物実測図の縮尺は上器を1/3を基本として、金属製品を1/2とした。また、図中の遺物断面は、須恵器は黒塗り、土師器は白抜き、陶器類はスクリーントーンとした。
- 7 遺物実測図・遺物一覧表には、図化に耐え得た資料を収録している。
- 8 上層断面、遺物の色調などは、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、『新版標準土色帖』2000年版に準拠した。

本文目次

第1章	調査経過	
第1節	調査に至る経緯（松葉）	1
第2節	調査の経過（松葉）	3
第2章	遺跡の立地と周辺の環境	
第1節	周辺の地理的環境（鳥居）	5
第2節	周辺の歴史的環境（松葉）	18
第3章	調査の概要	
第1節	調査地周辺における既往の調査（松葉）	23
第2節	現地調査の概要（松葉）	29
第3節	遺跡の層序と地形（松葉）	30
第4節	旧河道の概要（松葉）	32
第5節	遺構・遺物の概観（松葉）	35
第4章	遺構と遺物	
第1節	I期の遺構と遺物（松葉）	36
第2節	II期の遺構と遺物（松葉）	48
第5章	考察	
第1節	S Z 2 石室の検討（松葉）	56
第2節	I期須恵器の検討（松葉）	62
第3節	II期土師器の検討（松葉）	64
第4節	遺跡の性格（松葉）	66
第5章	分析	
第1節	興道寺窯跡、及びその周辺の古墳出土須恵器の蛍光X線分析（三辻）	68
第2節	耳環のE PMA分析結果（丸山、長友）	76

挿 図 目 次

第1図	試掘調査位置図	1	第31図	S Z 3 出土遺物実測図	46
第2図	地形区分平面図	7・8	第32図	S H 1・S H 2 平面・セクション実測図	48
第3図	地質区分平面図	11・12	第33図	S H 1-P 1 出土遺物実測図	49
第4図	地質断面図 (A-B)	13	第34図	S H 1-P 1 遺物出土状況図	49
第5図	地質断面図 (C-D)	14	第35図	S A 1 平面・セクション実測図	51
第6図	ボーリング柱状図	15・16	第36図	S K 1 平面・セクション実測図	52
第7図	獅子塚古墳石室実測図	18	第37図	S K 2 平面・セクション実測図	52
第8図	獅子塚古墳石室出土遺物実測図	18	第38図	S K 2 出土遺物実測図	53
第9図	遺跡分布図	19	第39図	S Z 2 石室使用石材ヒストグラム1	56
第10図	興道寺窯跡川土遺物実測図	21	第40図	S Z 2 石室使用石材ヒストグラム2	56
第11図	興道寺窯出土遺物実測図	21	第41図	S Z 2 石室使用石材実測図1	57
第12図	和田弁天台場跡台座平面実測図	22	第42図	S Z 2 石室使用石材実測図2	58
第13図	既往の調査位置図	23	第43図	S Z 2 石室石材番号図	59
第14図	興道寺遺跡探査遺物実測図	23	第44図	S Z 2 石室使用石種円グラフ	60
第15図	興道寺遺跡 S X 2 川土遺物実測図	24	第45図	S Z 2 構築工程の復元図	60
第16図	周辺の小字図	25	第46図	興道寺窯出土須恵器の両分布図	70
第17図	美浜町遺跡台帳抜粋1	26	第47図	陶邑群と興道寺群の相互識別	70
第18図	美浜町遺跡台帳抜粋2	27	第48図	獅子塚古墳出土須恵器の両分布図	71
第19図	興道寺古墳群採集遺物実測図	28	第49図	獅子塚古墳出土須恵器の産地推定	72
第20図	調査区位置図	29	第50図	分析試料の両指紋図	73
第21図	グリット区割図	29	第51図	分析試料の産地推定(1)	73
第22図	調査区土層柱状図	30	第52図	興道寺群と上中群の相互識別	74
第23図	中世堆積層川土遺物実測図	32	第53図	分析試料の産地推定(2)	74
第24図	旧河原平面・セクション実測図	33・34	第54図	測定点位置図	76
第25図	S Z 1 出土遺物実測図	38	第55図	測定点(A)の定性分析チャート	80
第26図	S Z 2 平面・セクション実測図	41	第56図	測定点(a)の面分析結果	81
第27図	S Z 2 石室実測図	42	第57図	測定点(b)の面分析結果	81
第28図	S Z 2 石室遺物出土状況図	43	第58図	測定点(c)の面分析結果	82
第29図	S Z 2 石室川土遺物実測図	44	第59図	測定点(d)の面分析結果	82
第30図	S Z 3 周溝遺物出土状況図	45			

別添図目次

別添図1	調査区平面図
別添図2	S Z 1 平面・セクション実測図
別添図3	S Z 3 平面・セクション実測図

表 目 次

第1表 地質分類表	9	第8表 遺物一覧表	55
第2表 遺跡地名表	20	第9表 S Z 2 石室使用石材一覧表	59
第3表 小穴(Ⅰ期)一覧表	48	第10表 分析資料一覧表	69
第4表 捜立柱建物跡柱穴一覧表	50	第11表 測定点(A)の測定結果	77
第5表 潜列柱穴一覧表	51	第12表 測定点(B)の測定結果	77
第6表 土壌一覧表	53	第13表 測定点(C)の測定結果	78
第7表 小穴(Ⅱ期)一覧表	53・54	第14表 測定点(A)詳細分析の測定結果	78

写 真 目 次

口絵カラー 1 上 調査区周辺	本文中写真
下 調査区全景	写真 1 現地説明会風景
口絵カラー 2 左上 S Z 2 石室完掘	写真 2 調査作業風景
右上 S Z 2 石室遺物出土状況	写真 3 作業員集合
右中 S Z 3 周溝遺物出土状況	写真 4 御前塚遠景
下 古墳時代須恵器群	写真 5 田中塚遠景
	写真 6 測定点(A)のSEM写真
	写真 7 測定点(B)のSEM写真
	写真 8 測定点(C)のSEM写真

図 版 目 次

図版1 調査区全景	
図版2 調査前現況、表土除去状況、調査区基本層序、旧河道検出状況、土層断面、調査区東区・西区	
図版3 S Z 1 完掘、S Z 1 東側周溝完掘・土層断面、S Z 1 西側周溝完掘・土層断面	
図版4 S Z 1 葺石出土状況・東側周溝内遺物出土状況、S Z 1 地山攪乱穴・石材、S Z 2 完掘、S Z 2 墳丘上土層断面	
図版5 S Z 2 石室完掘・石室床面・石室内土層断面	
図版6 S Z 2 石室遺物出土状況、S Z 2 石室奥壁・前壁・左側壁・右側壁、S Z 2 墳丘上層断面	
図版7 S Z 2 墳丘除去状況、S Z 2 石室基底石・左側壁基底石・右側壁基底石、S Z 2 石室墓塙完掘	
図版8 S Z 3 完掘、S Z 3 東側周溝上層断面・西側周溝上層断面・塹丘土層断面、S Z 3 周溝内遺物出土状況	
図版9 S Z 3 周溝内遺物出土状況、SH 1~2・SK 1・SA 1 完掘、SH 1-P 1~5 半截	
図版10 SH 1-P 1 遺物出土状況、SH 2-P 1~2 半截、SK 1 検出状況・土層断面	
図版11 SK 2 完掘・土層断面、西区中世小穴群	
図版12 S Z 1 出土遺物	
図版13 S Z 1 出土遺物、S Z 2 出土遺物、S Z 3 出土遺物	
図版14 S Z 3 出土遺物、SH 1-P 1 出土遺物、SK 2 出土遺物	
図版15 中世堆積層出土遺物	

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経緯

第1項 調査原因

中山間地域総合整備事業美方地区は、県内屈指の酪農地帯を有する三方郡の農業用排水・農道・農村公園などの整備を図ることを重点におき、三方郡の農道環境整備等を一体的に実施することにより、農業・農村整備の活性化を図ることなどを目的として、福井県が事業主体となり実施されている事業である。

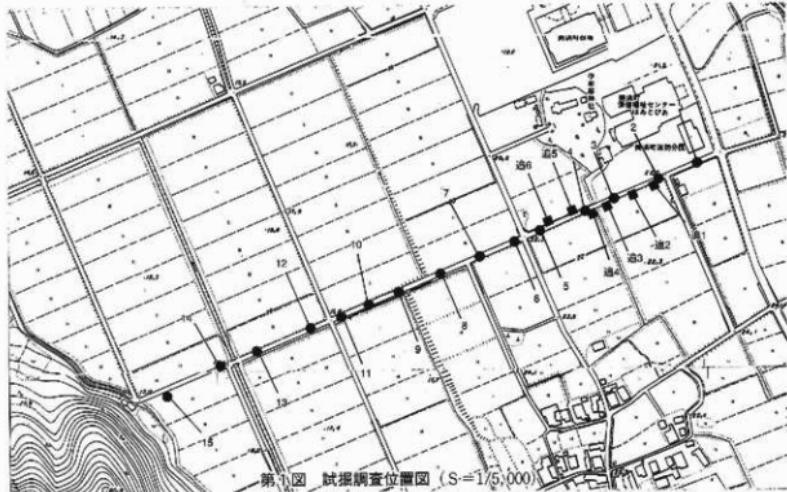
今回の調査の直接原因となった事業は農業整備事業であり、美浜町市街地を南北に縱走する町道金安線を起点として、西方の上井山まで東西に展開する延長860m、道幅7m（側溝部分含む）の農道整備工事である。平成11年度の測量設計の後、平成12年度から同14年度にかけて用地買収、路床工、舗装、付帯工が順次実施され、将来的には県営ふるさと農道緊急整備事業と合わせて美浜町金山から同佐柿までを結ぶ広域農道として整備される。

今回の調査区内に係る工事は福井県嶺南振興局二州農林部農村整備課が事業主体となり、平成12年度第2号工事として実施された。

第2項 本調査に係る試掘調査

事業主体者である嶺南振興局二州農林部農村整備課（以下、事業主体者）は福井県遺跡地図によって、事業計画地内に周知の埋蔵文化財包蔵地が含まれることを早い段階で把握されており、平成11年度の段階で試掘調査依頼が福井県埋蔵文化財調査センター（同、県埋文センター）に提出された。試掘調査は県埋文センター、赤澤徳明主査を調査担当として平成12年3月13日～14日・28日に実施された。調査対象面積は約9,600m²で、その中には周知の埋蔵文化財包蔵地、興道寺遺跡（福井県遺跡番号30073）、興道寺古墳群（同30074）、西沢遺跡（同30075）が存在した。調査面積は90m²である。

各試掘坑の概略を、県埋文センターから事業主体者に提出された「県営中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財試掘調査概要報告」から抜粋し、以下に転載した。調査箇所は第1図のとおりである。



中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財試掘調査概要報告抜粋

試掘坑 No.1 上水道管・下水道管・農業用水管の3本が埋設されていることから、これらを視認し埋設の際の掘削から残された遺跡の範囲を確認することとした。掘削の結果、現道の部分はこれらの掘削で遺跡はないものと判断される。遺物・遺構は検出されていない。

試掘坑 No.2・3 上水道管・農業用水管の2本が埋設されていることから、これらを視認し埋設の際の掘削から残された遺跡の範囲を確認することとした。ここも試掘坑 No.1と同じく現道の部分はこれらの掘削で遺跡ではないものと判断される。遺物は水道管敷設の際の埋め戻し土中に、堅密した須恵器が1点出土しているが、遺跡とは直接関係のないものであろう。

試掘坑 No.4・5 上水道管・農業用水管の2本が埋設されていることから、これらを視認し埋設の際の掘削から残された遺跡の範囲を確認することとした。ここも試掘坑 No.1・2と同じく現道の部分はこれらの掘削で遺跡ではないものと判断される。遺物・遺構は検出されていない。

試掘坑 No.6 現道の北側に農業用水管が付設されていることから、現道の密閉を確認した。約60cm程の現道の路体などを除くと黄褐色の地山が検出され、黒色の覆土の遺構が確認された。遺構密度はさばらで、路体に使用されているガラが地山の遺構検出面に食い込むなど、依存状況は悪い。また包含層は残されてなく、遺構は掘り下げていないので、遺物は出土していない。よって遺構などの時期は不明である。

試掘坑 No.7 この部分も現道の北側に農業用水管が付設されていることから、その掘削帯を確認することも合わせて、現道の中央を掘削した。約40cm程の現道の路体などを除くと黄褐色の地山が検出され、黒色の覆土の遺構が確認された。遺構としては、穴が1基検出されたのみである。また農業用水管の付設に伴う掘削巾は2.8~3.0mの幅と考えられる。先の試掘坑No.6と同じく路体に使用されているガラが地山の遺構検出面に食い込むなど、遺存状況は悪い。遺物は出土していない。

試掘坑 No.8 周辺の水田面より現道は大きく下がる部分にある。約30cm程の現道の路体を除くと黄褐色の地山

が検出されたが、遺物などは確認されなかった。先に遺構が確認された試掘坑No.6・7の検出面より1~2m低いことから、旧來の地形を大きく削平して現道を造成している可能性が高い。遺物は出土していない。

試掘坑 No.9~11 いずれの試掘坑も1~1.4mの深さまで掘削したが、全て黄褐色土と黒色土が混ざった客土で、試掘坑No.10では土管の破片が出土している。このことから這の両側の水田から高い部分の裏土は客土で盛られた斜路であると推定される。

試掘坑 No.12~13 現道の北側に農業用水管が付設されているので、現道の南側を掘削した。100cmの路体と黒色土客土の下に30cmの黒色土の自然堆積層があり、さらにその下では灰色の砂層が検出され、いずれも掘削深度150~180cmで湧水した。遺物は出土していない。

試掘坑 No.14~15 今回現道以外の耕作地で地盤者の承諾を得て、試掘を実施した。20cmの耕作土を除去すると50cmの砂層となり、その下は20~30cmづつの黒色粘質土と青灰色粘質土となり、掘削深度120cmで湧水した。遺物は出土していない。

追加試掘坑 No.1 現道の試掘坑No.2の南側、植樹予定地の水田部分に対応した。耕作土・客土の下、60cmで黒褐色土から黄褐色土へと変化する層となった。黒褐色土は一見すると遺物包含層に類似するが、遺物・遺構は検出されていない。

追加試掘坑 No.2・3 耕作土の直下40cmで黒褐色土が検出され、次第に黄褐色土へと変化する。遺物・遺構は検出されていない。

追加試掘坑 No.4 現道両側の拡幅予定地の水田部分で対応した。耕作土・客土の直下70cmで黒褐色土が検出された。試掘坑No.6に伴う包含層に対応すると考えられる。遺物・遺構は検出されていない。

追加試掘坑 No.5・6 現道の北側拡幅予定地の水田部分で対応した。追加試掘坑No.4の現道反対側70~80cmの客土下で黄褐色のレキ・砂層となる。遺物・遺構は検出されていない。

第3項 開発調整

試掘調査によって、事業計画地内において周知の埋蔵文化財包蔵地、興道寺古墳群（興道寺遺跡）の存在が明らかとなったものの、実質的に事業計画の変更が困難であったため、文化財保護法に基づく発掘調査の必要が生じた。滋二農第890号において文化財保護法第57条の3第1項に基づく発掘の通知、及び発掘調査依頼書が事業主体者から福井県教育委員会（同、県教委）に提出されるとともに、教文第16-101号において県教委から事業主体者に発掘調査の実施が指示されている。

しかしながら、発掘調査の調査主体となる県埋文センターは、若狭縦貫自動車道（近畿自動車道敦賀線）建設工事等に伴う調査対応により、本事業に伴う緊急調査に対応できない状況にあった。

このことから、教文第904号において福井県教育文化課（同、県文化課）より、滋二農第890号において事業主体者より興道寺古墳群の発掘調査実施について美浜町教育委員会（同、町教委）に依頼があった。そのため、県文化課、町教委、事業主体者と間で度数の協議調整を行った後、町教委が調査主体となり、発掘調査から報告書刊行までを実施することとなった。

のことから、事業主体者と美浜町長との間で三方郡美浜町興道寺地係内における埋蔵文化財包蔵地内発掘調査業務に関する委託契約を締結するとともに、文化財保護法第58条の2第1項に基づく届出として美教乙第568号において町教委から県教委に埋蔵文化財発掘調査届出書を提出した。

第2節 調査の経過

第1項 平成12(2000)年度調査

調査区面積は1,436m²である。事業主体者の事前土工による表土除去を、平成12年10月5日より開始し、20~60cm程の現耕作土・現道アスファルト舗装・盛土の除去を行った上で地山層、及び中世堆積層を露出させた。

同10月11日より調査作業員による人力での精査・掘削作業を開始した。しかしながら、調査区内は東に向かって急激に地山層が下降し、その上層に土砂堆積が厚くなる様相が確認されたことから、町教委が借り上げた重機によって中世堆積層を慎重に除去し、調査作業員による精査を行うといった慎重作業を余儀なくされた。これに加えて埋没品が検出される調査の進展に伴って試掘調査内容と咀嚼することが明らかとなり、11月中旬までに現地調査を終了した上で調査区を事業主体者に引き渡すという当初の委託契約の範囲内の調査完了が困難となった。従って、調査期間の延長と調査費用の増額を求めて、平成12年10月下旬に事業主体者に協議依頼書を提出し、事業主体者と美浜町長との間で発掘調査業務に関する変更契約を締結する事態となった。

調査作業は好天に恵まれ、古墳3基、獨立柱建物跡2棟、横列1基、土壙2基、小穴51基、旧河道を検出した。平成12年12月3日に地域住民を対象とした現地説明会を実施した後、本格的な遺構図化作業を開始した。遺構平面図化については、事業主体者の発注により株式会社かんこうに業務委託した。同12月末日を持って現地を撤収した。

以下に調査日誌を抄録する。



写真1 現地説明会風景

調査日誌抄

10/ 5	嶺南振興局事前土工による表土除去 (~ 9日)	11/ 6	西区S Z 1周溝の掘削
10/10	トータルステーションによる調査基準杭の設置 プレハブ・仮設トイレ・調査機材等搬入 諸準備	11/ 7	西区S Z 1東周溝のS Z 2小石室を検出
10/11	調査作業員による人力での掘削作業を開始 (廃土処理場の運営、調査区壁面整形 (~13日))	11/10	遺構内遺物出土状況図化開始
10/16	西・東区の地山層精査開始 小穴検出	11/14	西区S Z 2小石室の図化開始
10/17	西区にて古墳周溝、東区にて旧河道・横列等を検出	11/15	調査区セクション図化開始
10/19	柱穴精査	11/22	各遺構平面図化開始
10/20	降雨のため、出土遺物洗浄	11/28	空撮準備 (遺構ライン入れ)
10/23	降雨のため、出土遺物洗浄	11/30	空撮 調査区遺構写真撮影
10/24	京区にて古墳周溝を検出	12/ 1	西区S Z 2埴丘断ち削り
10/26	京区東側の堆積層を小観重機にて除去	12/ 3	現地説明会 西区S Z 2填土のセクション図化
10/27	京区東側の精査 各遺構の半蔵掘削、及びセクション図化・写真撮影開始	12/ 4	空撮出張のため現場休止 (~ 8日)
		12/12	西区S Z 2小石室の解体、平面・断面図化開始
		12/14	補足箇所整備 (~22日)
		12/27	プレハブ等搬出 現地調査終了



写真2 調査作業風景



写真3 作業員集合

現地調査終了後、美教乙第3号において敦賀警察署長に埋蔵文化財発見届を、美教乙第4号において県教委に埋蔵文化財保管証をそれぞれ提出するとともに、基礎的な整理作業の実施を求めて、美教乙第685号において事業主体者に協議依頼書を提出し、事業主体者と美浜町長との間で発掘調査業務に関する再変更契約を締結した。整理作業は遺物洗浄、注記、出土遺物の修理・復元までを行った。

第2項 平成13(2001)年度調査

平成13年度は本格的な整理作業と報告書刊行を行うため、事業主体者と美浜町長との間で三方郡美浜町興道寺地係内の埋蔵文化財包蔵地内整理作業等業務に関する委託契約を締結した。諸作業は、平成13年5月17日から平成14年3月20日までの期間において、現地調査図面の調整、トレース、及び遺物実測、トレース、報告書作成までを行った。

整理作業に係り、出土耳環の元素分析を(財)若狭湾エネルギー研究センターに、出土須恵器等の胎土(蛍光X線)分析を大谷女子大学文学部文化財学科 三辻利一氏に依頼した。また、耳環の保存処理を(株)吉田生物研究所に、一部の出土遺物の実測を(有)前橋文化財研究所に、一部の出土遺物の写真撮影をAVプロジェクト 武藤茂樹氏に、遺跡地周辺の地形条件の把握を京福コンサルタント(株)にそれぞれ委託した。

第2章 遺跡の立地と周辺の環境

第1節 周辺の地理的環境

京福コンサルタント株式会社 地質調査部課長 烏居 直也

第1項 若狭地方の地形

日本列島は、新生代第三紀末頃から第四紀にかけて始まったごく新しい地殻変動（ネオテクトニクス）を受けており、これは現在にまで継続している。この中で、若狭地方を含む近畿地方北部は、新生代第四紀に広汎な沈降運動のあった地城として知られている。

この広域的沈降地帯は「北近畿低地帯」と呼ばれており、瀬戸内海から琵琶湖周辺にかけて広い内湾～湖沼が形成され、大阪層群・古琵琶湖層群といった地層が堆積し、さらに大阪・濃尾平野、京都・奈良・近江盆地などの低地帯や若狭湾のリアス式海岸が形成された。

また沈降に伴い山地標高は低くなり、本州島の中ほどにあって東の飛騨山脈・木曾山脈、西の中国山地に挟まれた北近畿には、標高1,000m以上の山地がほとんどない。そして、日本海～太平洋間の距離が短くなっている。特に敦賀～名古屋間は直線距離で100kmを切っている。

ネオテクトニクスによる北近畿低地帯の形成は、険阻な山地が少なく規模の大きい低地が隣接して発達するという地形的特徴を生み、このことが歴史時代における近畿地方の発展の大きな要因となっている。

このような中にあって若狭湾は典型的な沈水地形（リアス式海岸）であり、海岸には山地が直接没して岩礁が続き、流入河川に沿って狭長かつ小規模な海岸平野が点在している。

こういった地形的特徴に加え、若狭湾沿岸地方は対馬暖流の影響も受け、以下のような自然環境上の特徴を有している。

- ① 気候地帯区分は山陰型に属し、冬季の積雪量がさほど多くない。
- ② シイノキ綫に代表される暖帶性常緑広葉樹林の分布限界といった、植物の区形地理学的な分布性の特徴がある。

第2項 若狭地方の地質

1. 基盤岩の地質

(ア) 丹波層II型地層群

若狭地方を含む北近畿地方の基盤岩の大部分は、「丹波層群」または「丹波層II型地層群」と呼ばれる、中生代ジュラ紀の付加地質体から成っている。本地質体は、古生代石炭紀以降に海洋底地盤上に堆積した海成層（泥岩・砂岩・チャート・石灰岩）および火山岩類（玄武岩などが変質した緑色岩）が、サブダクション帯における付加作用によって当時の日本列島に付加した地質コンプレックスであり、美浜町域には「脊並コンプレックス」という緑色岩・チャート・混在岩主体の堆積岩コンプレックスが広く分布している。

(イ) 花崗岩類

耳川左岸の雲谷山系や敦賀半島に分布し、中生代白亜紀から新生代古第三紀にかけて送入した深成岩類から成っており、黒雲母花崗岩を主体としている。この花崗岩類の風化したマサ土と呼ばれる風化土はきわめて浸食されやすく、三方～美浜地域に分布する第四系の主要な碎屑物供給源ともなっている。

2. 第四系の分布

三方～美浜地域には、次のような第四系洪積統の分布がみられる。

- ① 三方町倉見から美浜町気山にかけての国道27号東側の丘陵地帯
- ② 気山から大藪・矢筈・金山にかけての久々子湖東岸一帯
- ③ 郷市から興道寺～佐野にかけての耳川左岸側一帯
- ④ 河原市・南市・栄・小倉から中寺・東山・宮代・安江にかけての耳川右岸側一帯
- ⑤ 太田～佐田付近および北田付近

これらはいずれも新生代第四紀更新世に堆積した陸水成層であり、全体として南西側から北東側へ向かって、より新期の地層が形成されているようである。

第3項 調査地周辺の第四紀地形

美浜町中心部付近における平野～丘陵地形を検討するため、第2図のとおり5m・10m・20mの等高線を抽出した。同図および諸文献に基づき、次のような地形要素を抽出した。

① 地形面Ⅰ

美方高校以南の一段と高くなった丘陵地である。標高は20m～30m台で、開析が進み、これにより平坦性もさほど顕著でなくなっている。高位段丘面に対比されている地形面であり（三浦ほか 1969）、三方町藤井にかけて分布している。

② 地形面Ⅱ

気山～大藪～金山～矢筈にかけて広く分布しており、平坦性がよく保存されている。全体として北にゆるく傾斜し、標高は5～20mで特に5～15mの範囲が多くを占める。中位段丘面に対比されている（三浦ほか 1969）。

③ 地形面Ⅲ

耳川左岸域に上野から興道寺、郷市を経て洪水山まで細長く分布する地形面で、興道寺付近では比較的明瞭な段丘地形を示すが、北に向かって不明瞭になっていく。また特に興道寺付近では耳川側（東側）が若干高く、わずかに傾斜しているようである。低位段丘面に対比されている（三浦ほか 1969）。

④ 三方断層

地形面Ⅰから地形面Ⅱにかけて、その西側急傾斜部に沿って三方断層が通過していると推定される。本断層は確実度Ⅰの活断層であり、高角度西落ち逆断層である。なお、1662年（寛文2年）において三方地域を襲った地震に伴い、三方五湖付近が全体として北東側が隆起・南西側が沈降するという変動を生じているが、これは三方断層の活動変位に起因していると考えられ、三方断層は地震断層である可能性もある。

⑤ 雲谷山東麓断層群（佐野）

活断層（確実度Ⅱ）で、興道寺集落西方から佐野にかけてのびる西落ち断層である（岡田ほか 2000）。記載根据は興道寺における低断層崖、上野・野口西方における河谷の埋積などである。

なお、この断層群には佐野のほかに雲谷、岸名（いずれも確実度Ⅰ）がある。

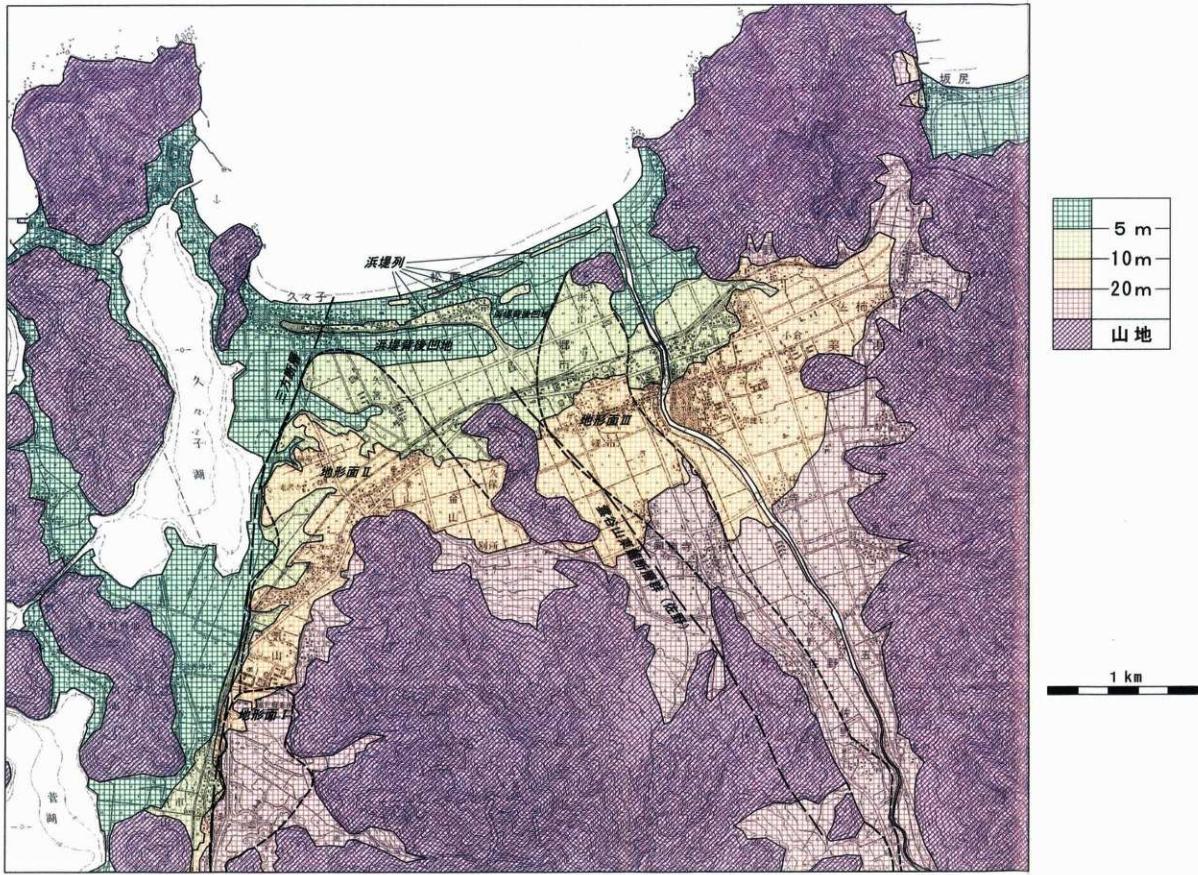
⑥ 浜堤列

海岸付近に2列認められる。いずれも標高5m前後で、海側のおそらく新期と思われる浜堤は東側へ、陸側の古期と思われる浜堤は西側へやや分布が偏っている。浜堤付近には松原や久々子といった集落の立地がみられる。

なお、浜堤列や砂丘の発達は、若狭地方の海岸ではごく普通に認められる。

⑦ 浜堤背後凹地

浜堤列の背後には凹地上の低地がみられる。耕作地として利用され、集落は立地していない。



なお、繩文海進当時の汀線はおむね 5m 等高線～10m 等高線の間と思われる。当時においては、郷市から矢筈にかけての地域に汀線とその背後の海岸平野が広がり、浜堤列は砂州となって、背後凹地は久々子湖に連続する閉鎖性が高く潟湖に近い内湾であったと推定される。

第4項 調査地周辺の第四系

1. 第四系の分布

第四系を中心とした美浜町中心部付近の地質図を第3図に示し、第1表にまとめる。

地質時代	地層名	主な分布地	地質・土質	対比
新生代 第四紀	沖積層	三方ヶ瀬海岸	軟弱粘性土主体	沖積層
		浜堤背後凹地	粘土・シルト・砂・礫	
		耳川沿い	砂礫土	
		土井山周辺	ゆるい砂質土主体	
		佐袖付近	比較的軟弱な粘性土主体	
	浜堤砂層	浜堤列	砂質土	
更新世	岸邊性堆積層	谷端末瀬付近	礁質土主体の中間土	低位段丘
	低位段丘	耳川両岸	玉石の混じる砂質土主体	
	氣山層	氣山～大藪～金山～久慈、別所	粘質土・礁質土	
	二ノ瀬層	氣山	巨～大礁層	
第四紀	基盤岩	山地	泥岩・緑色岩・花崗岩など	高位段丘

第1表 地質分類表

また、美浜平野を横断する方向で A-B 断面（第4図）、耳川を遡る方向で C-D 断面（第5図）の2本の地質断面図を作成した。なお、参照したNo 1～No 28 のボーリング柱状図を第6図に示した。

これらは、既往地質文献に加え、下水道事業その他の目的で実施された地質調査ボーリングデータにもとづき作成したものである。以下、地質図および地質断面図をもとに第四系の地質各論について述べる。

2. 第四系の地質各論

① 三方ヶ瀬層

三方ヶ瀬層は、花崗岩やホルンフェルス・砂岩・泥岩などの巨～大礁を主体とする礁層で、高位段丘の特徴である「クサリ礁」をしばしば含んでいる。

② 気山層

氣山層は、雲母片の混入が目立つ比較的低塑性の粘性土を主体とし、上部では礁質土が優勢となる（第4図参照）。腐植物が混入する一方で貝殻片などは見られず、沼澤のような静穏な環境で堆積した陸水成層と推定され、現在の久々子湖から土井山付近にかけて湖沼域が広がっていたことをうかがわせる。なお、本層の粘性土はシルトを主体とした低塑性土で砂質分の混入も目立つもので、例えば土器の材料土としてはあまり優れているとはいえない。

③ 低位段丘礁層

耳川の河岸段丘礁層で、花崗岩や緑色岩の玉石が混入する砂礁を主体としている。從来文献では耳川左岸域にのみ分布が記載されていたが、ボーリングデータから耳川右岸域にも広く分布することが確認された（第4図参照）。小倉付近にはやや厚い粘性土も挟在しており、氣山層相当層が下位に伏在している可能性もある。

なお、低位段丘礁層分布地域においては、低位段丘礁層を被覆して 1m 前後の薄い粘性土が地表付近に分布することがしばしばある（ボーリング No 9, 10, 11, 21 など）。この粘性土層は郷市周辺と小倉付近および興道寺や佐野の一部でみられるが、分布状況（第4図参照）から沖積層と思われ、いずれも粘性が非常に強いという特徴をもつ。粘土鉱物を多量に含有しているものと推定され、土質の現場観察内容および後背地の地質状況から推定すると、カオリナイトやハロイサイトのような花崗岩類の風化粘土鉱物が主体ではないかと思われる。これらの粘土鉱物は集積すれば陶土として利用されるものであり、膨潤性の大きさ

いスマクタイト系粘土鉱物の含有が少なければ、土器材料として好適である。低位段丘面が洪水・山崩れ等の自然災害の危険が少なく地盤のよい乾いた平坦面であるという居住に適した地域であることに加え、土器材料として適した粘土層が地表直下に分布していることは、早期の集落立地を促したことうかがわかる。

④ 岸堆性堆積層

谷部末端付近に分布し、礫質土や礫混り粘性土といった中間土から成る。

⑤ 沖積層

沖積層は、分布地域・土質および推定される形成過程により、大きく5つに分けられる。

(ア) 三方五湖沿岸

三方断層以西の地域は、顯著な沈降運動のため、厚さ10m以上に及ぶ軟弱粘性土を主体とした沖積層が堆積している（第4図参照）。ボーリングNo1では深度7~11m付近に貝殻片の混入する海成軟弱粘土が確認されていることから、主に繩文海進以降の堆積物と推定される。本ボーリング地点では深度7m付近から上位は貝殻の混入がなく、土質も粘土→シルト→砂と次第に粗粒化していくことから、繩文海進後の海退により湖となり、次第に堆積が進んで陸化していった状況がうかがえる。

(イ) 浜堤背後凹地

郷市・矢筈・松原・洪水山に囲まれた浜堤背後凹地には、ボーリングNo28において、層厚4~5m程度の沖積層が確認されている。比較的軟弱な砂・粘土より成り、薄い腐植土層を挟む。全体としては上方に向かい細粒化する傾向があり、砂質土層が堆積する程度に水流のある内湾のような環境から、より閉鎖的な湖沼のような環境へ変化したことが推定される。すなわち、繩文海進時において海域と連続した人々の潮が松原へ郷市付近にまで拡大し、これが浜堤の形成により内消化したものが、海退に伴い孤立した湖沼となって、やがて細粒土の流入により堆積されたという変遷がうかがわれる。

(ウ) 耳川沿い

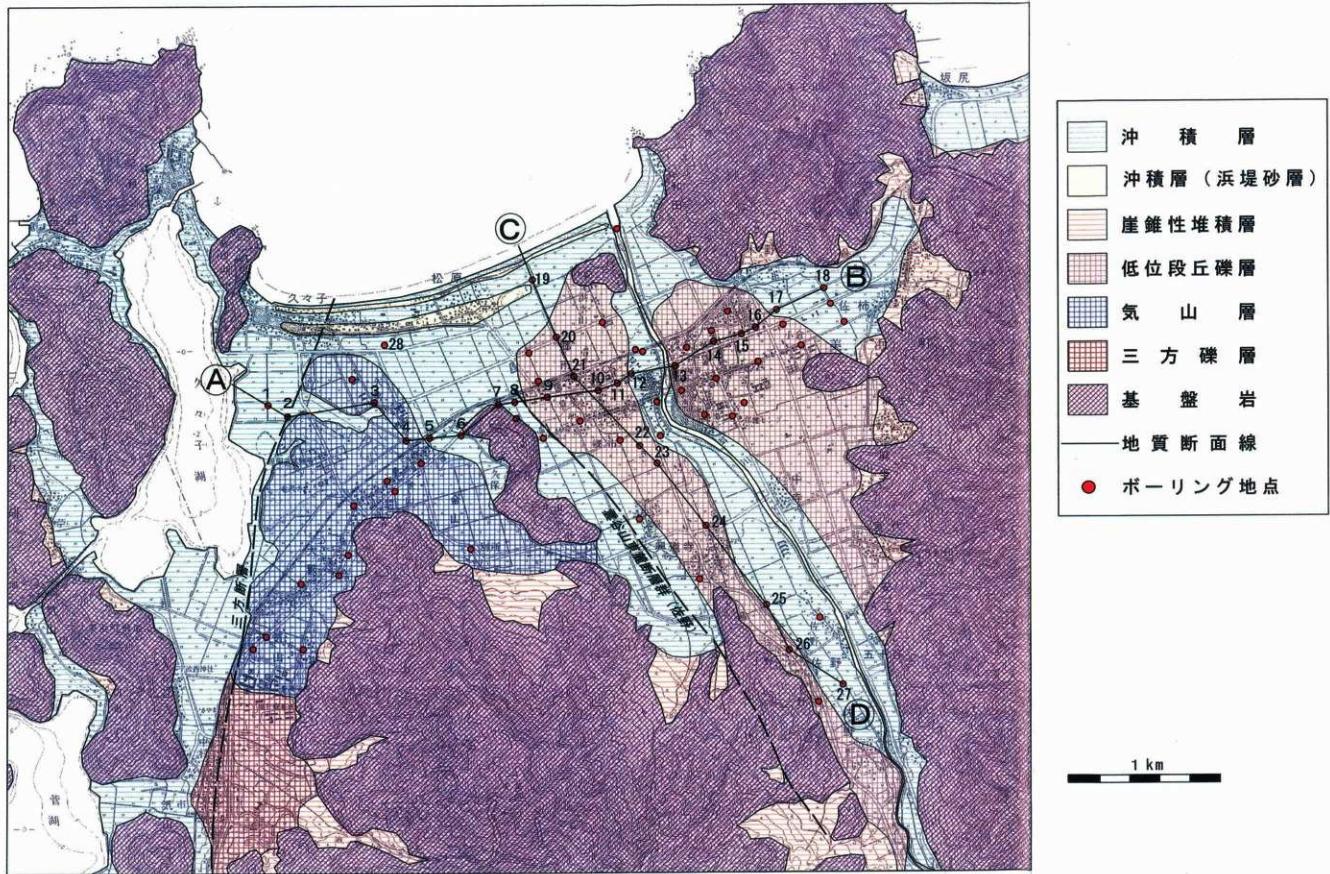
耳川沿いには砂礫を主体とした河成礫層が分布しているが、その幅は狭く、完新世以降の耳川流路が現流路付近に限定され、その氾濫原はきわめて狭いものであったことが推定される。これは、耳川流路が全体として高い直線性を保っていることからもうかがわれ、両岸を低位段丘礫層に挟まれているため、沖積平野を流下する河川のような蛇行性を持ち得なかったものと考えられる。

なお、佐野～上野間から興道寺東側に至る低位段丘礫層分布東端付近、すなわち低位段丘の段丘崖に沿って、若干標高が低くなった部分が帶状に伸びており、これは耳川流路跡である可能性が考えられる。

(エ) 土井山周辺

土井山の東西には、山裾に沿ってゆるい砂質土から成る沖積層が分布する（第4図参照）。土井山付近の地形的高まりが低位段丘礫層堆積当時の耳川流路の接近を阻んだことも考えられるが、前述の雲谷山東麓断層群（佐野）の変位活動により形成された小規模な断層谷が埋積されたものである可能性が高い。現在この土井山東麓には小河川が流下しているが、この河川の流路は、圃場整備などに伴い人为的に改変されているものの全体としては雲谷山東麓断層群（佐野）の西側に沿っており、断層谷を流下しつつこれを埋積していったものと推定される。ボーリングNo7やNo8では、深度6~7m以浅の沖積層が上位に向かって明瞭に細粒化していることから、河川の運搬力が徐々に弱まる中で断層谷が埋積されていった状況がうかがわれる。

なお、低位段丘礫層の出現標高からみて、この断層はボーリングNo8～No9間に通過しており、両ボーリング地点で確認された低位段丘礫層中には層準対比ができるような地層が含まれていないため明言はできないが、本断層が低位段丘礫層を切っている可能性は非常に高く、その落差は5~6mと



第3図 地質区分平面図 ($S=1/25,000$)

(A)

(B)

久々子湖

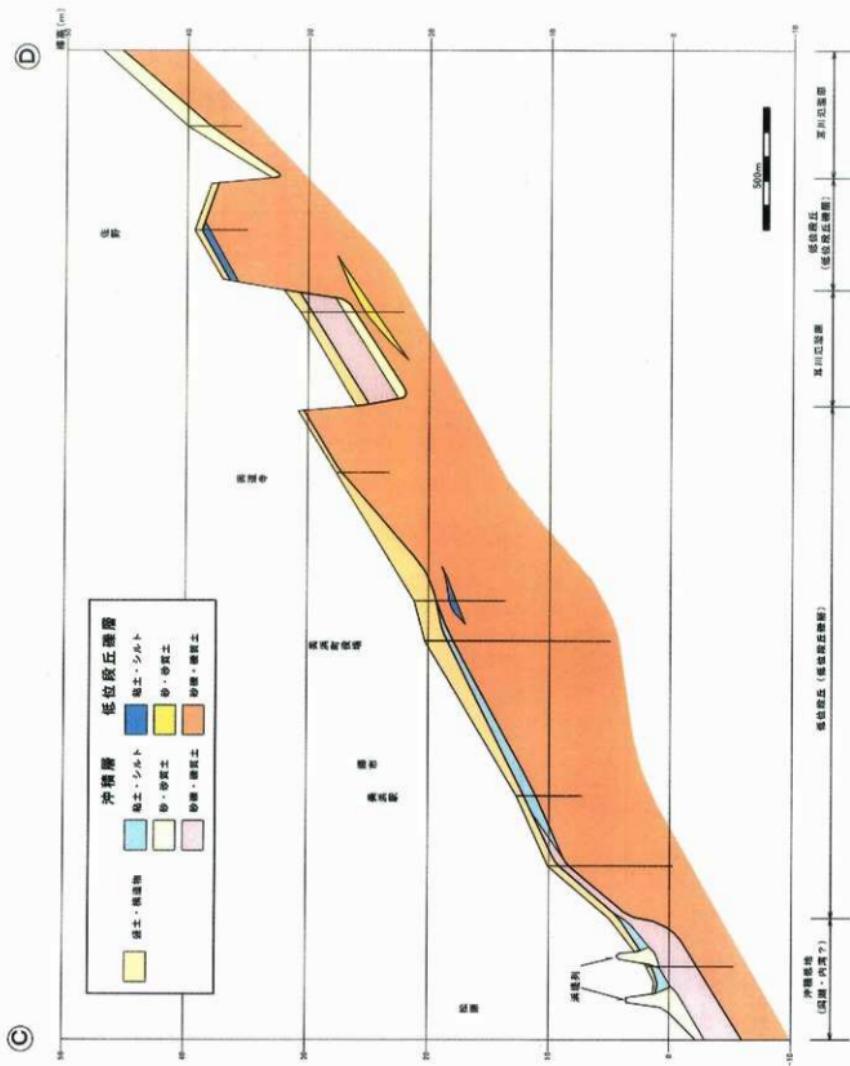
佐
楠
高
度
(m)
小
倉
市
河
原
市
耳
川
市
綾
市
土
井
山
金
山

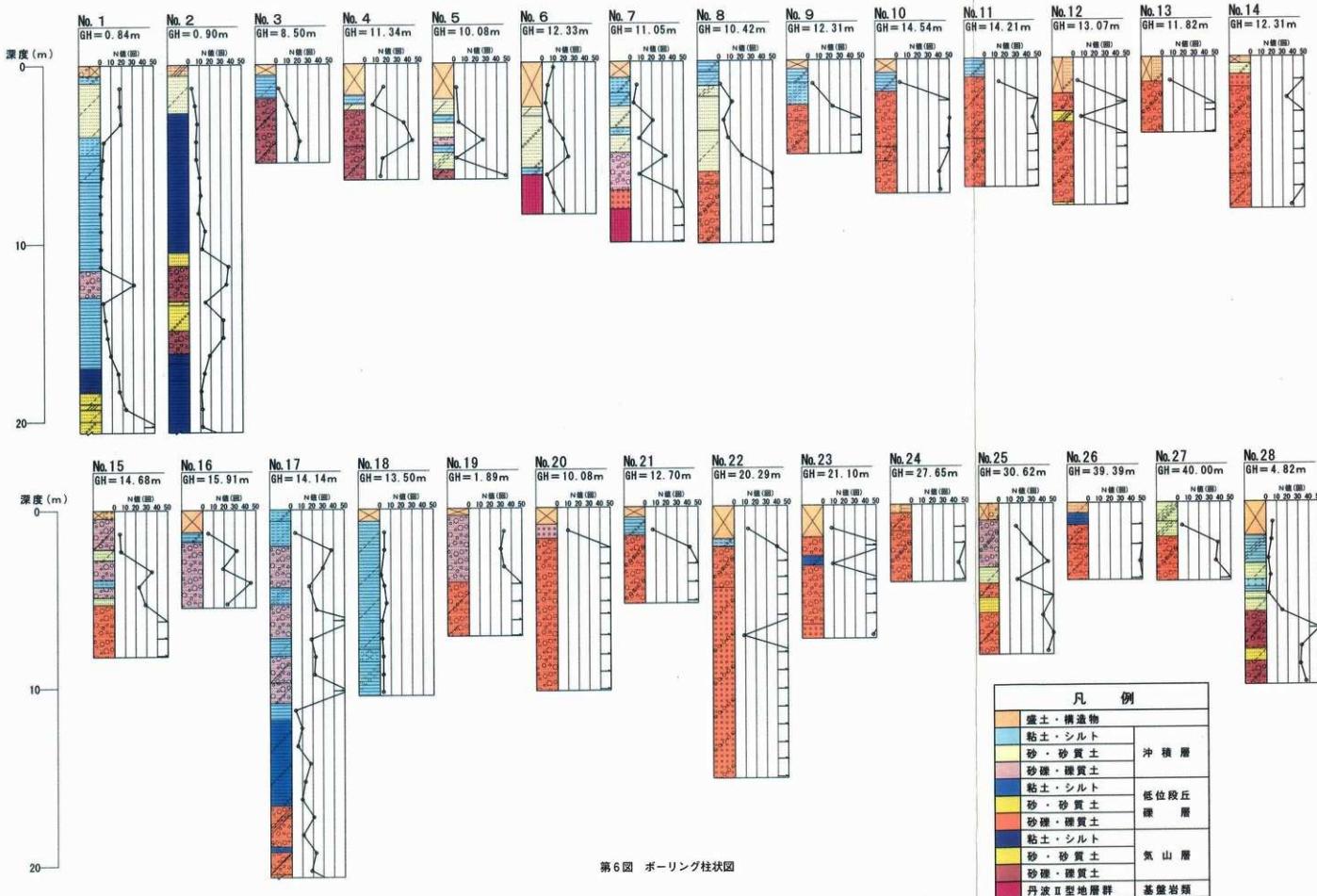
第4図 地質断面図(A-B) (S=1/20,000)

13



三方
面
海
底
地
形
地
形
谷
海
底
山
脈
(北西)
基盤山脈
(北東)
先駆断層
主断層系
おばれ谷
おばれ谷





第6図 ポーリング柱状図

判断される。従って、確実度Ⅱとして記載されているものの（岡田ほか 2000）、本ボーリング資料を加味すれば確実度Ⅰの活断層とみて差し支えないと考えられる。

(オ) 佐柿付近

第4図に示したように、低位段丘疊層は小倉付近で急速に地下に潜り、10mを超える軟弱粘性土を主体とした沖積層に被覆されている。耳川沿いに形成された段丘疊層背後地がオボレ谷となり、軟弱粘性土が堆積していったものと推定される。

3. 集落立地からみた周辺の地形・地質

これまで述べてきた地形・地質状況より、歴史時代における集落立地適否という観点から概観する。

① 沖積層分布地域

地形面Ⅰ～Ⅲといった丘陵地・高台は、地盤が硬質であるものの岩盤ではないから地面を掘ったりしやすい上に広葉樹などの木も繁茂しやすく、地下水位も比較的深いため湿润でなく高台で風通しもよいので総じて乾燥しており、かつおむね平坦な地形面なので敷地が確保しやすいのに加えて洪水・山崩れ等の自然災害の危険が少ないといったことから、集落立地には極めて適した地域であると判断される。

特に前述した郷市周辺をはじめとする低位段丘面上の粘性土分布地域は、土器材料として適した粘土層が地表直下に分布しているので、地形・地質的好条件とあいまって早期の集落立地を促したことを見かがわせる。また、地形面を形成していないものの、耳川右岸地域の低位段丘疊層分布地域も地盤が良好で、集落立地には適していたと判断される。

② 沖積層分布地域

沖積層分布地域でも比較的集落立地条件を備えていると判断されるのは耳川沿いおよび浜堤列付近である。

耳川沿いの地盤は軟質で良好である。ただし、耳川の氾濫原に入っていると洪水の危険性があるため、集落の定着が困難となる。地形面Ⅱの東麓には耳川の流路跡が伏在している可能性があることは前述したが、ここには佐野～上野間の集落無立地区間をはじめ集落が立地していない。このことは、前述の可能性を示唆している。

浜堤列上には松原や久々子の集落が立地しており、網文海進後の海退以降にはここに集落が開け得る条件は確保されたものと思われる。ただし、生活水の確保に問題がある。

これら以外の地域は、三方五湖沿岸（三方断層の埋積により形成された顕著な軟弱地盤）、浜堤背後凹地（内湾～湖沼の埋積された軟弱地盤）、土井山周辺（雲谷山東麓断層群により形成された軟弱な断層埋積谷）、佐柿付近（オボレ谷の軟弱地盤）などいずれも地盤不良で、地下水が浅いことによる湿润状態なども加わって、集落の立地に適しているとはいえない。

【参考・引用文献】

三浦春・若狭共同体研究グループ 1969 「福井県若狭地方の洪積開拓」『福井大学教育学部紀要Ⅱ』 19, 57-70

岡田篤正・東郷正美 2000 「近畿地方の活断層」 395p

第2節 周辺の歴史的環境

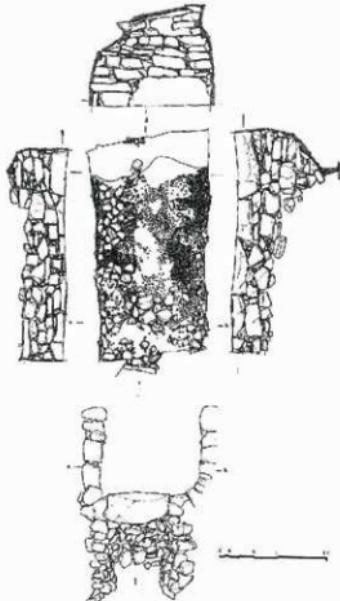
第1項 耳川左岸域の遺跡概要

耳川左岸域では、低位河岸段丘面を中心に密な遺跡分布がみられる。この段丘上には、興道寺遺跡・藤ノ木遺跡といった古墳時代から律令期までの集落遺跡（居住域）、興道寺窯跡といった古墳時代の生産遺跡（生産地）、獅子塚古墳・興道寺古墳群といった古墳時代の墳墓遺跡（墓域）、興道廃寺遺跡といった白鳳時代から律令期にかけての寺院遺跡（信仰域）といった、人間活動において不可欠な諸要素がみられるなど、当時の社会構造を探る上で興味深い様相を呈する遺跡立地が認められる。

興道寺遺跡（美浜町興道寺） 弥生時代から中世までの集落遺跡。第3章第1節にて後述した。

藤ノ木遺跡（美浜町郷市） 古墳時代から中世までの遺物散布地。平成13年（2001年）3月、美浜町教育委員会による試掘調査において、堅穴建物跡・土壙などが検出され、伴って6世紀前半（MT15～TK10型式期）の須恵器杯・壺類、土師器壺、浜捕IIA式製塗土器などが出土している。

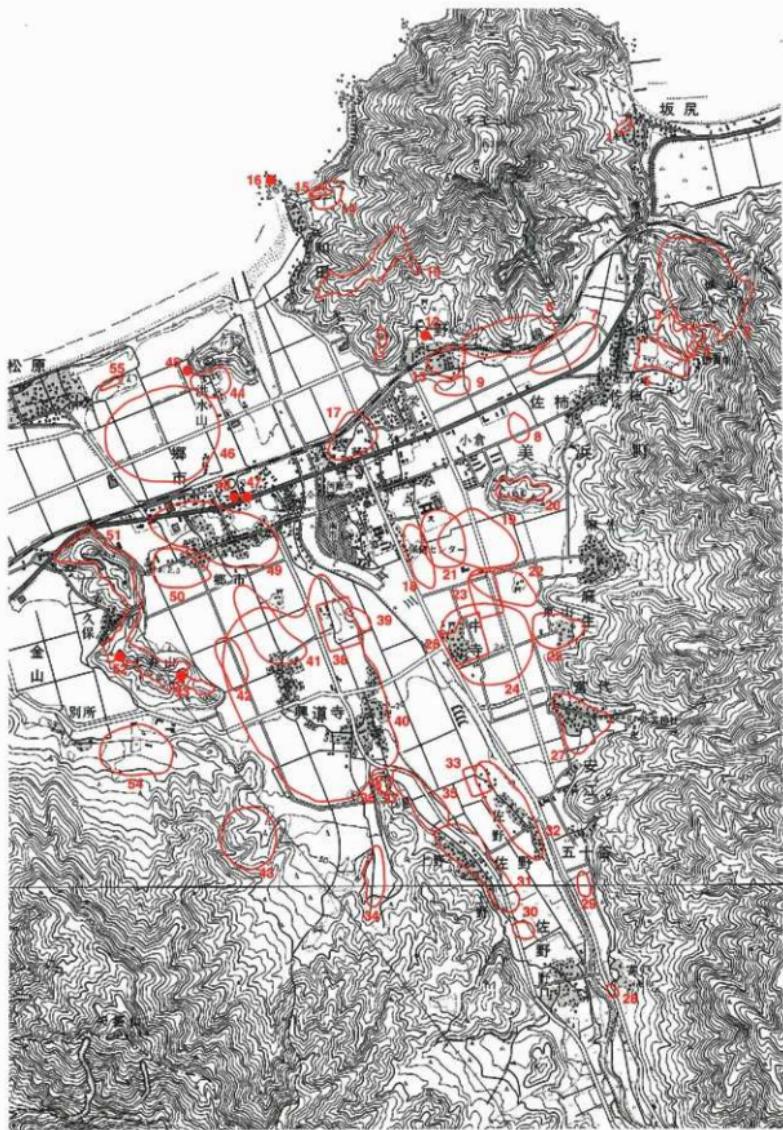
獅子塚古墳（美浜町郷市） 全長32.5mの墳丘規模であり、前方部を西面させる前方後円墳である。後円部に南に開口する北部九州系の横穴式石室をもち、明治30年（1897年）、旧東京帝室博物館若林勝邦氏による調査によって、玉類、馬具・環鈴・鉄剣・鐵鎌・曲刃鎌・鹿角装刀子などの鉄製品、角杯形須恵器2点を含む須恵器類が出土した。昭和53年（1978年）の美浜町教育委員会・若狭考古学研究会による主体部の調査では、前回の調査で見逃された須恵器、玉類、鉄製品の副葬品が出土した。また、京都帝国大学浜田耕作博士、福井师范大学上田三平教諭らによって大正6年（1917年）から2年間にわたり実施された史跡勝地調査において調査が加えられたことや、平成9年（1997年）の美浜町教育委員会による立会調査によって古墳西側の周溝の一部が検出されるなど、獅子塚古墳の既往の調査例は多い。耳川流域における6世紀初頭（MT15型式期）の首長墓と想定されている。



第7図 獅子塚古墳石室実測図 (S=1/100)
入江 1986より転載



第8図 獅子塚古墳石室出土遺物実測図 (S=1/8, 器台 S=1/12)
入江 1986より転載



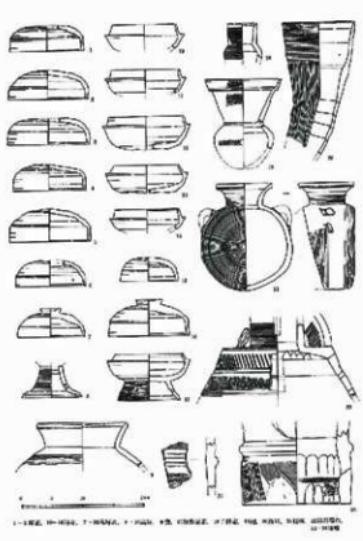
第9図 遺跡分布図 ($S = 1/25,000$)
【平成4年3月1日 国土地理院発行 1:25,000 地形図 平瀬・三万を改変】

番号	県番号	遺跡名	種別	地区	現況	現状	時期	探査・出土品	備考
1	30103	後原遺跡	散在地	飯田市	現地	集落	古墳・奈良		
2	30045	宮古城址	城跡	佐藤	山林	元存	較古		町指定史跡
3	30047	城崩跡御上船跡	城跡	佐藤	山林	元存	較古		
4	30046	高砂古跡群	古墳群	佐藤	山林	全被	古墳		
5	30104	佐藤奉行所跡	城跡	佐藤	山林・水田・集落	元存	近世		
6	30105	国王寺跡	寺院跡	佐藤	山林	全被	中世?		
7	30068	森神鹿頭遺跡	散在地	佐藤	水田		平安～中世	圓泡器・製塙土器・陶器	
8	30049	町田唐跡	散在地	佐藤	水田		中世	土師器	
9	30050	町田虎跡	散在地	佐藤	水田		平安～中世	圓泡器・上部器・陶器	
10	30052	天王山西古跡	城跡	木曾	山林	完存	較古		
11	30053	木戸古跡群	古跡群	木曾	山林	次存	古墳		
12	30051	木戸神社古跡	古跡	木曾	山林	完存	古墳		
13	30106	木野東跡	散在地	木曾	梯地・集落		古墳～中世	須恵器・土師器・製塙土器・陶器	
14	30107	和田古跡群	古跡群	和田	山林・焼地	半壊	古墳		
15	30108	和田古跡群	古跡群	和田	山林・焼地	完存	近世末		
16	30115	和田宍戸古跡群	古跡群	和田	山林	半壊	近世末		
17	30054	家郷人古跡群	散在地	河原町	水田・集落		古墳・中世	須恵器・土加古・製塙土器	
18	30055	笠橋遺跡	散在地	麻生	水田・集落		古墳・奈良	須恵器・土師器・陶器	
19	30056	秋名古跡群	散在地	麻生	水田		古墳・中世	須恵器・土師器・製塙土器・陶器	
20	30057	高牛古跡	城跡	麻生	山林	半壊	較古		
21	30109	高牛六箇跡	散在地	麻生	水田	全被	古墳		
22	30058	米田遺跡	散在地	麻生	水田		古墳・中世	須恵器・土師器・陶器	
23	30110	御田古跡	散在地	麻生	水田		中世		
24	30059	御田古跡群	散在地	麻生	水田・集落		古墳～平安	須恵器・土師器・陶器・土器	
25	30061	仁比田遺跡	散在地	麻生	水田・集落		古墳・中世	須恵器・土師器・陶器・土器	
26	30060	本塚遺跡	散在地	中野	水田・集落		較古		
27	30061	穴代遺跡	散在地	西代	水田・集落		古墳・平安～中世	須恵器・土師器・陶器	
28	30063	寺戸遺跡	散在地	寺戸	水田	弥生	鍛冶形石劍		
29	30112	五十谷遺跡	散在地	寺戸	水田	平安	須恵器・土加古		
30	30064	西野遺跡	散在地	佐藤	水田		平安～中世	須恵器・陶器	
31	30065	上野遺跡	散在地	佐藤	水田・焼地・集落		古墳～平安	須恵器・土師器・製塙土器	
32	30066	段ノ下遺跡	散在地	佐藤	水田・集落		古墳・中世	須恵器・土師器	
33	30111	大塚古跡	城跡	佐藤	水田・集落		中世	土師器・須恵器・陶器	
34	30067	等ノ口遺跡	散在地	鍋居寺	水田	平安		須恵器・土師器・陶器	
35	30068	高岸古跡	散在地	鍋居寺	水田		古墳・平安	須恵器・土師器	
36	30069	鍋居古跡	散在地	宮	燒地		古墳	須恵器	
37	30070	高塗古跡	散在地	宮	燒地	完存	古墳	須恵器・土師器・土器	昭和54年発掘調査
38	30071	鍋造古跡	散在地	宮	燒地	完存	古風～奈良	須恵器・瓦	
39	30072	鎌倉遺跡	散在地	鍋居寺	水田		古墳～中世	須恵器・土師器・陶器・土器	
40	30073	鍋造古跡	集落	鍋居寺	水田・焼地・集落		弥生～中世	須恵器・須恵土器・土師器・圓泡十輪・銅鏡	平成9年・10年・12年発掘調査
41	30074	鍋造古跡	古跡群	鍋居寺	水田・集落	全被	古墳	須恵器・土師器	平成12年発掘調査
42	30075	西沢遺跡	散在地	鍋居寺	水田		古墳・中世	須恵器・土師器	
43	30113	西沢城跡	守院跡	鍋居寺	山林		中世?	須恵器	
44	30081	前川山前遺跡	散在地	市	水田・集落		古墳～中世	須恵器・須恵土器・銅鏡	
45	30082	芦原・琴駒遺跡	散在地	市	水田		不明		明治50年・昭和63年発掘調査
46	30083	市道遺跡	散在地	市	水田		古墳～中世	須恵器・土師器	
47	30078	鬱子塚古跡	古墳	市	集落	半壊	古墳	須恵器・銅鏡	
48	30097	長塚古跡	古墳	市	造洗地	消失	古墳	須恵器・石復葉物	
49	30097	藤ノ木塚古跡	古墳	市	水田・焼地・集落		古墳～中世	須恵器・土師器・陶器	
50	30078	馬作遺跡	散在地	市	水田・集落		古墳		
51	30079	上井山前遺跡	散在地	市	金山	山林	物語		
52	30120	上井山古跡	古墳	市	金山	山林	古墳		
53	30121	上井山南古跡	古墳	市	金山	山林	古墳		
54	30114	金山古跡	神社跡	市	金山	山林・水田	不明		
55	30083	松原遺跡	表塙跡	松原	造成地		古墳・奈良	須恵器・土師器・製塙土器	昭和50年試掘調査 平成4年発掘調査

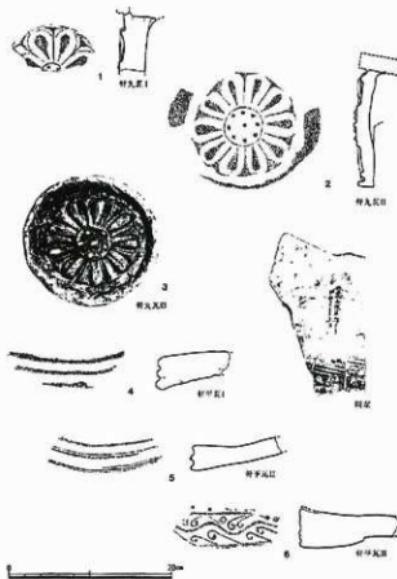
第2表 遺跡地名表

興道寺古墳群（美浜町興道寺） 古墳時代後期の群集墳。第3章第2節にて後述した。

興道寺古跡（美浜町興道寺） 獅子塚古墳造営を契機として6世紀初頭（M15型式期）に開発し、7世紀初頭（T209型式期）まで操業が続いた単基の須恵器焼成窯。昭和54年（1979年）の美浜町教育委員会・若狭考古学研究会による発掘調査によって、1基の須恵器窯及び灰原が検出され、杯・高杯・匙・提瓶・器台・短頸壺・甕などの大量の須恵器、円筒埴輪などが出土した。首長墓造営を契機として、各器種の須恵器をはじめ、角杯形須恵器・埴輪等を生産したことが特徴である。



第10図 興道寺跡出土遺物実測図 (S-1/8)
入江 1986より転載



第11図 興道庵寺出土遺物実測図 (S=1/6)
水野 1987より転載

興道庵寺（美浜町興道寺） 大正時代から現在に至るまでに多くの軒丸瓦・軒平瓦などの瓦類、律令期の須恵器類の出土・採集が知られることと、「觀音」といった寺院の存在を推定させる小字がみられることから白鳳期から奈良時代までの寺院跡の存在が推定されている。軒丸瓦は山田寺様式の系統をひく単弁八葉蓮華文式、あるいは素弁九葉蓮華文式、素弁十葉蓮華文式がみられ、これらの年代観から寺院跡の時期は7世紀後半とされている。觀音畠庵寺との別称がある。

松原遺跡（美浜町松原） 7～8世紀にかけての製塙遺跡。昭和53年（1978年）、福井県教育委員会による試掘調査によって船岡式製塙土器が出土した。平成4年（1992年）、美浜町教育委員会・敦賀女子短期大学（当時）による発掘調査では、6基の石敷製塙炉が検出されるとともに7世紀前半（TK217型式期）の須恵器類、土師器類と共に大量の岡津式製塙土器が出土された。また、玉・鏡類などを模した土製祭祀遺物が出土している。

第2項 耳川右岸域の遺跡概要

沖積低地の自然堤防上、あるいは山裾などの微高地を積極的に選択した遺跡形成がみられ、後背湿地帯を意識的に避けた遺跡立地の特徴が認められる。

寄戸遺跡（美浜町寄戸） 遺跡の内容は不明であるが、昭和6年の耕作中、鉄剣形石剣が単独で不時発見された弥生時代中期の遺跡の存在が知られた。

木野遺跡（美浜町木野） 古墳時代から中世までの遺物散布地。平成10年、美浜町教育委員会が実施した分布調査により新発見され、特に律令期の須恵器杯・甕類、上師器甕類、船岡式製塙土器の破片、鉄塊が大量に採集された。鉄塊の採集は遺跡の性格を示す資料として注目されるが、遺跡の立地から弥美駅家として想定する意見がある^{三一}。

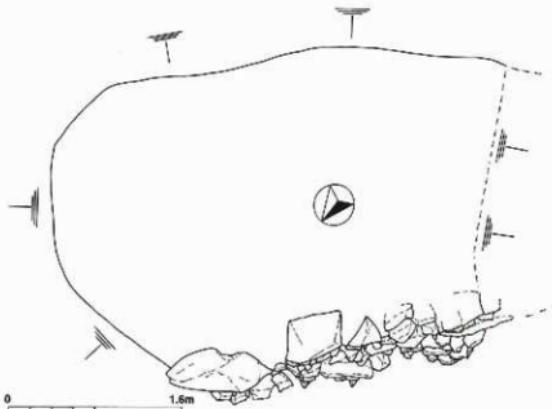
第3項 山間部域の遺跡概要

山間部域においては、古墳・古墳群などの墳墓、中世城郭跡、近世軍事遺跡がみられる。

なお、平成13年7月5日、上井山東斜面側の支尾根先端南斜面において農道建設工事に伴い、1口の扁平粋式六区袈裟擗文銅鐸が不時発見されており、福井県埋蔵文化財調査センターにおいて出土地周辺の発掘調査が行われている。

和田弁天台場跡（美浜町和田）

幕末期の小浜藩の海防軍事施設。平成10年、美浜町教育委員会による分布調査により文献などに知られていた和田弁天台場跡の台座などの遺構が確認されている。



第12図 和田弁天台場跡台座平面実測図（S-1/40）

[参考・引用文献]

- 上田三平 1922 「第14章 獅子塚古墳」福井県史蹟勝跡調査報告第一回 福井県内務部
- 森川昌和 1978 「土器製塙遺跡の試掘調査」
- 「福井県埋蔵文化財調査報告第3号 重要遺跡緊急確認調査報告(1)」福井県教育委員会
- 美浜町教育委員会 1978 「興道寺跡発掘調査報告」
- 森川昌和・入江文敏 1979 「興道寺跡の試掘調査」『松原製塙遺跡の調査』
- 「福井県埋蔵文化財調査報告第3号 重要遺跡緊急確認調査報告(II)」福井県教育委員会
- 入江文敏・森川昌和 1981 「獅子塚古墳」『探訪 日本の古墳(東日本編)』有斐閣
- 斎藤 優 1986 「序章 福井県の歩み」『福井県史資料編13 考古本文編』福井県
- 廣瀬一良 1986 「寄り遺跡」『福井県史資料編13 考古本文編』福井県
- 入江文敏 1986 「興道寺跡」『福井県史資料編13 考古本文編』福井県
- 入江文敏 1986 「獅子塚古墳」『福井県史資料編13 考古本文編』福井県
- 入江文敏 1986 「若狭地方における背長鳥の動態 -主体的・従属的の分析を通して-」『福井県史資料編13 考古本文編』福井県
- 福井県教育委員会 1986 「福井県遺跡地図」
- 水野和雄 1987 「3. 興道寺と北畠の古代寺院 その源流と古記」北畠古丸研究会
- 水野和雄 1987 「城跡跡一覧表」『福井県の中・近世城跡跡』福井県教育委員会
- 入江文敏 1992 「獅子塚古墳」『前方後円墳集成 中野編』山川出版社
- 斎谷克彦 1995 「松原遺跡の調査」『滋賀論叢 放賀女子短期大学紀要第10号』放賀女子短期大学
- 高橋美久二 2000 「弥美駅家と古代の道」
- 『平成12年度生涯学習講座 ふるさとむかしよもやま話レジュメ』美浜町教育委員会

三一 滋賀県立大学人間文化学部、高橋美久二氏の御教示による(高橋 2000)。

第3章 調査の概要

第1節 調査地周辺における既往の調査

第1項 興道寺遺跡における既往の調査

興道寺遺跡が立地する耳川左岸の河岸段丘上は、開墾などによって多くの遺物が地表面に顕在したため、古くから興道寺遺跡として知られてきた。また、興道寺遺跡に重複して立地する興道廃寺遺跡についても、地元での関心が高く、現況が未だ明確ではなかったため、主だった諸開発を逃れていた。

しかしながら、昭和50年代の開場整備事業に伴って、興道寺遺跡・興道廃寺遺跡とともに多くの遺物が出土し、散逸した。この時に小字清水において古川登氏らによって、弥生時代後期から古墳時代前期までの土師器壺類を中心とした良好な資料が採集されている。

特に近年、美浜町役場の現在地への移転を契機として、興道寺遺跡周辺での諸開発事業の増加に伴う埋蔵文化財緊急調査件数が増加しており、平成13年12月末日現在において3件の緊急発掘調査が実施され、試掘・立会い調査件数も年間数箇所に上っている。

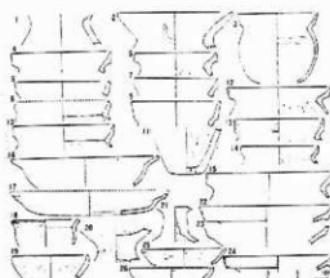


第13図 既往の調査位置図 (S=1/5,000)

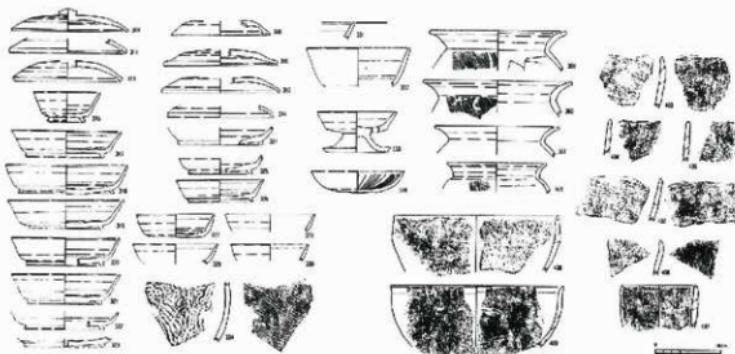
以下に既往の発掘調査の概略を記述する。

平成9年度（1997年度） 美浜町教育委員会調査

関電工業株式会社若狭支社社屋建設工事に係る発掘調査で、約1200m²の調査面積である。整穴建物群・堀立柱建物群・溝状遺構などが検出され、伴って律令期の須恵器杯・壺類・土師器杯・皿・碗・鍋類、船岡式製塙上器が出土している。興道寺遺跡内において面的に調査された初例であり、興道寺遺跡の集落様相の一端を明らかにするとともに、いわゆる畿内土師器の出土、内陸地においては異例ともいえる大量の製塙土器の出土から興道廃寺に関わる集落であったと位置付けられている。



第14図 興道寺遺跡採集遺物実測図
(S=1/8) 山口 1984より転載



第15図 興道寺遺跡 S X 2出土遺物実測図
美浜町教育委員会 1998より転載

平成12年度（2000年度） 美浜町教育委員会調査

関根クリニック新築工事に係る発掘調査であり、約500m²の調査面積である。竪穴建物跡、柱穴、土壙などが検出され、伴って律令期の須恵器・壺類、土師器壺・鍋類、船岡式塙土器などが出土している。

平成13年度（2001年度） 福井県埋蔵文化財調査センター調査

県営ふるさと農道緊急整備事業に係る農道敷設工事に伴う発掘調査が実施されている。

第2項 興道寺古墳群における既往の調査

興道寺遺跡の西側に数基の石室墳が地表面に顕在したことと、第16図にみるように「塚原」「御前塚」「狐塚」など古墳の存在を想定させる小字がみられることから、地元でも古墳群の存在が知られていた。

昭和39年に美浜町文化財保護委員会によって作成された美浜町遺跡台帳には、興道寺古墳群の内容が以下のとおり収録されている（美浜町文化財保護委員会 1964）。関係部分を第17～18図に転載した。

- ① 一、田中塚 旧古墳と禪宗の家の人が自家の墓地に利用。其附近は刀子、土器等出土（興道寺字塚原）
一、旧古墳を禪宗の家の人が墓地に利用している。現在十二戸あり。元相当大なる古墳と思うが現在は円墳上に樹木を植えたり。附近開墾の際刀子及、土器多数出土せる由。
- ② 一、御前塚 一部破壊されたるも稍完全触れば祟りありと恐れられている。（興道寺字御前塚）
一、円墳なれども耕地に削られ封土も自然持去られ積石を露出するに至ったが、この塚は触れば祟ると信せられている故に主葬部は荒らされていない。
- ③ 一、田圃の中底に大なる扁平なる石ありと伝えられる。古墳の蓋石にあらざるか。一見の要あり（興道寺字西側、附近に古墳に用ちひたる巨石あり）
一、田の底に巨大なる蓋石と覺しきもの有りと伝えられる田圃。
- ④ 一、大塚なる名称ある所、葺石用のクリ石多數ありと云（一見の要）（興道寺大塚）
①が田中塚、②が御前塚と地元で呼称されている古墳であり、昭和39年には古墳として認識されている。



第16図 周辺の小字図 (S=1/5,000)
〔福井県史 資料編16 下条理復元図112から転載〕

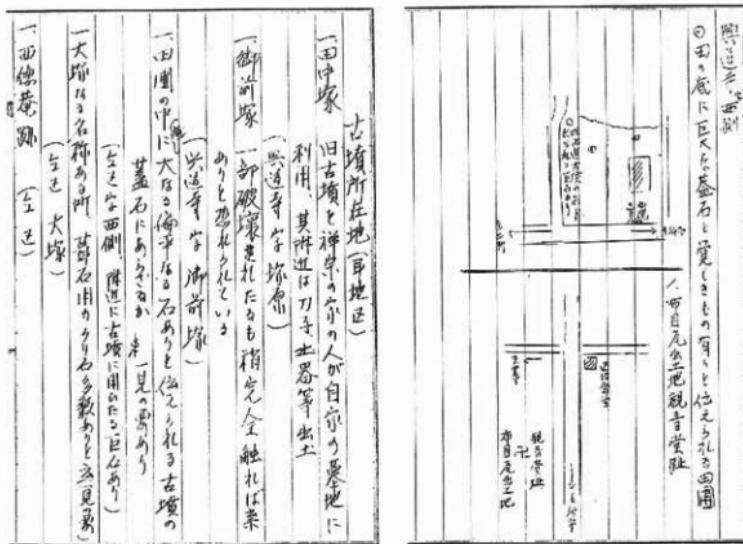
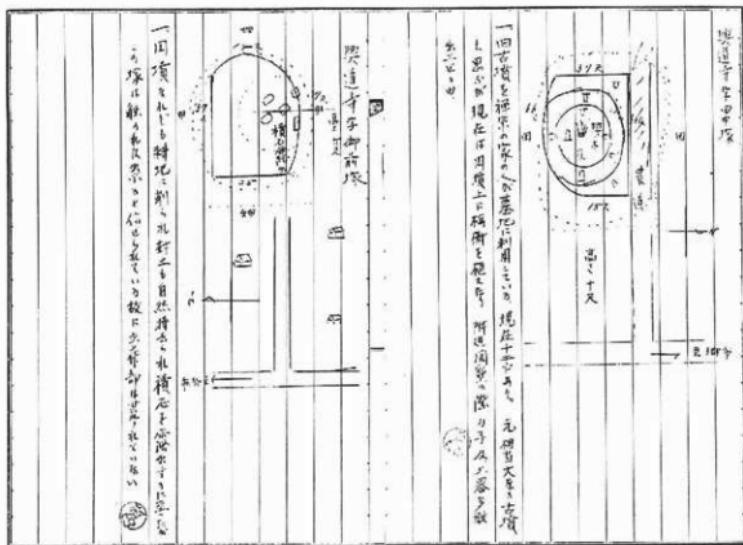
埋蔵文化財包蔵地調査カード

No. 2					都県名	
種別	古墳	名跡	田中塚	参照地図		
所在地	三河市・郡美浜町村大字道寺小字上原					
地目	山林・畑・水田・宅地・墓地	土地所有者	国有	公有	民有	
概要	古墳を神宮の代数々人々が墓地に利用してゐる現12戸の昔は相當大きよ古墳と思ふ現現在山頂の上い草しきの木や樹植えは附近園地の竹子又土壠等せしと云ふ現状不明				出土品の有無	
包蔵地の価値	きわめて重要	比較的重要	普通	所蔵(保管)箇所		
文	地主代々に港他皆有地ある				発掘の必要性	なし
備考						
調査年月日	昭和 年 月 日	調査者	班長	感	班員	種類

埋蔵文化財包蔵地調査カード

No. 3					都県名	
種別	古墳	名跡	御前塚	参照地図		
所在地	三河市・郡美浜町村大字道寺小字上原					
地目	山林・畑・水田・宅地・墓地	土地所有者	国有	公有	民有	
概要	道寺山東中島をくねの田側邊に在る古墳の株で西側の堤防地に削り取れた土を多く(?)現在は積石社露出してゐる此の土取り跡地からとて信せらる主導部は荒れきつて居るに思われる				出土品の有無	
包蔵地の価値	きわめて重要	比較的重要	普通	所蔵(保管)箇所		
文					発掘の必要性	
備考						
調査年月日	昭和 年 月 日	調査者	班長	感	班員	種類

第17回 美浜町遺跡台帳抜粋



第18図 美浜町遭跡台帳抜粋 2

田中塚が推定径11.7m、高さ3.0mの円墳であり、副葬品と思われる上器類、刀子が出土していることと、昭和39年の段階で既に古墳の埴丘上を墓地利用しており、埴丘の削平が認められることが、また、御前塚が推定径11.1m、高さ1.8mの円墳であり、古墳の主体部となる石室が昭和39年の段階では露出していたことと、崇りが恐れられたことによって盜掘を逃れていることが分かる。御前塚は、圃場整備時に埴丘が一部削平されたが、埴丘内から石室が露出したためそのまま埋め戻されたという話を地元で聞いた。③の石材露出個所については、蓋石とされる巨石は現在確認できないが、付近に巨石が露出する個所があり、石室墳の構成材であったものと思われる。④の小字大塚に所在するとされる石材露出個所は確認できない。



写真4 御前塚遠景

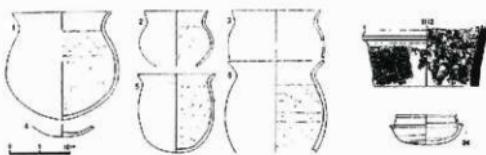


写真5 田中塚遠景

古墳群の具体相が知られるようになったのは、昭和50年代の圃場整備事業による。詳細は明らかではないが、特に興道寺小字塚原付近において横穴式石室の基底部、古墳の周溝などが検出されたことから埋没墳の存在が明らかとなった。しかし、事実の性質上、大半の古墳が削平を受け、消滅したようである。

この時に、古墳群に伴う資料として、古川登氏らによって興道寺1・2・5号墳の周溝に伴うとされる土師器6点と（山口 1984）、興道寺11号墳に伴うとされる円筒埴輪1点が採集されている（古川 1980）。また、興道寺6号墳に伴うとされるT K47型式の杯形蓋1点が採集されている（入江 1987）。

それ以外にも、地元では「古墳から出土した勾玉を知っている」「出土した副葬品が何處にある」といった類の口碑が根強く残っていることから、かなり多くの副葬遺物が散在したものと思われ、また古墳群自体、かなり豊富な副葬遺物を有していたものと思われる。



第19図 興道寺古墳群採集遺物実測図 山口 1984 古川 1980
入江 1987 から転載

【参考・引用文献】

美浜町文化財保護委員会 1964 「美浜町遺跡台帳」

古川 登 1980 「付録 第3章 福井県嶺南地方の埴輪について」

『福井県埋蔵文化財調査報告第4集 六呂瀬山古墳群 国道364号線建設に伴う発掘調査報告書』福井県教育委員会
山口 充 1984 「美浜町内出土の後期弥生式土器と土師器」『福井県考古学会誌第2号』福井県考古学会

入江文敏 1987 「V.管1 若狭地方出土の古式須恵器の検討」『上中町文化財調査報告第5集 三生野遺跡』上中町教育委員会
美浜町教育委員会 1998 「興道寺遺跡」

第2節 現地調査の概要

第1項 調査区の設定

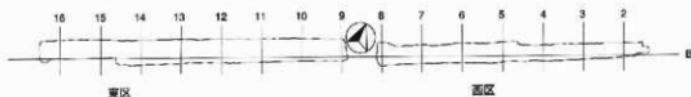
調査区は、調査区域の中央部分を南北に継走する興道寺集落の生活道路となる農道を起点として西側を西区、東側を東区と大きく区割りした。



第20図 調査区位置図 (S=1/5,000)

調査区内には一直線で通した10mピッチの基準杭を設けることによって一辺10mの正方形のグリッドを任意に設定し、包含層中の遺物取り上げ、遺構図化などに使用した。グリッドには基準杭の南側をA、北側をBとして、調査区域の西端を1として、以下東に向けて2、3、4…と16まで割り付けた。このため、10m方眼毎に「A 1」といったグリッド番号が付加される。グリッド番号は方眼の南西隅に相当する基準杭を基準としている。このグリッドは西区から東区に向けて、西から連続して割り付けた。

各基準杭・各グリッドは公共座標の方位軸には合致しない。また、グリッドをさらに細分する小グリッドを設けていない。



第21図 グリッド区割図 (S=1/1,200)

第2項 廃土置場等の設定

調査区は、西区の現道下北側に農業用水管が、東区の現道下北側には農業用水管に加えて上水道管の敷設があった。西区、及び東区西端では遺構検出面の深度が現地表面から浅かったため、これらの管の掘り方が平面で確認される状況であった。周辺の水田の傍上げが困難な状況であったことと、試掘調査の結果等から管敷設部分は遺構の損壊が激しいと判断されていたため、管敷設部分を廃土置場とした。しかし、調査の進展に伴って掘削土量が当初の予定以上に増加したために廃土処理能力は常に飽和状態となり、精査において遺構が確認されなかった東区東端に廃土置場を増設した。なお、既往の調査等によって遺跡が立地する河岸段丘上では極めて排水性が高いことが知られていたため、調査区内に排水溝は設けなかった。

第3節 遺跡の層序と地形

第1項 時期区分

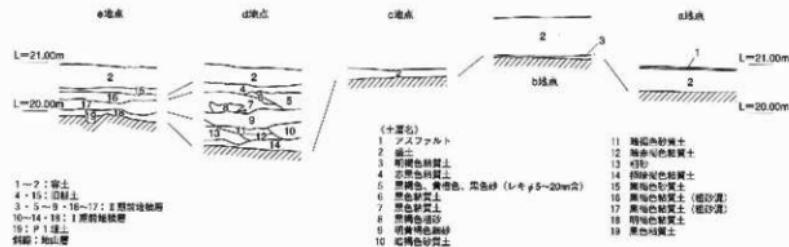
今回の調査では大きく区分して2時期の遺構・遺物が認められ、調査区の東側では各時期の生活面が層位的に検出された。調査区西区全域、及び調査区東側（A10～A13・B10～B13グリッド）では2時期の生活面が重複する。本報告では便宜上、各時代を以下のとおりⅠ～Ⅱ期に区分した。

Ⅰ期 古墳時代後期の須恵器、土師器、製塙土器などを伴う時期。須恵器では型式的に陶器編年TK43型式に相当する須恵器を伴い、製塙土器では浜福II B式期の製塙土器を伴う。6世紀後半の時期。

Ⅱ期 中世の陶磁器、土師器を作りたる時期。陶磁器では越前焼、中国青磁を作り、土師器では皿・鍋類を作りたる。13世紀後半～14世紀前半の時期。

第2項 基本層序と地形

基本層序は上層から、現耕土・客土、Ⅰ期堆積層、Ⅱ期堆積層、地山層からなる。第22図に調査区南壁断面の柱状土層図を示した。それぞれ東西グリッド3をa地点、8をb地点、11をc地点、14をd地点、16をe地点とした。



第22図 調査区土層柱状図 (S=1/100)

概ね海拔20.9～21.9m付近が現地表面であり、a～e地点それぞれで水田、あるいは舗装道路として使用されている。

現耕土・客土を10～60cm除去するとa地点で海拔20.4m付近、b地点で海拔21.1m付近、c地点で海拔20.7m付近において、明黄褐色系の粘質土・砂礫土からなるいわゆる地山層の上面が検出された。a～c地点ではこの面がⅠ期、及びⅡ期の重複遺構面となり、古墳2基、掘立柱建物跡2基、横列1基、土壙2基、及び大半の小穴が確認されている。しかし、この遺構面は現地表面から浅いため、特に農道工事時の擾乱が著しい。

d～e地点では海拔20.3～20.6mに旧耕土が堆積し、海拔20.1～20.4m付近においてⅡ期以前の中世堆積層上面が検出される。この面においては遺構の平面検査を行っていないが、この上面が掘り込むⅡ段階の遺構が存在した可能性がある。また、この面には近現代の擾乱が及んでいる。d～e地点のこの中世堆積層

は、海拔19.7~20.4mに堆積し、主に黒色~褐色土で構成される。この堆積土はS Z 3墳丘、旧河道を完全に埋没させている。この層からは古墳後期から鎌倉時代までの遺物が出土しており、I期後の7世紀からII期前の12世紀代にかけての上砂堆積が、13世紀代にはa~c地点の地山層と連続して、b地点付近を最高位として西、あるいは東に向かって徐々に高度を減じるII期段階の旧地表面を持っていたものと思われる。

さらに、d~e地点では海拔19.7~20.1m付近においてI期以前の堆積層上面が検出される。S Z 3、小穴3基、旧河道はこの面に伴い、I期段階の旧地表面に相当する。この堆積層は海拔19.3~20.1mに堆積し、主に褐色系の砂質土・砂礫土で構成される。

d~e地点のいわゆる地山層は、c地点から急激に高度を減じながら、海拔19.2~19.9m付近においてその上面が検出される。a~e地点を通した地山層上面での微地形は、b地点を最高位として、西へはa地点に向かって緩やかに低下し、東へはc地点に向かって緩やかに低下した後、d地点に向かって急激に低下する。さらにe地点に向かっては緩やかに上昇する。明黄褐色系の粘質土で構成される。

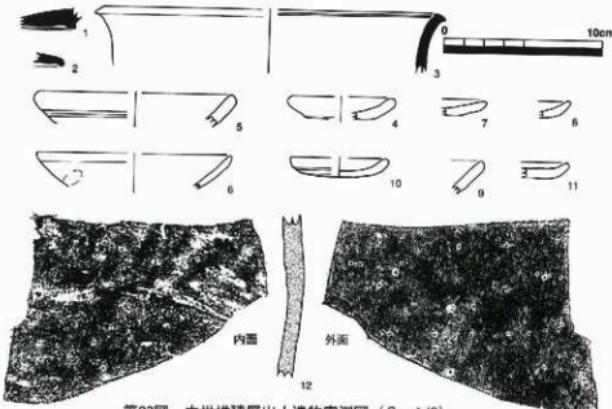
第3項 中世堆積層出土遺物

II期までの中世堆積層から、古墳時代後期の須恵器杯H蓋1点、律令期の杯B蓋3点・杯B1点・壺3点・長頸壺1点、土師器壺1点、中世の越前焼壺1点、土師器皿15点、計26点の遺物が出土した。図化し得た12点の遺物について報告する。

1は須恵器杯B、底部外面には外方に張り出すM字状の高台をもち、内面は一定方向にナデ調整する。胎土は密で、砂粒をほとんど含まない。2は須恵器杯B蓋。口縁端部は下方に鈍く折り返す。胎土は密で、砂粒をほとんど含まない。3は須恵器長頸壺。口縁部推定径20.8cm。口縁部は弱く直立気味に外反し、口縁端部は外下方にひきのばし、鋭くおさめる。端面をもち、端部内面には1条の凹線をもつ。胎土は密で長石を若干含む。

4~11は非クロクロ成形の土師器皿である。

4は推定径6.2cm。器厚は厚い。平底であり、底部から屈曲して体部に至り、口縁部は丸くおさめる。体部外面を強い丁寧なヨコナデ調整し、外面底部には指頭圧痕がみられる。内面体部はヨコナデ調整、底部は一定ナデ調整する。胎土に砂粒をほとんど含まない。5は推定径12.0cm。器厚は厚い。底部から直線的に口縁部までのが、口縁部は上方に鋭くおさめる。外面を強い丁寧なヨコナデ調整し、外面中位に圓線がめぐる。内面体部は強いヨコナデ調整する。胎土には若干の長石を含む。6は推定径12.2cm。器厚は薄い。口縁部に向かって直線的にのが、口縁端部は外上方に鋭くおさめる。体部内外面上位を強い丁寧なヨコナデ調整する。体部外面下位は指頭圧痕がみられる。胎土に砂粒をほとんど含まない。7は底部から横方向に体部がのが、口縁部は外上方に短くのびる。口縁端部はさらに外上方に鋭くおさめる。外面を強いヨコナデ調整する。口縁端部と内面底部には煤の付着がみられる。長石、石英を多く含む。8は口縁部に向かって短く直線的にのが、口縁端部は外上方に丸くおさめる。外面を強いヨコナデ調整し、底部との境に圓線がめぐる。胎土に砂粒をほとんど含まない。9は口縁部に向かって外上方に直線的にのが、端部は上方に丸くおさめる。器厚は厚い。体部外面を強いヨコナデ調整し、底部との境に圓線がめぐる。胎土に砂粒をほとんど含まない。10は推定径6.0cm、器高1.2cm。器高が低く、平底である。体部は底部から屈曲して立ち上がり、口縁部は外上方に短く屈曲してのが。口縁端部は外上方に丸くおさめる。体部外面は強いヨコナデ調整し、底部との境に



第23図 中世堆積層出土遺物実測図 ($S=1/3$)

圓線がめぐる。体部内面は丁寧なヨコナデ調整、底部は一定ナデ調整する。外面底部には指頭圧痕がみられる。胎土に砂粒をほとんど含まない。11は器高が低く、平底である。口縁部は外上方に短くのびる。口縁端部は外上方に丸くおさめる。体部内外面はヨコナデ調整する。胎土に砂粒をほとんど含まない。

12は越前焼甕。胴部内面は粘土接ぎ痕を荒くナデ消している。胎土に長石・石英などの小砾を多く含む。

第4節 旧河道の概要

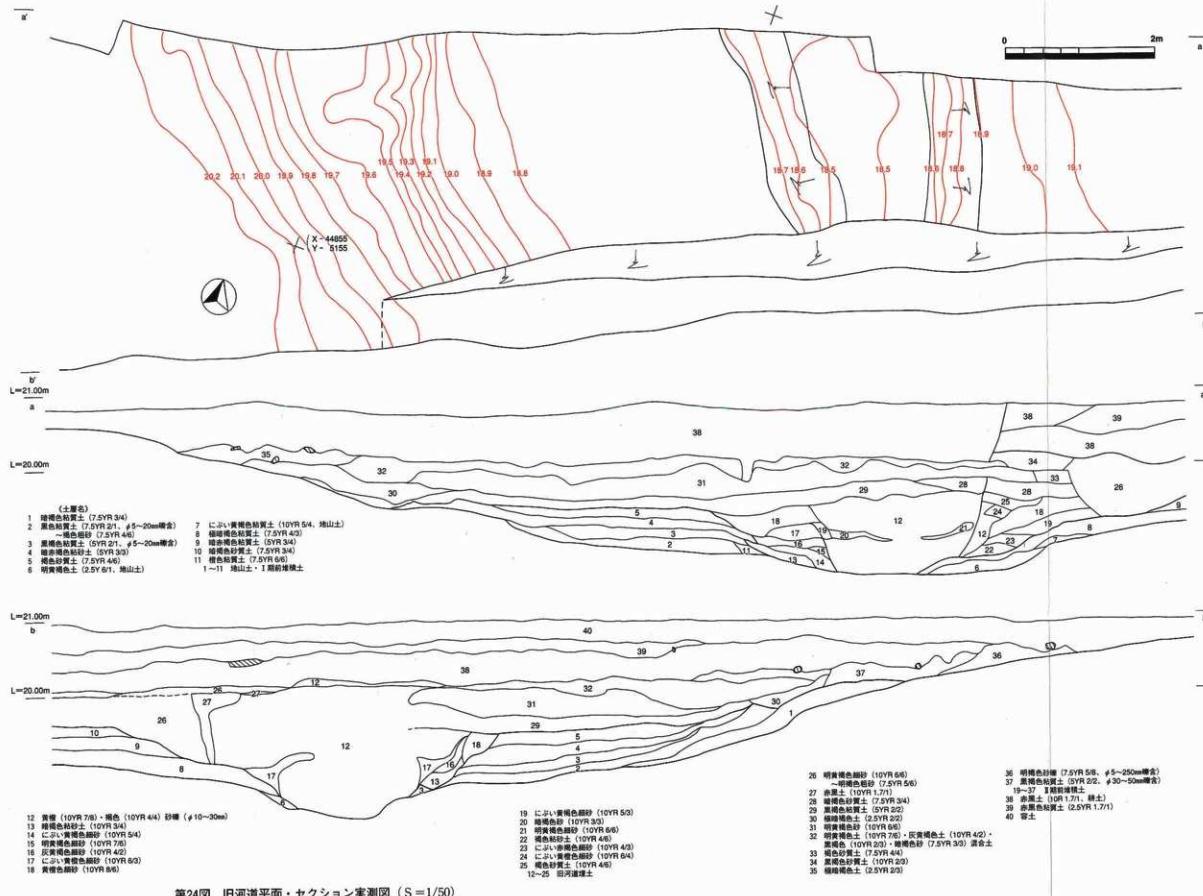
A13・B13グリットに位置し、南北に展開する旧河道である。調査時では海拔18.7m付近、東西最大幅約2.7mにて平面面検出されたが、調査区土層断面から判断して、Ⅰ期造構面においてはその上面を海拔19.5m付近、東西幅約5.0mに復元できる。

海拔19.0～19.15m付近にみられる地山層上にはⅠ期前までの堆積土を数度と水平堆積させ、海拔19.5m付近においてⅠ期段階での旧地表面を形成する。旧河道の活動はそれ以前の堆積土を数度か侵食しながらその川幅を広くしていく様相が上層断面から確認されることから、活動時期はⅠ期前まで遡る。Ⅰ期以降は、Ⅱ期前堆積土が旧河道を覆うように水平堆積していることからⅡ期段階には埋没し、その機能を失っていたものと思われる。

埋土は径1～3cmの砾を含む黄橙・褐色砂礫が厚く堆積し、旧河道の肩部に黄褐色・暗褐色系の細砂・粘土を堆積させる。底レベルは18.35mである。埋土中から遺物は出土しなかった。

この旧河道から西に向けて、地山層、及びⅠ期・Ⅱ期重複造構面の海拔レベルが急激に上昇することから、西側の微高地の水流を集積することによって自然形成された旧河道であると思われる。

圃場整備前まで調査区北側に所在する伊牟移神社前を通って北進する小河川が流れていったとの口碑を知った。検出された旧河道は、Ⅰ期の旧地表面上面までは確實にその活動の痕跡が確認されるが、Ⅱ期には埋没していることから、口碑と合致するものではない。



第24図 旧河道平面・セクション実測図 (S=1/50)

第5節 遺構・遺物の概観

第1項 遺構の概要と分布

以下に各期の調査の概要を記述する。

I期 古墳時代後期に属するいわゆる埋没埴3基（S Z 1～S Z 3）が検出された。S Z 3 東側周溝付近では3基の小穴（P 1～3）が検出されている。

II期 挖立柱建物跡2棟（S H 1～S H 2、構成柱穴7基）、櫛列1基（S A 1、構成柱穴2基）、土壙2基（S K 1～S K 2）、小穴48基（P 4～P 51）が検出されている。なお、II期の小穴中には掘立柱建物跡を構成する柱穴である可能性をもつものもある。

調査区面積は1,436m²であるが、遺構面検出面積は722m²（西区287m²、東区435m²）である。

遺構分布を概観すると、遺構が全く存在しないのは東西グリット4以西である。東西グリット4付近は河岸段丘の西縁辺部に相当し、ここから西の後背湿地帯に向けて遺構面の海拔レベルが低下するために遺構の分布が疎になるものと思われる。I期の円埴2基、及びII期の掘立柱建物跡2棟、櫛列1基、土壙2基、小穴48基など、密に遺構が分布するのは東西グリット7～12であり、遺構面の比較的高位に相当する。東西グリット12以東はI期、II期のいずれの段階においても旧地表面が低位であり、I期のS Z 3、小穴3基以外に遺構もみられず、遺構分布は疎である。遺構形成に微地形の微高地選択が働いた様相が確認できる。

第2項 出土遺物の概要

発掘調査で出土した遺物は計89点であり、内遺構に伴うものは36点である。これは個体識別を行った後の点数である。48点の遺物を報告した。時期的には古墳時代後期から鎌倉時代までの遺物がみられるが、特に古墳時代後期の須恵器類、中世の土師器皿が多い。

出土遺物の年代観については、古墳時代後期の須恵器類は陶邑編年（田辺 1981）に、律令期の須恵器類は平城・平安京での編年（古代の土器研究会 1992）に準拠した。器形の表記は『飛鳥・藤原宮発掘調査報告II』（奈良国立文化財研究所 1978）、『平城宮発掘調査報告Ⅶ』（奈良国立文化財研究所 1974）の区分に従った。土師器類については、当地方ではその纏年の枠組みが十分に行われていないため、須恵器・陶器類などの共伴関係を考慮して時期を決定した。また、中世土師器類については、福井県埋蔵文化財調査センター、富山正明・河村健史両氏に、陶磁器類の種別・年代観については同センター、河村健史・中川圭三両氏にご教示を賜った。

〔参考・引用文献〕

- 奈良国立文化財研究所 1974 「平城宮発掘調査報告Ⅱ」
奈良国立文化財研究所 1978 「飛鳥・藤原宮発掘調査報告II」
田辺昭三 1981 「須恵器大成」 角川書店
古代の土器研究会 1992 「古代の土器」 都城の土器集成」

第4章 遺構と遺物

第1節 I期の遺構と遺物

第1項 古墳

3基の古墳時代後期の円墳が確認された。SZと略称する。SZ1、SZ3は墳丘、埋葬施設が既に失われ、周溝のみが検出された。SZ2はSZ1周溝外東側に取り付くように造営され、墳丘の一部と埋葬施設が検出されている。

SZ1

位置

調査区内の比較的高位のA4～A7グリッド、B4～B7グリッドに位置する。

墳丘・外部施設

客土下直ぐの海拔約21.0m付近の地山層上面において、古墳の東西側を鈍く円形に廻る周溝が平面検出された。推定径約18mの円墳と考えられる。本握部分を含めて墳丘を廻るように周溝が全周するものと思われる。A7・B7グリッド付近に東側の周溝が、A5・B5グリッド付近に西側の周溝が位置する。墳丘規模に比して周溝幅がやや広い。

東側の周溝は幅4.1m、深さ0.5mで、鈍く弧を描く平面プランである。検出レベル約21.0m、最深部底レベル約20.4mである。周溝外側のラインはSZ2造営に際して削平を受けており、本来の形状を留めていない。周溝断面は船底状で中央部が最も深くなる。周溝埋土は基本的には堆積順に、灰黄褐色粘質土、黒褐色粘質土、灰黃褐色粘質土からなり、II期までの堆積土である。II期の段階で、これらの堆積土上面に小穴を掘り込んでおり、II期後に暗オリーブ褐色土を堆積させている。

西側の周溝は約3.8m、深さ0.5mで、やや崩れるが鈍く弧を描く平面プランである。検出レベル約20.9m、最深部底レベル約20.4mである。周溝外側をSK3に切られる。周溝断面は床面が比較的の平らである。周溝埋土は基本的には堆積順に、暗褐色粘質土、黒褐色粘質土からなり、II期までの堆積土であるが、周溝下位までの堆積である。周溝上部に極暗褐色粘質土、赤黒色粘質土、黒色粘質土、赤黒色粘質土、赤黒色砂礫を堆積させるが、II期後の比較的新しい時期の堆積であり、周溝埋土上半がII期後の擾乱を受けたものと思われる。

古墳の墳丘土は既に削平を受けており、調査区土層断面においても認められない。客土下直ぐで地山層に至ることから、完全に墳丘が消失する。

墳丘の削平時期については、東側の周溝内のII期前堆積層上面から掘り込まれた小穴が土層断面にて確認されていること、墳丘部分の地山層上面で7基の小穴が検出されていることから、中世段階にはほぼ周溝が埋没し、墳丘がかなりの削平を受けて、II期段階の遺構面となったものと考えられる。

葺石、外護列石等の墳丘外部施設は確認されなかった。

埋葬施設

埋葬施設は既に消失しており不明である。しかし、調査前の水田の畔部に相当する墳丘内南西地点において、地山層を掘り込んで、30~50cm程の sondage 点を現代のゴミとともに埋め込んだ擾乱土壌が検出された。廃棄された石材は30~50cm程の花崗岩が大半であり、その形状からみて横穴式石室の側壁を構成したものと考えられた。圃場整備時に古墳の石室を取り壊して水田の畔の下に隠したという口碑と合致することからも、昭和50年代の圃場整備段階には S Z 1 の埋葬施設の基底部が現存した可能性がある。この擾乱穴の東側の地山層直上で耳環1点が出土しており、圃場整備時の埋葬施設破壊に伴って遺物が散逸したものと思われる。

遺物出土状況

墳丘南西部の地山層直上で耳環1点が出土しているが原位置を保つものではない。

西側の周溝内からは全く遺物は出土しなかったが、東側の周溝内から須恵器杯H蓋3点、壺2点、土師器壺2点、皿23点、鍋2点、不明3点、浜襦II A式製塙土器1点、浜襦II B式製塙土器3点、越前焼壺1点、中国青磁碗1点、計41点が出土した。

遺物は可能な限り層位毎に取り上げを行った。出土状況は下層からの出土遺物ではなく、中層においてもⅠ期の土師器壺片1点が出土したのみであり、最上層、上層からの出土がほとんどであり、大半のものはS Z 2 墳丘上の位置から出土していることからⅡ期前後の周溝内への土砂流入段階での遺物混入である。

Ⅰ期に属する須恵器杯H蓋3点・壺1点、浜襦II A式製塙土器1点、浜襦II B式製塙土器3点についても同様であり、周溝底面からかなり浮いた出土状況を示していることから、明確にS Z 1 に伴うものとは言えない。

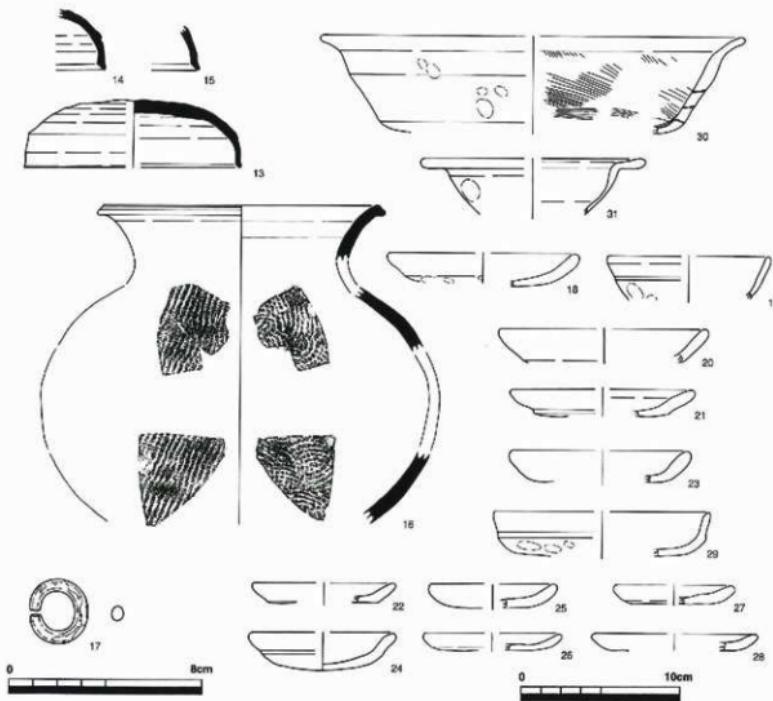
出土遺物

13~15は須恵器杯H蓋の口縁部。13は推定径13.4cm、器高4.2cm。肩部に鈍い稜をもち、高さ2.0cmの口縁部はほぼ真下にのびる。口縁端部は外方へつまみ出し、内面に平坦な端面をもつ。天井部は丸みを帯びて緩やかに口縁部に至るが、器高は低く、扁平である。天井部外面にはヘラ切り未調整痕が残る。胎土は緻密であり、砂粒を含まない。焼成不良である。14は肩部に鈍い稜をもち、高さ2.1cmの口縁部はほぼ真下にのびる。口縁端部は外方へつまみ出し、内面に窪む端面をもつ。外面天井部は丸みを帯びるが、13と比して器高が高く丸みが強い。胎土は緻密であり、石英を若干含む。焼成は良好である。15は肩部に極めて鈍い稜をもち、高さ2.5cmの口縁部は外下方に直線的に張り出す。口縁端部は外方へつまみ出し、内面にやや窪む端面をもつ。胎土は密である。焼成は良く、外面に降灰する。16は須恵器壺。推定径17.2cm。口縁部は基部が太く、短く緩やかに外反し、口縁端部でさらに外方にのばされて丸くおさめる。口縫部外面に文様調整はみられない。胴部外面に平行文叩きが、内面には円弧叩きがみられるが、外面は部分的に横方向にナデ消す。胎土は密であり、長石を若干含む。肩部焼成が不良である。

17は耳環。径2.4cm、重量9.85gである。銅芯に金張がほぼ完全に残る。断面はやや梢円である。EPM A分析の結果、表面から金・銀・銅・水銀といった金属元素が確認されており、銅芯に銀・金貼りされたものと思われる。

18~29は非クロコロ成形による、いわゆる手捏ね土師器皿。

18は推定径11.7cm。器厚はやや厚い。平底であり、丸みを帯びながら口縁部に向かって肥厚しながら緩や



第25図 S Z 1 出土遺物実測図 (17: S = 1/2, その他: S = 1/3)

かにのびる。口縁端部は外上方に丸くおさめる。体部外面を強いヨコナデ調整し、外面底部には指頭圧痕がみられる。内面体部は強いヨコナデ調整、底部は一定ナデ調整する。胎土に若干の長石・石英・雲母を含む。19は推定径9.8cm。器高が高く、器厚は薄い。口縁部に向かって直線的にのびる。口縁端部は上方に丸くおさめる。体部内外面を強い丁寧なヨコナデ調整し、外面中位に弱い圓線がめぐる。胎土に若干の石英・雲母を含む。20は推定径12.8cm。器厚はやや厚い。口縁部に向かって外上方に直線的にのびる。口縁端部は外上方に丸くおさめる。外面を強いヨコナデ調整し、底部との境に圓線がめぐる。外面底部には指頭圧痕がみられる。内面体部は丁寧なヨコナデ調整、底部は一定ナデ調整する。胎土に砂粒をほとんど含まない。21は推定径11.2cm。器厚はやや厚い。平底であり、外上方に短くのびた後、さらに外方に向けて屈曲して横方向に直線的にのびる。口縁端部は外上方に丸く鋸くおさめる。外面を強い丁寧なヨコナデ調整し、底部との境に強い圓線がめぐる。外面底部には指頭圧痕がみられる。内面体部は2段の強い丁寧なヨコナデ調整、底部は

一定ナデ調整する。胎土に砂粒をほとんど含まない。22は推定径8.6cm。器厚はやや厚い。平底状であり、外上方に直線的にのびる。口縁端部は外上方に丸く鋭くおさめる。体部外面を丁寧なヨコナデ調整し、底部との境に圓線がめぐる。外面底部には指頭圧痕がみられる。内面体部は丁寧なヨコナデ調整、底部は一定ナデ調整する。胎土に砂粒をほとんど含まない。23は推定径11.9cm。器厚は厚い。平底状であり、口縁部に向かって外上方に肥厚しながら直線的にのびる。外上方に丸くおさめる。体部外面を強い丁寧なヨコナデ調整し、外面底部には指頭圧痕がみられる。内面体部は強く丁寧なヨコナデ調整、底部は一定ナデ調整する。胎土に砂粒をほとんど含まない。24は推定径8.8cm。底部は丸みを帯びた平底であり、圓線まで強い丸みを帶びて立ち上がり、圓線から口縁部に向かって緩やかに丸く上外方にのびる。口縁端部は外上方に丸くおさめる。体部と底部の境が不明瞭である。器厚はやや厚い。外面を強く丁寧なヨコナデ調整し、外面中位圓線がめぐる。外面底部は摩滅が激しい。内面体部は強く丁寧なヨコナデ調整、底部は一定ナデ調整する。胎土に若干の長石・雲母を含む。25は推定径7.8cm、器高1.5cm。器厚はやや厚い。底部は平底で、やや丸みを帶びて口縁部に向かって緩やかにのびる。口縁端部は外上方に丸くおさめる。体部と底部の境が不明瞭である。内外面を強いヨコナデ調整する。底部内面は一定ナデ調整する。外面底部は摩滅が激しい。胎土に砂粒をほとんど含まない。26は推定径10.4cm、器高1.1cm。器高が低く、平底状である。口縁部は外上方に短くのびる。口縁端部は外上方に丸くおさめる。体部内外面は丁寧なヨコナデ調整する。胎土に砂粒はほとんど含まない。27は推定径7.2cm、器高1.2cm。器高が低く、平底である。体部は底部から屈曲して立ち上がり、口縁部は外上方に短くのびる。口縁端部は外上方に丸くおさめる。体部外面は強いヨコナデ調整し、外面底部には指頭圧痕がみられる。体部内面はやや荒いヨコナデ調整、底部は一定ナデ調整する。胎土に砂粒はほとんど含まない。28は推定径10.0cm。器高が低く、平底状である。口縁部は外上方に短くのびる。口縁端部は外上方に丸くおさめる。体部内外面ともに丁寧なヨコナデ調整する。胎土に若干の長石を含む。29は推定径13.4cm。平底であり、底部から体部へ丸みをもって立ち上がり、稜からさらに口縁部へ向けて外上方に直線的にのびる。口縁端部は外上方に丸くおさめる。外面上位を荒いヨコナデ調整し、下位はやや丁寧にヨコナデ調整する。体部中位に明瞭な稜をもつ。外面底部には指頭圧痕がみられる。内面体部は荒いヨコナデ調整し、底部は一定ナデ調整する。総体的に荒いヨコナデ調整によって器形が歪む。胎土に若干の石英を含み、内外面ともに煤付着がみられる。

30～31は十師器鍋である。30は推定径26.4cm。口縁部の器厚は薄いが、外上方に肥厚させながらのびる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整され、端部は丸くおさめる。平底であり、外上方に直線的にのびて、口縁部にいたる。胴部器壁は厚いが、底部との境付近でやや薄くなる。胴部外面には指頭圧痕、煤の付着がみられ、胴部内面はやや細かいヨコ刷毛調整する。胎土は緻密であり、雲母が大量に含まれる。31は推定径13.4cm。口縁部はほぼ直線上に短くのび、雑なヨコナデ調整され、端部は肥厚して外上方に丸くおさめる。胴部は丸みをもち、緩やかに底部にいたる。胴部器壁を薄くし、外面は部分的に雑なヨコナデ調整する。指頭圧痕、煤の付着がみられる。胴部内面は上位を2段の強いヨコナデ調整、下位を荒いタテナデ調整する。胎土は緻密であり、長石、石英、雲母が一定量含まれる。

S Z 2

位置

S Z 1 東側の A 7・B 7 グリットに位置する。

墳丘・外部施設

客上下直ぐの海拔約21.0m付近で、S Z 1 の東側の周溝外側に取り付くように検出された。海拔約20.7~21.1mで墳丘盛土の西側が検出されたが、東側は既に削平され、地山層に至る。推定径約 6 m の円墳と考えられる。周溝などの外部施設は確認されない。

墳丘残存高は最大約0.6mの高さまであり、S Z 1 東側周溝内に埋没した部分のみが残存している。

調査区北壁（a-a'）で確認できる墳丘盛土では、地山層の傾斜に沿って海拔約20.5~21.1mまでに堆積順ににぶい黄褐色土、暗褐色土、黒褐色土を幅約0.8~1.8m、厚さ約0.2mの大きなブロック状に盛る。

調査区南壁（b-b'）で確認できる墳丘盛土では、地山層の傾斜に沿って海拔約20.5~21.1mまでに、調査区北壁で上から2層目にみられた暗褐色土を幅約1.3m、厚さ約0.2mの大きなブロック状に盛る。

埋葬施設奥壁寄り西側（c-c'）では、海拔約20.3mから右側壁基底石上端面付近の海拔約20.6mまでに堆積順に、暗褐色土、黒褐色砂質土、灰黃褐色砂質土、暗褐色土、黒褐色土、褐色砂質土、黒褐色砂質土、暗褐色土、黒色土を幅約0.3~0.5m、厚さ約0.1mの大きなブロック状に盛る。石室内は床面下に褐色砂質土、石室埋土は下から暗オリーブ褐色土、灰黃褐色土が堆積する。

埋葬施設前壁寄り西側（d-d'）では、海拔約20.5mから右側壁基底石上端面付近の海拔約20.6mまでに堆積順に、灰黃褐色砂質土、暗褐色砂質土、黒色土、暗褐色土を幅約0.2~1.5m、厚さ約0.05mの大きなブロック状に盛り、上部は細かいブロック状に盛る。

埋葬施設奥壁裏側の北側（e-e'）では、海拔約20.45~20.6m付近に調査区両壁にみられた暗褐色土を幅約0.7m、厚さ約0.3mの大きなブロック状に盛り、その上に海拔約20.6~21.0mに堆積順に、暗褐色砂質土、黒褐色土、黒色土、黒褐色土、黒色土を幅約0.2~0.4m、厚さ約0.3mの小さなブロック状に盛る。

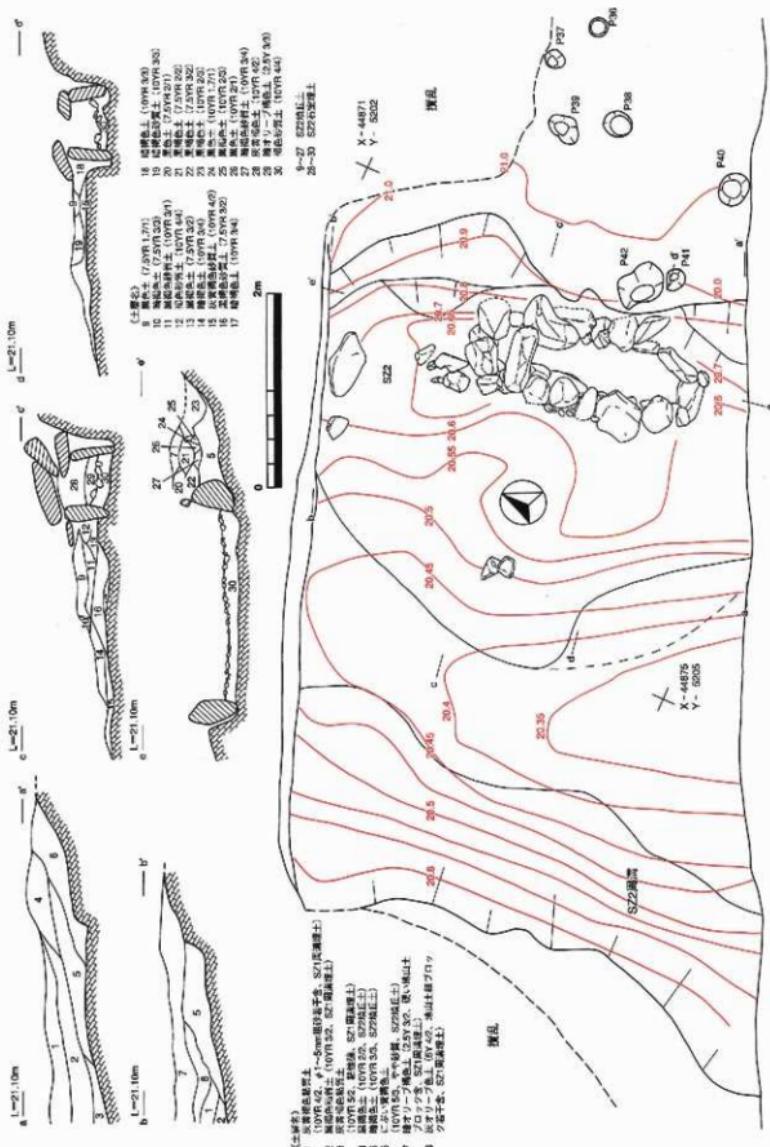
墳丘盛土には、縞状に細く叩き締めたような明確な版築は認められない。砂質土を交互に挟み込んで積み上げる部分がみられるが、S Z 1 周溝底面・S Z 2 石室墓壇の掘り込みが明黄褐色粘質土下の花崗岩風化層からなる軟基盤層まで達していることから、石室墓壇の掘削段階で得た砂質土をそのまま墳丘盛土として利用したものと思われる。石室床面においても、石室墓壇上に褐色砂質土を埋め込み、礫を敷き並べている。

葺石、外護列石などの墳丘外部施設は確認されない。墳丘西裾部においてやや大きめの礫2点が縦位に墳丘に埋め込まれるように確認されているが、外護列石としては考えにくい。埋葬施設北側にみられる墳丘上に乗る礫群については石室からの転落石であるものと思われ、約70cmの巨礫は天井石であった可能性がある。

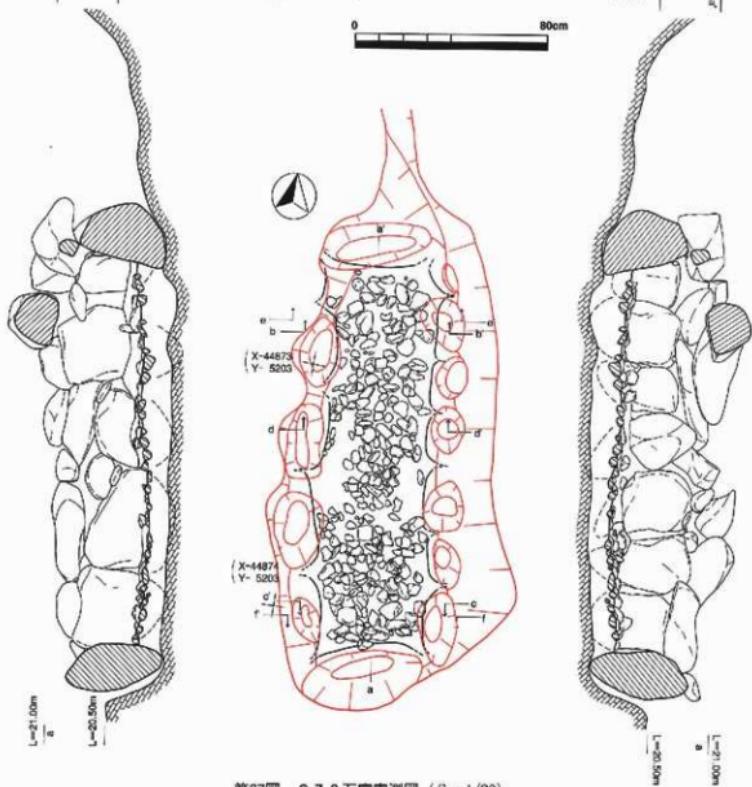
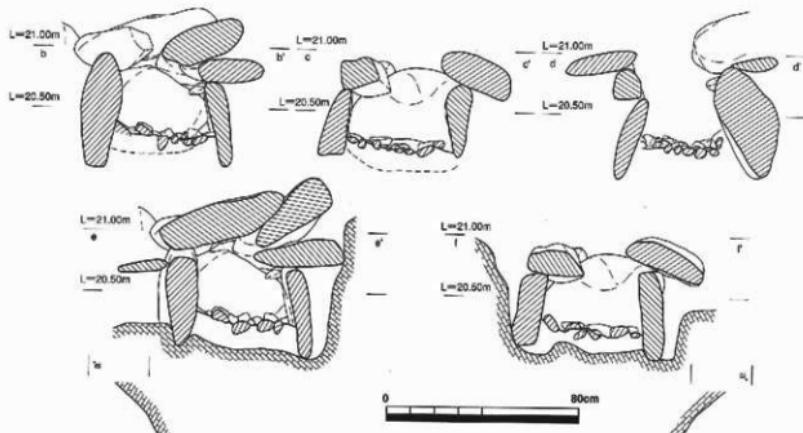
なお、墳丘の削平時期は S Z 1 とはほぼ同時期であると思われる。

埋葬施設

真北から9度西偏する南北方向に主軸をもつ、いわゆる豊穴系小石室である。石室の全長1.6m、最大幅約0.5mのほぼ長方形プランからなり、高さは奥壁近くで0.5m、前壁付近で0.35mである。天井石は奥壁から2石目が現存するが原位置から若干ずれる。壁面の残りは非常によく、奥壁、前壁とともに2段までの両



第26図 S-Z 2 平面・セクション実測図 (S=1/50)



第27図 S-Z 2石室実測図 (S-1/20)

側壁で2~3段までの石積みがみられ、いずれも天井部付近まで残っている。左側壁の奥壁側で若干原位置からずれる部分がみられる。

奥壁、前壁の基底部は、十分な横幅をもつ大ぶりな石材を縦位に据え、2段目は奥壁で2石を、前壁で右側に1石を横位に小口積みする。両側壁の基底部では、縦に長いやや大ぶりな石材を縦位に継平積みにて据える。両側壁の基底石上面では明確には目地が描わらず、両側壁の一部に2段目の石材を積むことによって、奥・前壁の基底石上面と概ね目地を描える。さらに奥・前壁の2段目と日地を描えるため、両側壁ではさらに部分的に3段目を積み上げている。石室壁面の隙間を埋めるための詰石はあまり多く用いていない。

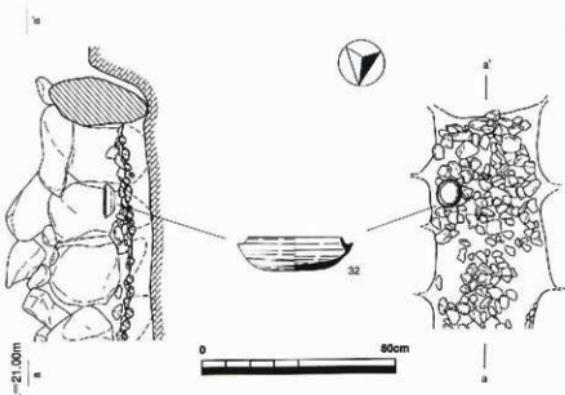
床面は礫床であり、3cmから6cmまでの小礫を並べるが、床面中央部の側壁付近で粗になる部分がある。なお、礫床を構成する礫よりやや大きい8cm程の礫が前壁付近2点、奥壁付近で1点置かれており、棺台の可能性がある。確認された床面は1面のみであり、追葬は確認されない。床面下に排水溝などの施設は認められなかった。

石室はS Z 1周溝外側をさらに削り込むことによって造り出した墓壇をもつ。南北2.0m、東西1.1m、最大高0.25mの規模であり、墓壇内には石室基底石を据え置くための小穴を穿つ。

石室の詳細な構造については、第5章第1節で考察した。

遺物出土状況

石室南東隅付近の床面のほぼ直上で須恵器杯豆1点が、東側をやや上方にして若干の傾きをもちながら正位の向きで出土した。S Z 2石室に伴う副葬遺物である。玉類、鉄製品などその他の副葬遺物は出土していない。



第28図 S Z 2 石室遺物出土状況図

出土遺物

32は須恵器杯IIである。口径11.6cm、器高4.2cm、受部径14.3cm、口縁部高1.0cmで、やや扁平な体部から、短く内傾した後、中位でさらに上方に向けて直立する口縁部をもつ。端部は丸く鋭くおさめる。受部の形状は鋭い三角形である。底部外面2／3は左回転のロクロ目が細いヘラ削り調整を雜に施す。底部外面はヨコナデするが、一部に当具痕が薄く残る。焼成は良好であるが、底部外面に自然釉が付着する。胎土はやや荒く、長石を多く含む。



第29図 S Z 2 石室出土遺物実測図 (S = 1/3)

S Z 3

位置

旧河道の東側、A 13~15・B 13~B 15グリットに位置する。

墳丘・外部施設

中世堆積層の除去後、海拔約20.3m付近のⅠ期旧地表面上面において遺構検出に努めたが、周溝のプランがおぼろげに確認できる程度であり、墳丘土と旧地表面を形成する堆積土との識別が困難な状況であったことから、古墳墳丘盛土は調査区土層断面によって捉えることとして、断ち割りによる確認の後、地山層上面まで掘り下げて遺構検出を行った。地山層上面において古墳の東側を凹形に廻る周溝が平面で検出され、西側では平面で周溝の一部と調査区北壁断面で周溝の痕跡が検出された。推定径約14mの円墳と考えられる。

墳丘盛土は調査区土層断面にて確認した。古墳の検出レベルが調査区内での最低位であり、Ⅱ期までの土砂堆積によって墳丘下部は削平を免れている。しかし、墳丘上部はⅡ期後の搅乱によって既に失われている。

墳丘盛土は、地山層直上、あるいはⅠ期旧地表面上に直接、盛土を始める。周溝外側はⅠ期旧地表面から直接掘り込むことによって遺構のラインを作り出すが、内側については墳丘袖部に黒褐色系の粘質土・粘質土を約20~30cmの厚さではば均一に盛り上げることによって周溝内側の立ち上がりを作り出す様相が確認できる。さらに内側に向かって同じく黒褐色系の粘質土・粘質土を盛ることによって墳丘全体をほぼ同一の高さとして墳丘下部を形成する。墳丘盛土に明確な版築は確認できない。墳丘上部はⅡ期後堆積土が水平堆積しており、Ⅱ期の段階には既に失われていたものと思われる。

古墳周溝は、A 16・B 16グリット付近において東側の周溝が、A 14・B 14グリットとA 15・B 15グリットの中間付近に西側の周溝が確認された。未掘部分を含めて墳丘を廻るように周溝が全廻するものと思われるが、西側については後述するところ、通路状に周溝が寸断していた可能性がある。

東側の周溝は幅2.2m、深さ0.5mで弧を描く平面プランである。検出レベル約19.8m、最深部底レベル約19.5mである。周溝断面は床面がやや平らである。周溝埋土は基本的には堆積順に、暗赤褐色粘質土・黒褐色粘質土からなり、その上にⅡ期の旧地表面となる黒褐色粘質土を水平堆積させている。

西側の周溝では調査区南壁付近で周溝の一部が平面にて検出され、調査区北壁においては周溝断面の痕跡が確認された。平面においては検出幅1.4m、推定幅3.2m、現存深0.6mである。周溝底面は凹凸が激しく

不定である。周溝埋土は基本的には堆積順に、極暗褐色粘質土、黒褐色粘質土からなり、東側周溝と共に通する。その上にⅡ期の旧地表面となる黒色粘質土を厚く水平堆積させている。

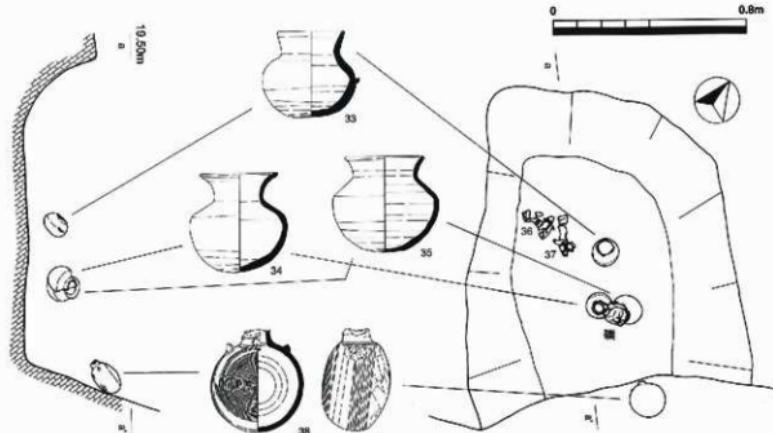
なお、調査区北壁付近では西側の周溝が平面では検出されなかったことから、調査区北壁断面において周溝断面の検出を試みた。しかし、Ⅱ期段階の土壤状造構が調査区断面を大きく擾乱しており、周溝断面を検出するには至らなかった。この擾乱土壤内にはⅠ期からⅡ期までの遺物が含まれることから、墳丘西側についても周溝が全周したものⅡ期の擾乱によって既に周溝が消失した可能性がある。ただ、西側周溝底面には須恵器群が据え置かれるように配されていたことから、周溝が平面検出できなかった付近は元米、墳丘への通路としての土橋状造構であることを示し、周溝内須恵器群を葬送儀礼に関わるものとしても捉えられる。青石、外護列石等の墳丘外部施設は確認されない。

埋葬施設

埋葬施設は既に消失しており不明である。埋葬施設の墓壙の存在を示す上層堆積は認められない。

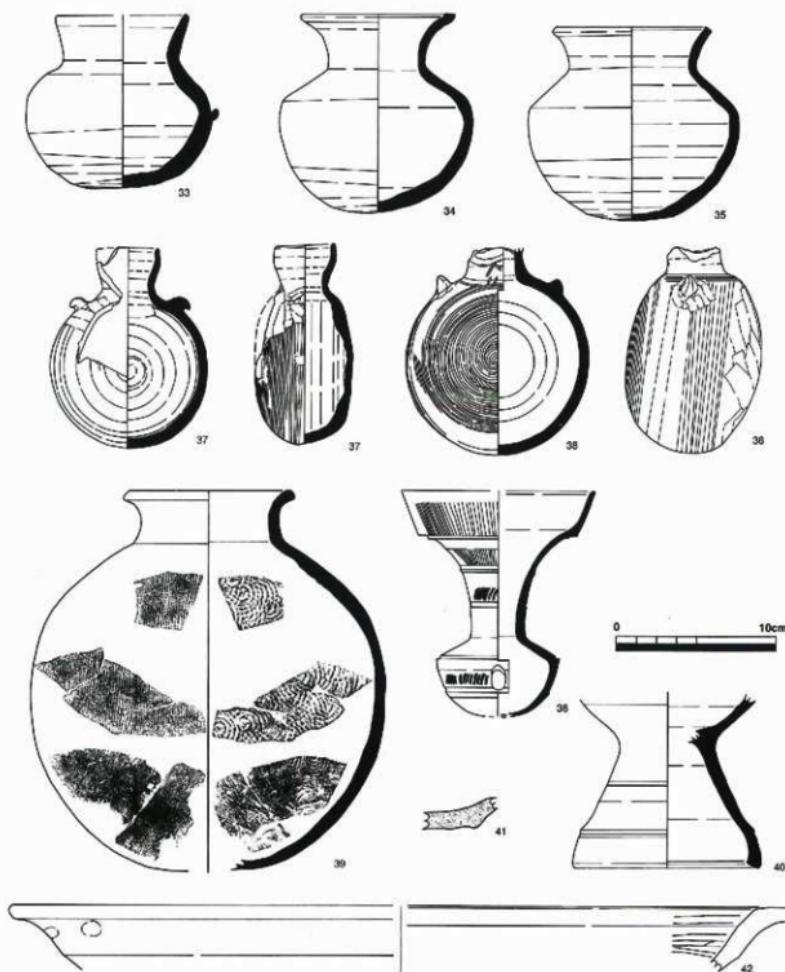
遺物出土状況

周溝西側の平面で検出できた周溝底面付近で須恵器広口壺3点、甌1点、提瓶2点、計6点が出土した。38の提瓶は横位で底面からかなり浮いた状況で出土しているが、他の5点は周溝底面直上から約10cm上の付近で出土している。34～35の広口壺2点は近接して正位の位置で出土した。35の口縁部には繩が載せられて、蓋がされている状況であった。33の広口壺は34～35の広口壺2点からやや北に離れて北側に傾くように横位で出土している。なお、36の甌、37の提瓶は調査時での不慮の事故によって破損してしまった。元来の出土状況は、36の甌が口縁部を南に向けて横位の位置で、37の提瓶が正面を北に向けて正位の位置で、33～35と同一レベルで出土している。



第30図 S Z 3 周溝遺物出土状況図 (S = 1/20)

これらの須恵器群はS Z 3に明確に伴うもので、葬送儀礼に関連する一括遺物であるものと考えられる。西側周溝付近の調査区北壁断面中、II期土壌状遺構埋土内からI期の須恵器甕2点・台付壺1点、II期の上築器甕1点・皿2点、越前焼捕鉢1点、計7点が出土した。



第31図 S Z 3出土遺物実測図 (S-1/3)

出土遺物

33～35は須恵器広口壺。33は推定径7.8cm、器高10.8cm、体部最大径11.6cm。口頸部は太い基部から直線的に外上方へのび、端部を丸くおさめる。体部は中位で径が最大となる。底部は丸みを帯びた平底をなす。体部外面下部に右回転のやや荒い回転ヘラ削り調整を施した後、底部を指揮さえする。内面はヨコナデ調整する。胎土はやや荒く、長石を若干含む。34は口径9.6cm、器高12.4cm、体部最大径12.2cm。口頸部はやや細い基部から丸みを帯びて強く外反してのび、端部を大きく上方へ折り曲げて面取りする。体部は肩が張り、底部は丸底をなす。体部外面下部に左回転のやや荒い回転ヘラ削り調整を施す。内面はヨコナデ調整する。外面上位に降灰する。胎土はやや荒く、長石を若干含む。35は口径9.6cm、器高12.1cm、体部最大径13.2cm。口頸部は太い基部から直線的に外上方へ短くのび、端部はやや肥厚し、端面をもつ。端部内面には凹線をもつ。体部は肩が張り、底部は丸底をなす。体部外向下部に右回転の荒い回転ヘラ削り調整を施す。内面はヨコナデ調整する。焼成は甘く、灰白色を呈する。胎土は緻密であり、砂粒をほとんど含まない。36は須恵器壺。口径12.0cm、器高14.0cm。口頸部は基部が細く、直立した後角度を変えて外方に開き、さらに角度を変えて上方に開く端部は内傾する面をなす。屈曲部外面に凸縫を巡らせる。頸部の上半に放射線文、中位外面に2条の沈線と刺突文を、上下に沈線を巡らす。体部下位から底部に回転ヘラ削り調整を施す。胎土は極緻密で、砂粒を含まない。37～38は須恵器提瓶。37は推定径4.7cm、器高16.3cm、体部最大径13.0cm、体部最大幅8.1cm。口頸部は基部が細く、緩やかに開き、口線端部は丸くおさめる。体部外面は両面に細かい回転ヘラ削り調整を丁寧に行った後、細かいカキメ調整を施す。片面はやや扁平であり、体部外面の上位側面に鉤状の把手を付す。胎土は密であり、長石を若干含む。38は現存高16.9cm、体部最大径15.1cm、体部最大幅11.0cm。口頸部は基部が細い。体部外面は片面が丸みをもちナデ調整を施すが、もう一面は扁平で回転ヘラ削り調整の後、やや荒いカキメ調整を施す。体部外面の上位側面に鉤状の把手を付す。胎土は緻密であり、長石を若干含む。39は須恵器壺。口径10.0cm。器高23.6cm。口頸部は基部が細く、短く外反し、口線端部でさらに外方にのばして丸くおさめる。口頸部外面の文様調整はない。胴部外面に平行文叩き、途中に横方向のナデ消しが、内面には円弧叩きが施される。胎土は密であり、雲母を多く含む。胴部焼成が不良。40は須恵器台付壺。脚部底径11.4cm、残存高10.8cm。脚部は緩やかに外反しながら開くが、脚部下部1／3程の稜、2条の凹線を境として真下に屈曲する。脚端部は内側にのばし、端面をもつ。透かしはない。胎土は緻密である。41は越前焼擂鉢。底部外面には高台をもつ。底部内面に使用痕がみられる。胎土は粗く、小砾を若干含む。42は土師器鍋。推定径53.6cm。器厚は厚い。口線部はほぼ真横にのび、丁寧なヨコナデ調整され、端部を外方に向けて丸くおさめる。胴部は丸い。胴部外面には指頭圧痕、煤の付着がみられる。胴部内面は横方向の細かい削り調整の後、ヨコナデ調整する。胎土は緻密であり、雲母を大量に含む。

第2項 小穴

A15～A16・B15グリットに位置する。小穴3基（P 1～3）が検出された。S Z 3周溝と同一面である、I期造構面において検出されていることからI期に属するものと思われる。小穴埋土内から遺物は出土していない。P 2、P 3がS Z 3東側周溝の裾部において検出されていることから、S Z 3造営に伴う小穴である可能性がある。各小穴の概要を第3表に示した。

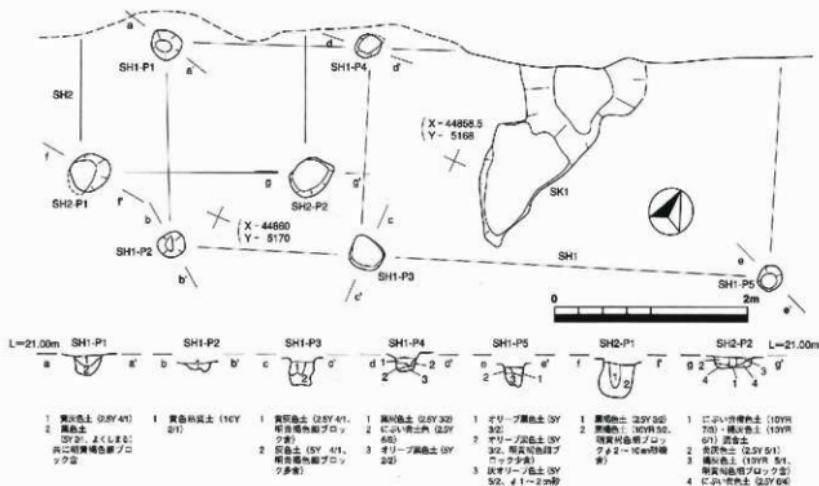
遺構番号	位 置	底 面			平面形	断面形	造 構	埋 土	検出レベル	底レベル	出土遺物	備 考
		長	幅	高さ								
P 1	A16	東西	22	南北	20	17	I-e	I	黒色土 黄色土 (2.5Y 3/2)	19.93	19.78	
P 2	B15	南北	36	東西	20	30	I-b	I	灰色土	19.87	19.53	
P 3	B15	南北	22	東西	21	12	I-e	I	黒色土 黄色土 (2.5Y 3/2)	19.70	19.58	

第3表 小穴 (T期) 一覧表

第2節 II期の造構と遺物

第1項 堀立柱建物跡

B10～B11グリッドで2棟の堀立柱建物跡が確認された。SHと略称する。SH1、SH2が重複し、主軸がややずれる。前後関係は不明であるが時期的にはほぼ同時期と思われる。柱穴の概要を第4表に示した。



第32図 SH1・SH2平面・セクション実測図 (S=1/50)

SH1

B10～B11グリッドに位置する。東西3間、南北1間以上の建物跡である。柱間の規模は東西、南北とも約2.0mであり、建物の主軸は真北から西に112度振れる。5基の柱穴にて構成される。

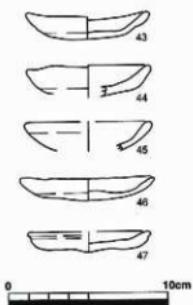
柱穴土層断面ではP3～P5において柱当たりが確認されたが、柱穴底レベルも20.67～20.80mまでややばらつきがある。

SH1-P1 東西32cm、南北30cm、深さ21cmのはば正円プランからなる。埴土には上層に黄灰色土、下層に黒色土をもち、底レベルは20.75mである。埴土上層から正位の位置で折り重ねるように4枚の土師器皿が埋納されており、建物廃絶後の地鎮を示す可能性がある。柱穴の埴土内から計6点の土師器皿が出土した。

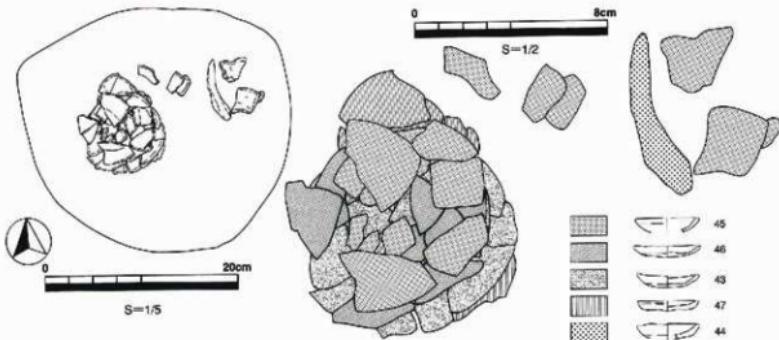
43～47はいわゆる非クロコの土師器皿である。

43は口径7.5cm、器高1.7cm。丸みを帯びた平底であり、口縁部に向かって緩やかにのびるが、口縁部は肥厚して上外方に直線的にのびる。口縁端部は外上方に丸くおさめる。体部外面を強いヨコナデ調整する。外

面底部には指頭圧痕がみられる。内面体部は強いヨコナデ調整、底部は一定ナデ調整する。胎土にはほとんど砂粒を含まない。44は口径7.7cm、器高2.0cm、器厚はやや厚い。平底であり、口縁部に向かってやや直線的にのびる。外面を強いヨコナデ調整する。外面底部には指頭圧痕がみられる。口縁端部は外上方に丸くおさめる。内面体部は強いヨコナデ調整、底部は一定ナデ調整する。胎土に長石を若干含む。45は推定径7.6cm。口縁部に向かって緩やかにのびる。口縁端部は外上方に丸くおさめる。体部と底部の境が不明瞭である。外面を丁寧なヨコナデ調整し、内面体部は丁寧なヨコナデ調整、底部は一定ナデ調整する。胎土にはほとんど砂粒を含まない。46は口径8.2cm、器高1.5cm。底部は丸みを帯びた平底であり、口縁部に向かって緩やかにのびる。口縁端部は外上方に鋭くおさめる。体部と底部の境が不明瞭である。外面を弱い丁寧なヨコナデ調整し、外面底部には指頭圧痕がみられる。内面体部は丁寧なヨコナデ調整、底部は一定ナデ調整する。胎土には



第33図 SH 1-P 1 出土遺物実測図
(S-1/3)



第34図 SH 1-P 1 遺物出土状況図 (S-1/5, 1/2)

とんど砂粒を含まない。47は推定径6.1cm、器高1.3cm。平底である。器高が低く、器厚はやや厚い。体部は底部から屈曲して立ち上がり、口縁部は外上方に短くのびる。口縁端部は外上方に丸くおさめる。外面は強いヨコナデ調整し、外面上位に圓線がめぐる。底部外周には指頭圧痕がみられる。体部内面はヨコナデ調整、底部は一定ナデ調整する。胎土にはとんど砂粒を含まない。

S H 1 - P 2 東西28cm、南北25cm、深さ9cmのほぼ正円プランからなる。埋土は黒色土・單層からなり、底レベルは20.76mである。底面、及び壁面には根石となる礫がみられる。遺物は出土しなかった。

S H 1 - P 3 東西34cm、南北34cm、深さ28cmのほぼ正円プランからなる。柱当たり部分の埋土は黄灰色土、掘り方埋土は灰色土からなり、底レベルは20.67mである。遺物は出土しなかった。

S H 1 - P 4 東西26cm、南北24cm、深さ20cmのほぼ正円プランからなる。埋土はオリーブ黒色土を床土にもち、にぶい黄色土の掘り方埋土をもつ。柱当たり部分の埋土は黒褐色土であり、底レベルは20.80mである。遺物は出土しなかった。

S H 1 - P 5 東西26cm、南北25cm、深さ22cmのほぼ正円プランからなる。柱当たり部分の埋土はオリーブ黒色土、掘り方埋土にオリーブ黒色土、灰オリーブ色土をもつ。底レベルは20.80mである。遺物は出土しなかった。

S H 2

B10～B11グリットに位置する。東西1間×南北1間以上の建物跡である。柱間の規模は東西約2.3mであり、建物の主軸は真北から西に115度振れる。S H 1 に比べ、やや大きな建物跡である。2基以上の柱穴にて構成される。柱穴断面において柱当たりが確認されているが、柱穴底レベルにばらつきがある。

S H 2 - P 1 東西42cm、南北39cm、深さ39cmのほぼ正円プランからなる。埋土は地山土・細ブロック混じりの黒褐色土の掘り方埋土をもつ。柱当たり部分の埋土は黒褐色土であり、底レベルは20.56mである。遺物は出土しなかった。

S H 2 - P 2 南北42cm、東西40cm、深さ12cmのほぼ正円プランからなる。埋土は上層に黄灰色土、下層ににぶい黄色土の掘り方埋土をもつ。柱当たり部分の埋土はにぶい黄褐色土（褐灰色土混）であり、底レベルは20.85mである。遺物は出土しなかった。

遺構番号	次 第	断 面 形 式			平面形	断面赤	基 本 構 造	埋 土	検出レベル	底レベル	出土遺物	備 考
		長 軸	幅 員	延 長								
S H 1 - P 1	B10	東西	32	南北	30	21	I a	I 埋設二重 黒褐色土 (0.5Y6/0) 埋設一重 地山土 (1.5Y6/0)	21.09	20.78	43~47	
S H 1 - P 2	B10	東西	28	南北	25	9	I a	I 埋設一重 黒褐色土 (0.5Y6/0) 埋設二重 地山土 (2.5Y6/0)	20.91	20.76		
S H 1 - P 3	B11	東西	34	南北	34	28	I a	II 柱穴 埋設一重 黑褐色土 (0.4Y6/0) 埋設二重 地山土 (2.5Y6/0)	20.96	20.67		
S H 1 - P 4	B11	東西	26	南北	24	20	I a	I 柱穴 埋設一重 黑褐色土 (0.4Y6/0) 埋設二重 地山土 (0.5Y6/0) 埋り方 にぶい黄褐色土 (5Y6/0) 埋り方 オリーブ黒色土 (5Y6/0)	21.02	20.80		
S H 1 - P 5	B11	南北	36	東西	25	22	I a	I 柱穴 埋設一重 オリーブ黒色土 (5Y6/0) 埋設二重 オリーブ黒色土 (5Y6/0) 埋設二重 オリーブ黒色土 (5Y6/0) 埋り方 黄褐色土 (0.5Y6/0) 埋り方 オリーブ黒色土 (2.5Y6/0)	20.91	20.68		
S H 2 - P 1	B10	東西	42	南北	39	39	I a	I 柱穴 埋設一重 (0.5Y6/0) 埋設二重 地山土 (0.5Y6/0)	20.95	20.58		
S H 2 - P 2	B11	南北	42	東西	40	12	I a	I 柱穴 埋設一重 (0.5Y6/0) 埋設二重 地山土 (0.5Y6/0) 埋り方 黄褐色土 (0.5Y6/0) 埋り方 にぶい黄褐色土 (5Y6/0)	20.99	20.85		

第4表 挖立柱建物跡柱穴一覧表

第2項 棚列

A12・B12グリットで1基の棚列が確認された。SAと略称する。柱穴概要を第5表に示した。

SA 1

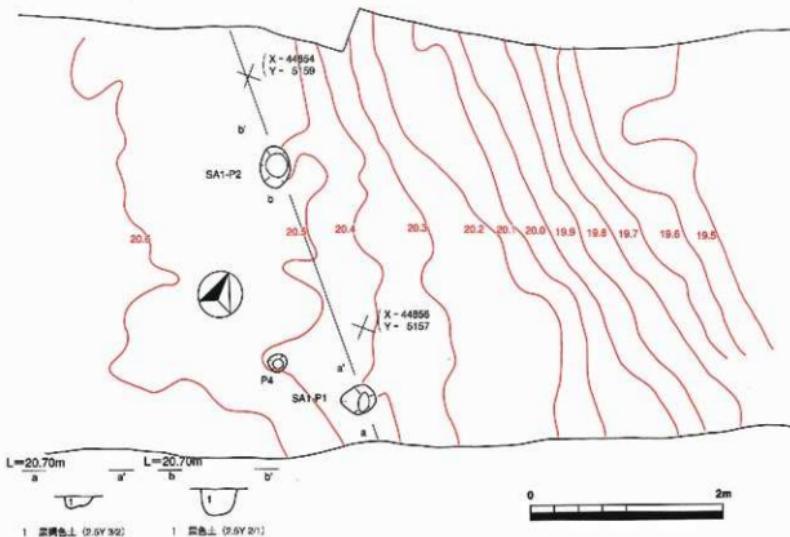
A12・B12グリットに位置する。磁北から西に39度振れる南東-北西の方向に展開する。2基の柱穴が確認され、柱間は約2.6mである。SA 1から東に向けて生活面の海拔レベルが急激に低下し、低地面に至ることから生活域の東限を示す性格をもつ棚列であると思われる。柱当たりは確認されず、柱穴底レベルも20.24~20.32mまでばらつきがある。

SA 1-P 1 東西36cm、南北30cm、深さ11cmのやや梢円プランからなる。埋土は黒褐色土単層であり、底レベルは20.32mである。遺物は出土しなかった。

SA 1-P 2 南北44cm、東西30cm、深さ26cmの梢円プランからなる。埋土は黑色土単層であり、底レベルは20.24mである。遺物は出土しなかった。

遺構番号	位 置	規 模			平面形	断面形	透 情	堆 土	検出レベル	底レベル	出土遺物	備考
		長	幅	高								
SA 1-P 1	B12	東西 36	南北 30	11	1 a	1	細緻土 黒褐色土 (2.5Y3/7)		20.43	20.32		
SA 1-P 2	A12	南北 44	東西 30	26	1 b	1	細緻土 黑褐色土 (0.5Y3/7)		20.50	20.24		

第5表 棚列柱穴一覧表



第35図 SA 1 平面・セクション実測図 (S=1/50)

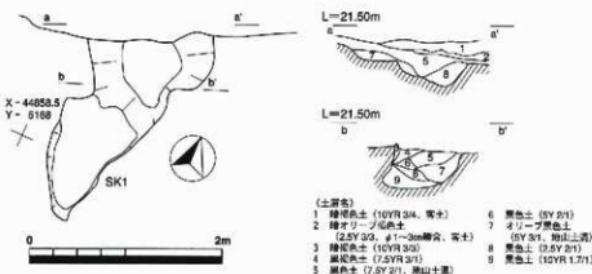
第3項 土壌

それぞれB11、A8・B8、A4・B4グリットで2基の土壌が確認された。SKと略称する。概要を第6表に示した。

SK 1

B11グリットに位置する。南北確認長さ1.98m、東西確認長さ1.24m、深さ0.46mの不定形プランをもつ土壌である。造構の南側を浅く掘り込み、平坦面をもつが、さらに北に向けて深く掘り込む。底レベルは20.51mである。前述とおり検出位置がSH1の範囲内であることから、SH1に伴う掘立柱建物内の付属造構である可能性がある。

埋土の層序は黒色土からなり、大きく4層に細分される。部分的に暗褐色土、オリーブ黑色土がブロック状に混じる。短期間での造構内被覆が考えられる。遺物は出土しなかった。

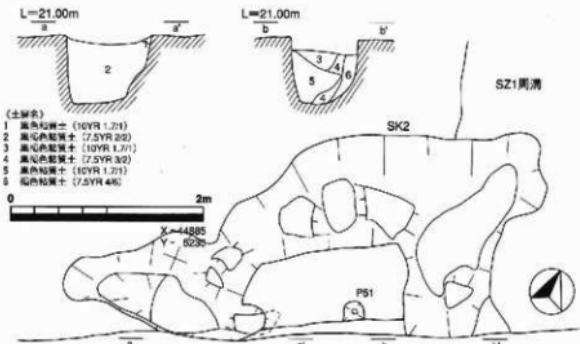


第36図 SK 1 平面・セクション実測図 (S=1/50)

SK 2

A4・B4グリットに位置する。東西長さ4.93m、南北確認長さ2.03m、深さ0.46mの不定形プランをもつ土壌である。底レベルは19.94mである。掘り込みプランは不規則であり、一部オーバーハングすることから、上取り土の性格をもつものと思われる。

埋土の層序は、東側で黒褐色粘質土、西側で堆積順



第37図 SK 2 平面・セクション実測図 (S=1/50)

に黒褐色粘質土、黒色粘質土、褐色粘質土であり、短期間での造構内被覆が考えられる。

遺物は土師器擂鉢が1点出土している。

48は土師器擂鉢である。底部外周には断面が鈍い三角形状を呈する高台を貼り付けている。内外面の表面調整は摩滅が激しいため不明である。器形から経簡蓋容器である可能性もある。胎土は緻密であり、砂粒をほとんど含まない。



第38図 SK 2出土遺物実測図 (S-1/3)

遺構番号	位 置	規 模			平面形	断面形	造 構 地 士	検出レベル	底 レベル	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ							
SK 1	B11	南北	c.v.c.	東西	24	46	IV	IV	20.97	20.51	
SK 2	A 4 - B 4	東西	4.93	南北	2.63	03	IV	IV	20.97	19.94	48

第6表 土壌一覧表

第4項 小穴

堀立柱建物跡、柵列を構成する柱穴を除いて、A 4 ~ A 12、B 5 ~ B 12グリッドで、計48基の小穴が確認された。いずれも遺物は出土していない。Pと略称する。

特に調査区西区の大半の小穴に、遺構断面に黒褐色土からなる柱当たり部分、地山土混じりの褐色土からなる掘り方を明確に残すものがみられることから堀立柱建物跡を構成するものも含まれると思われるが、西区においては調査面積が限定されており、その柱並びを検討するには制約が多いため、ここでは小穴として扱った。

これらの時期について、前述したとおり A15 ~ A16・B15グリッドに位置する P 1 ~ 3 については S Z 3 刷溝検出面と同一レベルにおいて検出していることから I 期に属するものと思われるが、それ以外の小穴は I 期、II 期重複遺構面から検出されていることから I 期に伴う可能性がある。しかし、II 期の他の遺構群との関連、遺構埋土の状況から検討して堀立柱建物跡とはほぼ同時期と捉えられる。各小穴の概要を第7表に示した。

遺構番号	位 置	規 模			平面形	断面形	造 構 地 士	検出レベル	底 レベル	出土遺物	備 考
		長 軸	短 軸	深 底							
P 4	A12	東西	20	南北	18	31	I a	I	20.49	20.18	
P 5	A11 - B11	東西	78	南北	48	17	II b	II	20.74	20.97	
P 6	A11	南北	26	東西	21	8	I a	I	20.88	20.82	
P 7	A10	(南北)	(40)	東西	34	20	I b	II	20.79	20.51	P 6を挖る
P 8	A10	南北	(26)	東西	(22)	13	不明	I	20.76	20.51	P 7に伴うもの
P 9	A 5 - B 5	東西	64	南北	(56)	32	I b	IV	21.18	20.80	
P 10	A 6	南北	30	東西	24	20	I a	II	21.08	20.66	
P 11	A 6	東西	25	南北	24	4	I a	II	21.08	20.99	

第7表 小穴 (II 期) 一覧表

遺構番号	位 置	東 西			平面形	断面形	東 岩 墓 土			検出レベル	底レベル	出土遺物	備考
		長軸	短軸	高さ			検出	底層	土質				
P12	A6	南北	30	東西	25	21	I a	I	褐色土・黒褐色土 (G1073/3)	21.00	20.78		
P13	B6	南北	20	東西	16	7	I a	I	褐色土・黒褐色土 (G1073/2)	21.05	20.58		
P14	A18	東西	34	南北	19	16	I a	I	褐色土・黒褐色土 (G1073/2)	21.08	20.92		
P15	A16	南北	24	東西	21	13	I a	I	褐色土・黒褐色土 (G1073/2)	21.08	20.91		
P16	B6	東西	21	南北	12	23	I a	I	褐色土・黒褐色土 (G1073/2)	21.08	20.82	P17を切る	
P17	B6	南北	(22)	東西	19	25	I a	II	褐色土・黒褐色土 (G1073/2)	21.08	20.85	P16にせざれ	
P18	B6	南北	26	東西	21	19	I a	III	円筒状・黒褐色土 (G1073/3)	21.13	20.89		
P19	A6	南北	37	東西	35	29	I a	III	円筒状・黒褐色土 (G1073/3)	21.92	20.89		
P20	A6	東西	36	南北	25	18	I a	II	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	21.02	20.69		
P21	A6・B6	東西	30	南北	(25)	18	I a	II	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	21.03	20.69	P22を切る	
P22	A8・B8	東西	(1.00)	南北	(3.00)	18	I a	I	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	21.10	20.65		
P23	A6	東西	28	南北	26	16	I a	III	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	20.93	20.99	P24を切る	
P24	A6	東西	42	南北	30	18	I b	II	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	20.96	20.95	P23にせざれ	P25を切る
P25	A6	東西	(38)	南北	34	14	I a	II	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	20.95	20.99	P26にせざれ	
P26	A8	東西	28	南北	18	26	I b	II	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	20.94	20.62		
P27	A6	東西	18	南北	16	9	I a	III	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	21.14	21.08		
P28	A6	東西	34	南北	20	9	I b	II	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	21.12	21.03		
P29	A7	東西	30	南北	22	5	I b	II	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	21.01	20.95		
P30	A7	東西	18	南北	11	7	I b	II	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	21.05	20.98		
P31	B7	東西	25	南北	20	15	I a	III	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	21.02	20.75	P32を切る	
P32	B7	南北	(42)	東西	38	31	I a	II	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	21.01	20.56	P33にせざれ	P34を切る
P33	B7	東西	(28)	南北	16	6	I b	II	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	21.02	20.95	P35にせざれ	
P34	B7	東西	22	南北	16	6	I b	I	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	21.00	20.93		
P35	B7	東西	15	南北	16	36	I a	I	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	21.04	20.68		
P36	B7	東西	15	南北	14	20	I a	III	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	21.03	20.85		
P37	B7	東西	16	南北	16	11	I a	II	柱状・泥炭化色土 (G1073/2)	21.02	20.91		
P38	B7	南北	24	東西	20	11	I a	I	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	20.96	20.57		
P39	B7	南北	28	東西	19	16	I a	I	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	21.01	20.55		
P40	A7	東西	28	南北	23	11	I a	I	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	20.98	20.75		
P41	A7・B7	東西	18	南北	14	12	I a	I	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	20.91	20.78		
P42	B7	東西	35	南北	36	45	I b	II	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	20.97	20.52		
P43	A6	東西	31	南北	22	21	IV	I	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	21.08	20.69		
P44	A6	東西	15	南北	15	18	I a	I	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	21.12	20.95		
P45	A6	東西	30	南北	15	12	I b	I	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	21.11	21.00		
P46	A6	東西	49	南北	30	26	I b	IV	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	21.06	20.77		
P47	A6	東西	37	南北	32	19	I a	IV	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	21.08	20.83		
P48	A5	南北	38	東西	22	18	I a	IV	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	20.91	20.67		
P49	A5	東西	47	南北	(39)	21	I b	IV	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	20.82	20.78		
P50	B5	東西	36	南北	20	7	I b	IV	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	20.84	20.67		
P51	A4	東西	22	南北	(20)	1	I a	I	柱状・黒褐色土 (G1073/2)	20.84	20.67		

第7表 小穴(Ⅱ期)一覧表

第8表 遺物一覽表

第5章 考察

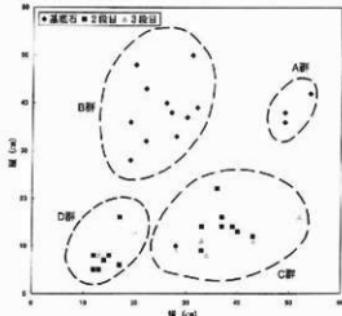
第1節 SZ 2 石室の検討

第1項 SZ 2 石室の構造と石材規格

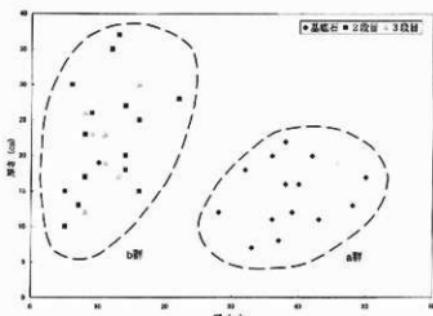
SZ 2 石室の概略は前述のとおりであるが、本項では石室石材規格の検討を踏まえて、報告する。石室の規模は前述のとおり、全長1.6m、最大幅約0.5mのほぼ長方形プランからなる。

奥壁・前壁の基底部は、ヒストグラム1のA群にみるような、十分な横幅をもつ大ぶりな石材を縦位に据えて安定を図っている。奥壁・前壁の2段目は、奥壁上面の両側に2石を、前壁上面の右側に1石を横位に小口積みする。この2段目の石材は、天井石架設に際して安定を図るために積まれたものであり、この石材の上面が石室の高さを決定する要素をもっている。

両側壁の基底部では、ヒストグラム1のB群、ヒストグラム2のa群にみるように、意識的に横幅・控えに厚みを抑え、縦に長いやや大ぶりな石材を、縦位に縦平積みにて据える。第41~42図において示したように基底石は上側に比較的平坦な面をもち、平坦面をもつ部分は上方に、尖った部分は下位にして石室幕壇内の小穴に埋め込むことによって、石室の安定を図っている。石材の厚みが抑えられたのは、石室幕壇の立ち上がり壁面に密接させるように基底石が据えられていることから、石室プランの規格に影響を受けたためであると思われる。



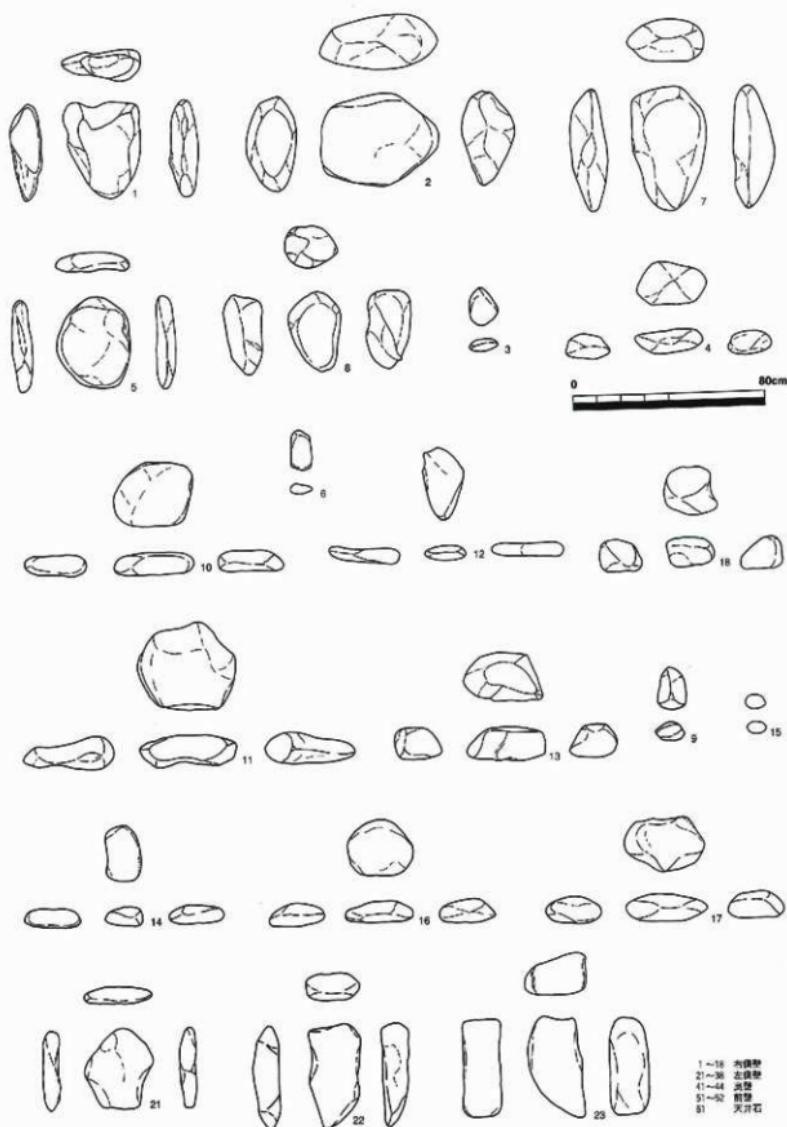
第39図 SZ 2 石室使用石材ヒストグラム1



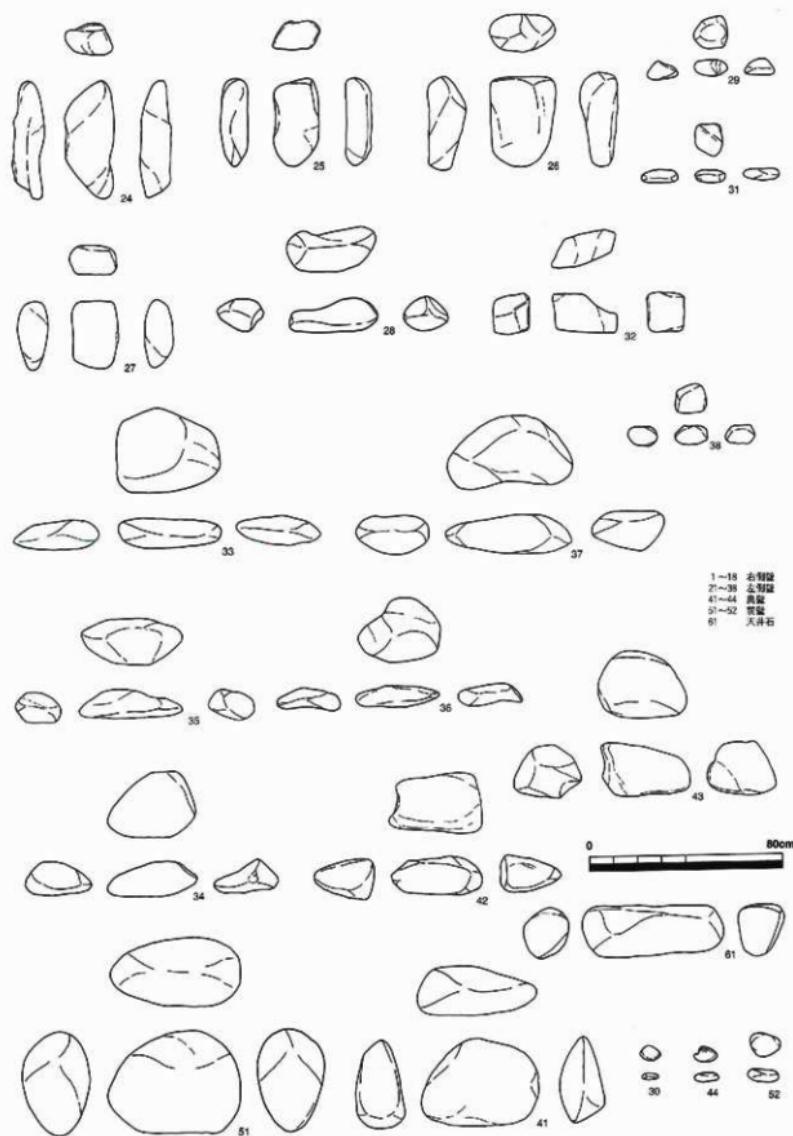
第40図 SZ 2 石室使用石材ヒストグラム2

両側壁の基底石上面では明確には日地が描わらず、両側壁の一部に2段目の石材を積むことによって、奥・前壁の基底石上面に合わせて日地を描えようとした傾向が見てとれる。さらに奥・前壁の2段目と日地を描えるため、両側壁ではさらに部分的に3段目を積み上げている。このように、両側壁の高さは奥・前壁の高さに起因しており、石室の最終的な高さ調整を容易にするために、ヒストグラム1のC・D群にみるように、石材の縦の長さを意識的に抑えた薄い石材を2、3段目に必要に応じて選択されたものと考えられる。

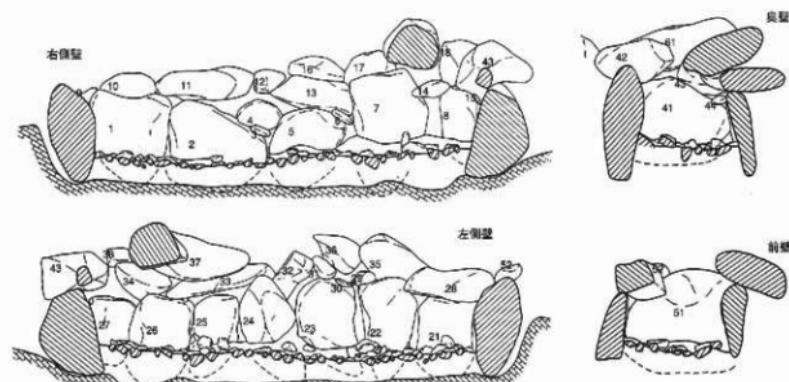
奥・前壁を含めて、石室全体の2段目以上の石材については、ヒストグラム2のb群にみるように、奥に控えを取り、長手積み、小口積みを併用する方法が通有する。意識的に石室外に向けて控えを取ることによって、石室石材の被加重の安定を図るとともに、天井石架設に際して安定を図ったものであると思われる。



第41図 S Z 2 石室使用石材実測図1 (S -1/20)



第42図 S Z 2石室使用石材実測図2 (S=1/20)



第43図 S Z 2石室石材番号図 (S=1/20)

番号	型	寸法	位置	厚所	幅	横	鉢丸	後退	傾斜	長辺	短辺	高さ	石種	加重	地	底	測定番号	備考
1	右	楕円	基底	39	32	12	39	30	1	1,219	12	90mm		9,10,11	右3			
2	右	楕円	基底	38	29	22	49	38	1	1,289	22	花崗岩		3,4,11	右5			
3	右	楕円	基底	5	12	16	16	12	1	1,333	3	花崗岩	2	4	右8			
4	右	楕円	基底	10	28	19	28	19	1	1,474	19	花崗岩	2,3,5	11,12,13	右7			
5	右	楕円	基底	37	30	8	37	30	1	1,233	8	花崗岩		4,6,13	右11			
6	右	楕円	基底	4	9	16	16	9	1	1,778	4	砂岩	6	13	右12			
7	右	楕円	基底	50	31	17	50	31	1	1,029	17	花崗岩		14,17	右14			
8	右	楕円	基底	32	22	18	32	22	1	1,495	18	花崗岩		14,15,18,43	右17			
9	右	小口	2段	8	12	17	17	12	1	1,417	8	砂岩	1,81		右1			
10	右	小手	2段	9	33	26	33	28	1	1,269	26	花崗岩	1		右2			
11	右	小手	2段	13	40	37	40	37	1	1,081	37	花崗岩	1,2,4		右4			
12	右	小口	2段	6	17	30	32	17	1	1,764	30	花崗岩	4,13		右6			
13	右	小手	2段	14	33	26	33	14	1	2,357	26	花崗岩	4,5,6	12,16,17	右10			
14	右	小手	2段	8	15	23	23	15	1	1,533	23	砂岩	7,8		右15			
15	右	砧石	5段	5	8	6	8	6	1	1,333	6	砂岩	8,41		右18			
16	右	丸子	3段	9	28	22	28	25	1	1,217	9	花崗岩	13,17		右9			
17	右	丸子	3段	11	35	23	33	25	1	1,594	23	砂岩	7,13		右13			
18	右	丸子	3段	13	26	17	20	17	1	1,176	17	花崗岩	9,14		右16			
21	左	楕円	基底	7	28	7	33	28	1	1,179	7	花崗岩		28	左2			
22	左	楕円	基底	43	22	11	43	22	1	1,953	11	花崗岩		28,29,33	左4			
23	左	楕円	基底	40	26	16	40	26	1	1,538	16	花崗岩		29,35,32	左9			
24	左	楕円	基底	48	20	13	48	20	1	2,406	13	花崗岩		32,33	左11			
25	左	楕円	基底	36	19	11	35	19	1	1,895	11	花崗岩		33	左14			
26	左	楕円	基底	38	27	16	38	27	1	1,407	16	砂岩		33,34	左16			
27	左	楕円	基底	28	19	12	28	19	1	1,474	12	花崗岩		34,43	左18			
28	左	丸子	2段	14	29	18	39	18	1	2,167	18	砂岩	21,22	35,52	左1			
29	左	丸子	2段	7	14	13	14	13	1	1,076	7	花崗岩	22	35,36	左5			
30	左	砧石	2段	2	7	6	7	6	1	1,187	6	砂岩	2,3		左8			
31	左	小口	2段	5	12	15	15	12	1	1,250	15	花崗岩	3,12	3,6,32	左7			
32	左	丸子	2段	16	17	15	17	16	1	1,063	15	砂岩	23,24,31		左10			
33	左	丸子	2段	12	43	35	43	35	1	1,229	35	花崗岩	24,25,26,32	34,37	左13			
34	左	丸子	2段	14	37	27	37	27	1	1,870	27	花崗岩	35,47,52	37,38	左15			
35	左	丸子	3段	11	43	15	43	19	1	2,263	15	砂岩	22,28,29,36		左3			
36	左	丸子	3段	8	34	26	34	26	1	1,368	26	砂岩	39,90,31	35	左6			
37	左	丸子	3段	16	26	36	52	30	1	1,733	36	花崗岩	3,4,32		左12			
38	左	丸子	3段	81	18	12	13	12	1	1,083	12	砂岩	83,93		左17			
41	奥	楕円	基底	38	49	20	49	35	1	1,406	20	砂岩		28,42,43,44	奥1			
42	奥	小口	2段	16	37	25	37	25	1	1,480	25	砂岩	8,15,41		奥3			
43	奥	小口	2段	22	36	28	36	28	1	1,286	28	花崗岩		28,41,44	奥4			
44	奥	楕円	基底	3	10	6	10	6	1	1,667	6	砂岩	41	43	奥2			
51	奥	楕円	基底	42	54	20	64	42	1	1,286	20	花崗岩		52	奥1			
52	奥	小口	2段	61	13	10	13	10	1	1,300	5	砂岩	51		奥2			
53	左井		水井	21	58	19	58	21	2	2,762	19	砂岩	7,14,37		左1			

第9表 S Z 2石室使用石材一覧表

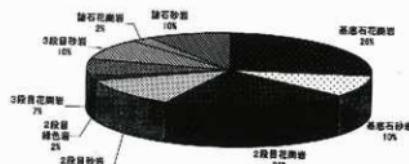
第2項 S Z 2 石室の使用石材石種

石室構成石材の石種については、奥壁で砂岩3点・花崗岩1点、前壁で砂岩1点・花崗岩1点、右側壁で砂岩6点・花崗岩12点、左側壁で砂岩7点・花崗岩10点・緑色岩1点、天井部は砂岩1点で構成される。

砂岩、花崗岩、緑色岩のいずれの石材ともに耳川流域で容易に採取できる石材である。使用石材には明確な加工痕がみられないことから、石室構築の規格に応じて自然礫が採取されたものと思われる。

石材使用部位等による明確な石種の使い分けは認められないが、基底石から上段にゆくにつれて、砂岩の割合が多くなるようである。

礫床を構成する小礫の石種は砂岩、花崗岩である。石室使用石材同様、いずれも耳川流域において採取可能な石種である。砂岩がやや多い傾向がある。



第44図 S Z 2 石室使用石種円グラフ

第3項 S Z 2 構築工程の復元

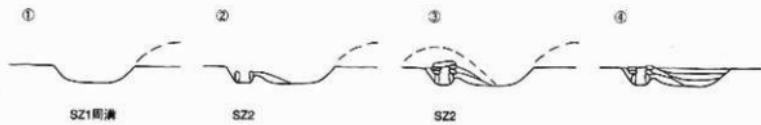
S Z 1 周溝埋土、S Z 2 墳丘土、S Z 2 石室構築工程の検討からS Z 2 構築工程を復元する。

まず、S Z 1 東側周溝外側の地山層を掘り込み、周溝幅を広げるよう石室墓壙を造り出す（第45図①～②）。墓壙東側の地山層は掘削を作わない。このことはS Z 1 の周辺埋葬を意識したものであることと、S Z 2 造営に際して掘削土量の削減を図ったものであると思われる。また、石室墓壙内に石材を据えるための小穴を穿つこと、奥壁以外は石室墓壙の立ち上がり壁面に接するように縦位に基底石が置かれることから、この段階で既に石室のおおよその規模が決定される。

次に石室墓壙に基底石を据え置く。据え置く順序は1. 奥・前壁、2. 左側壁、3. 右側壁の順である。側壁の基底石は前壁から奥壁に向けて据えられたものと思われる。左側壁では最奥寄りの基底石が窮屈に置かれ、右側壁では最奥寄りの2石間に隙間がみられることによる。

基底石が据え置かれた後、石室墓壙内の裏込めを行い、その後、地山層の上から基底石上面のレベルを目安として、ブロック状に土砂を盛りし、石室造営に伴う作業面を構成するとともに墳丘基底部を形成することによって墳丘規模を決定付けている（第45図③）。なお、この段階で床面を構築し、礫を敷き並べる。

次の段階で、奥・前壁の日地を意識して両側壁の2、3段目を積み上げた後、石室の裏込めを兼ねた墳丘上部の盛土がされる。埋葬の後、最終段階で天井石を架設し、墳丘上部にさらに大きなブロック状に土砂を盛ることによって、最終的な盛土が行われたものと考えられる。墳丘東側では何ら人為的な加工を施していない地山層の上から直接、土砂を積み上げ、墳丘とする。その後、後世にS Z 1 周溝の埋没、S Z 2 墳丘の削平によって、第45図④のような状態になったものと思われる。



第45図 S Z 2 構築工程の復元図

第4項 竪穴系小石室の類例

S Z 2 主体部にみる竪穴系小石室は、近年の群集墳調査において類例が増えつつある埋葬形態である。追葬を意識せずに横穴式石室壇に取り付くように造営される小規模な単独壇の埋葬形態であり、一般的な横穴式石室に比してその技術的な影響は受けていると考えられるものの、その規模は極めて小さく、数段の石積みをもって天井石を架設するものである。

近畿地域での検出例として、若狭地方においては大飯町大飯神社古墳群で5基（福井県埋蔵文化財調査センター 1999a、1999b）、越前地方においては敦賀市堂坂遺跡で2基（福井県埋蔵文化財調査センター 1986）、武生市茶臼山古墳群で消滅壇を含めて14基（清水・河北 1951）の小石室壇が報告されている。

これら的小石室と興道寺古墳群 S Z 2 石室とを比較すると、前壁をもつ点では茶臼山古墳群第1号・第11号小石室と共通し、副葬遺物をもつ点では大飯神社古墳群小石室1号壇・5号壇、茶臼山古墳群第11号小石室と、礎床をもつ点では、大飯神社古墳群小石室2～5号壇、茶臼山古墳群第6号・第11号とそれぞれ共通する。

大飯神社古墳群、堂坂遺跡の小石室の帰属時期は不明であるが、茶臼山古墳群では1号壇に伴って出土している須恵器杯口蓋がTK43型式期であり¹¹、報告者は茶臼山古墳群小石室を1号壇に後出する從属壇と位置付けていることから、茶臼山古墳群小石室は6世紀後半以降の時期が求められる。興道寺古墳群 S Z 2 石室は、出土の須恵器杯口が後述のとおりTK43型式期であることから、茶臼山古墳群小石室と同時期がやや先行する時期であると思われる。若狭地方・越前西部地方では6世紀後半にはその出自が求められるものと思われる。技術的な系統については、一般的な横穴式石室から派生して成立したものか、前壁を有する点でいわゆる竪穴系横口式石室から派生したものかは不明であるが、小石室の帰属時期から考えて、横穴式石室から移行する埋葬形態ではなく、それと同時に存在した埋葬形態である。興道寺古墳群においても今後の調査によって同様な小石室壇が検出される可能性は高いものと思われる。

【参考・引用文献】

- 清水潤三・河北製生 1951 「武生市阿木、茶臼山第一号墳の調査」『文化財調査報告第1集』福井県教育委員会
古川 登 1980 「付録 第3章 福井県嶺南地方の埴輪について」
『福井県埋蔵文化財調査報告第4集 六呂瀬山古墳群 国道364号線建設に伴う発掘調査報告書』福井県教育委員会
山口 充 1984 「美浜町内出土の後期弥生式土器と土師器」『福井県考古学会誌第2号』福井県考古学会
福井県埋蔵文化財調査センター 1986 「年報2 昭和61年度」
人江文敏 1987 「V. 付1 若狭地方出土の古式須恵器の検討」『上中町文化財調査報告第5集 三牛野遺跡』上中町教育委員会
福井県埋蔵文化財調査センター 1999a 「近畿白動車道鉄賀線 埋蔵文化財発掘調査ニュース その3(大飯町野尻・山田地区)」
福井県埋蔵文化財調査センター 1999b 「大飯神社古墳群発掘調査現地説明会資料」
武生市教育委員会 2001 「茶臼山古墳群 - 主要地方道武生・米ノ森改良工事に伴う発掘調査報告-」武生市教育委員会

註1 報告書では蓋として報告されているが、実測図を見る限りTK43型式に相当する杯口蓋であると思われる。

第2節 I期須恵器の検討

第1項 I期須恵器の概要

今回の調査において、計14点のI期に属する須恵器が出土した。S Z 1周溝壺土中から杯H蓋3点(13~15)・堀2点(16)、S Z 2石室床面から杯H 1点(32)、S Z 3周溝底面から広口壺3点(32~35)・壺1点(36)・提瓶2点(37~38)、S Z 3周溝埋土中から壺3点(39)・台付壺1点(40)である。

興道寺古墳群近辺では、MT15~TK209型式期までの興道寺窯が存在し、過去に発掘調査が行われているものの、その実態は不明である。また、周辺古墳群出土資料の編年的な棒組みも十分でないため、ここでは出土資料の形態・製作技法などから、年代線を陶邑編年に求めてその帰属時期を検討する。

S Z 1周溝内出土の杯H蓋13~15には天井部外縁の調整などにみるとるように時期差が存在する。しかし、移が退化し、沈線化するものの移が残ること、口縁部が外に開かず下方に伸びること、口縁端部を丸くおさめず、平坦面・凹縫などを残すことなどから、TK10型式からTK43型式に相当し、6世紀後半の時期と考えられる。

S Z 2石室出土杯H32は、口縁部が短く内傾し、底部は浅く丸みを帯びることからMT85型式よりも降るが、外面にはロクロ目が粗く、粗雑ながらも回転ヘラ削り調整を残すことからTK209型式よりは遅り、TK43型式に相当し、6世紀末に近い時期と思われる。

S Z 3周溝内一括資料の広口壺33~35・壺36・提瓶37~38については一括の共伴資料である。33~35の広口壺には外面底部に粗いもののヘラ削り調整をしっかり残すこと、36の壺の口縁部の基部が細く、大きく外反することと刺突文・放射線文などの文様を規則的に施すこと、あるいは、37~38の提瓶体部の断面観が丸みを帯びることと37の口縁端部が外方に伸びられず、丸くおさめられることなどから、TK43型式に相当する。個体間での若干の時期差は存在しそうであるが、明確な型式差を示すものではない。

以上のことから、I期出土須恵器の所属時期の中心をTK43型式期におき、幅をもって6世紀後半代と考えられる。

なお、ヘラ削り調整などの製作技法に時期差とは考えがたい粗精差がみられ、また土器胎土自体にも明確な差異が認められることから、次項において分類を行っている。

第2項 I期須恵器の分類

製作技法差、胎土の肉眼観察などにより以下のとおり分類する。

A類 回転ヘラ削り調整、ヨコナデ調整などに精巧な製作技法をあるもの。土器胎土は緻密であり砂粒を含まない。重量感がある。13~15の杯H蓋、16の堀、35の広口壺、33の提瓶、36の壺からなる。

35外面の回転ヘラ削り調整、36外面の沈線・刺突文・放射線文は極めて精巧である。33・35は焼成が甘く、乳白色を呈するものの、胎土自体は緻密である。

B類 A類に比して調整技法の緻密さが失われ、焼成などによる器形の歪みがみられるもの。土器胎土は密であるが、A類に比してやや荒く、砂粒を一定量含む。また、A群に比べ、質感が乏しい。32の杯H、39の壺、33~34の広口壺、37の提瓶、40の台付壺からなる。37・39は緻密な胎土をもつものの長石、雲母などの砂粒を多く含んでいる。32~34、40は黒紫色を呈し、胎土はやや荒く、砂粒を多く含

み、外面に降灰する点で共通し、同一窓産を伺わせる。1999年報告の須恵器1類の胎土に共通する。

これらの分類の根柢となる差異は時期差というよりも、むしろ須恵器の供給源となる產地窓の須恵器の特徴に起因するものと思われることから、古墳群に少なくとも2地域からの須恵器供給があつたことが考えられる。若狭地域の古墳時代須恵器窓（群）は、若狭同東部域のMT15型式期から操業を開始する興道寺窓跡（三方郡）と、西部域のTK209型式期に操業を始める今谷窓跡群（大飯郡）が知られるのみであり（畠中 2000）、当該地での須恵器供給については当然、興道寺窓からの搬入を考慮する必要がある。以前、三辻利一氏によつて興道寺古墳群出土須恵器の蛍光X線分析がされており、当該地へは陶邑窓跡群と興道寺窓跡から須恵器供給があつたことは既に指摘されているとおりである（三辻・森川 1981）。このことから、上記分類はそのまま陶邑窓跡群と興道寺窓跡にその供給源を求めることができる可能性があり、今回の調査で得られた資料の蛍光X線分析を三辻利一氏に依頼した。

第3項 I期須恵器の胎土分析の前提

蛍光X線分析に際しては、今回の調査で得られた古墳時代後期に属する須恵器を対象としたが、完形資料である杯H32、また、図化しなかつた資料、及び図化資料中、細破片資料はその対象外とした。

合わせて、三辻氏のご好意により平成10年度に美浜町教育委員会による試掘調査で出土した古墳時代後期の杯H2点（報告番号55・56）を分析対象とした。55は興道寺窓に帰属すると思われた須恵器1類の代表的資料であり、56は他地域からの搬入品と思われた資料である（美浜町教育委員会 1999）。これらの分析により、興道寺古墳群のみならず、興道寺古墳群の被葬者集団の居住域と想定される興道寺遺跡の須恵器の搬入形態を明らかにしておきたいと考えた。

また、平成9年度の美浜町教育委員会による発掘調査において出土した律令期の須恵器6点、平瓦2点を分析の対象とした（美浜町教育委員会 1998）。興道寺窓推定地から出土・採集される瓦類の胎土と律令段階での興道寺遺跡出土須恵器とは製作技法・胎土ともに類似性が高く、特に胎土に炭母を多く含むことから表層地質に花崗岩をもつ当該地近辺に瓦陶兼業窓の存在が想定された。従って、律令段階での須恵器搬入形態を胎土分析によって明らかにしたいと考えた。

【参考・引用文献】

- 三辻利一・森川昌和 1981 「元素分析による古代土器の系縁推定の実例(3) 一獅子塚古墳(福井県)出土須恵器一」
『奈良教育大学紀要第30巻第2号』奈良教育大学
尾野善裕 1998 「中・後期古墳時代歷代窓の再検討」
『土器・墓が語る 美濃の独自性～弥生から古墳へ～』東海考古学フォーラム岐阜人会実行委員会
美浜町教育委員会 1998 「興道寺遺跡」
美浜町教育委員会 1999 「平成10年度興道寺窓開闢認証調査報告書」
畠中英二 1999 a 「附註TK43号窓跡の年代観に関する再検討－出土陶器からのアプローチー」
「瓦古千年－森郁夫先生還暦記念論文集－」森郁夫先生還暦記念論文集刊行会
畠中英二 1999 b 「近畿地方の飛鳥・白鳳時代土器編年研究と問題点」
「飛鳥・白鳳の瓦と土器－年代論－」帝塚山大学考古学研究所歴史考古学研究会・古代の土器研究会
高橋清隆 1999 「生産とまつり」「若狭の古代遺跡－発掘の成果と出土品－」福井県立若狭歴史民俗資料館

第3節 II期土師器の検討

第1項 II期遺物の概要

本報告に掲載したII期の遺物として、越前焼窯・擂鉢が各1点、土師器鍋3点・皿25点がある。未掲載資料を含めて、主体を占めるのは土師器皿類であり、陶磁器類が乏しい傾向がある。概要は以下のとおり。

陶器類 中世堆積層から出土したの越前焼窯2点(12)、S Z 2周溝内から出土したの越前焼擂鉢1点(41)がある。いずれも胴部破片である。

磁器類 S Z 1周溝内出土、中国青磁碗口縁部破片1点(未報告資料)がある。

土師器鍋類 S Z 1周溝内から出土した鍋(30~31)、S Z 3周溝内から出土した鍋(42)がある。全体の器形を明らかにできるのは30である。

土師器鉢類 S K 3埋土内から出土した擂鉢1点(48)がある。

土師器皿類 中世堆積層から出土した15点(4~11)、S Z 1周溝内から出土した33点(18~29)、S Z 3周溝内から1点、S H 1-P 4埋土中から6点(43~47)、未報告資料1点が出土した。いずれも非ロクロ成形の、いわゆる手捏ねの皿類である。

第2項 土師器皿の概要

調査によって、II期に属する土師器皿類は計46点の出土があった。報告資料を対象として、形態的な特徴から分類した。

A類 外面をヨコナデし、平底となるもの。底部外面に指頭圧痕が残る。内面体部はヨコナデ調整、内面底部は一定ナデ調整する。口径6.0cmから12.8cmまでばらつきがある。器形から3パターンに細分される。

A 1類…強いヨコナデにより、外面底部との境、または体部中位に圓線がめぐるもの。S Z 1周溝内出土の18~23、中世堆積層出土の4~5、7~9がある。

A 2類…体部と底部の境が不明瞭で、丸みを帯びるもの。S Z 1周溝内出土の24~25、S H 1-P 4埋土内出土の45~46がある。

A 3類…体部を引き上げて作り、口縁部が直線、または外半傾向のもの。S Z 1周溝内出土の26~28、S H 1-P 4埋土内出土の47、中世堆積層出土の6、10~11がある。

B類 外面上位を強いヨコナデ調整し、平底となるもの。体部中位に明瞭な稜をもつ。外面底部には指頭圧痕がみられ、内面体部はヨコナデ調整を、内面底部は一定ナデ調整する。S Z 1周溝内出土の29がある。

今回の調査においては陶磁器類の出土が乏しいため、それらとの土器組成は時期決定の根拠にならず、また若狭地方における該期の資料は乏しい状況にあるため、越前地方における土師器皿類の分類を踏まえて、所属時期を検討する。

越前地方の編年と比較すると、A類が富山分類のD類に類似し、B類が同じくC類に類似する(富山 1997)。いずれも13世紀後半から14世紀前半に位置付けられている第2期の資料と似ており、共伴の越前焼窯・擂鉢の13世紀後半の年代観、中国青磁碗の13世紀後半から14世紀前半の年代観と咀嚼するものではない^{※1}。A

類、B類とともに13世紀後半から14世紀前半に属する資料と考えておきたい。

胎土に若干の石英、長石、雲母を含む個体が多いことや、器壁が厚く、技術的にも精密さを欠き、歪みが大きいことから、京都系土師器皿を志向したものとは言い難いが、調整技法に二段ナデ手法が認められる資料が散見し、京都系の影響を受けている様相は確認できる。越前地方の12世紀末から13世紀前半の第1期の資料が京都系の影響を受けているものとされることから(富山 1997)、当該地においても越前地方と同様に京都系土師器の影響を受け、13世紀後半にはその名残を残しながらも、いたって在地化したものと思われる。形態差からA類の細分を試みたが、共伴関係を考慮しても、いずれも製作時における工人の技術的差異と捉えられ、明確な時期差は考えられない。

第3項 土師器鍋の概要

II期に属する土師器鍋類は計3点の出土である。

全体の器形を明らかにできるのは30である。口縁部は器厚を減じながら外上方に伸ばし、端部を丸くおさめている。胴部は頸部から緩やかに内傾したのち、胴部中位でさらに内側に強く折れ、底部を平底とする。31・42は口縁部をほぼ真横に伸ばすが、端部をまるくおさめることは30と共通する。また、31・42の胴部下位は失われているため全体の器形は不明であるが、頸部から緩やかに内傾することは30と共通する。胴部の器厚は口徑に比例するものと思われる。表面調査は、外面に製作時の指痕圧痕を残すことと共通するが、内面では30にヨコ刷毛調整が、31に2段のヨコナデ調整とタテナデ調整が、42に横方向の細かい削り調整が施されるなど共通性は乏しい。いずれも外面には使用痕を示す煤の付着が認められる。土器胎土はいずれも緻密であり、雲母が大量に含まれることから在地で製作された鍋類であると思われる。

当該地での出土量が乏しいため、該期の土師器鍋類の特徴を明確にすることは困難であるが、口縁部を横～外上方に伸ばし、胴部は内傾して中位からさらに屈曲し、平底の底部をもつものの、法量・内面調整の定量化をみないという特徴をもつものと思われる。

所属時期は陶磁器類、土師器皿類との共伴関係から、それらとの時期と合致するものと思われるが、越前地方、丹後地方などの周辺地域での当該期の鍋類と比較して器形、製作技法ともに大きな共通性は抽出できない(伊野 1996、富山 1997、斎藤 1997)。越前地方と同様な形態変化をたどると思われる土師器皿類と比べても、鍋類は特に在地色が強いものと思われる。

【参考・引用文献】

伊野正富 1996 「中世土器の編年(中)」「京都府埋蔵文化財情報第50号」財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

富山正明 1997 「第1章第3節 越前における13～16世紀の土師器編年」

『中・近世の北陸 考古学が語る社会史』北陸中世土器研究会

斎藤俊夫 1997 「第1部 中世食器の地域性 6 儿内周辺」

『国立歴史民俗博物館研究報告第71集 中世食文化の基礎的研究』国立歴史民俗博物館

註1 註1 陶磁器類の年代記は、福井県埋蔵文化財調査センター 河村健史・中川圭三氏に御教示を得た。

第4節 遺跡の性格

第1項 I期（古墳時代後期）

該期の遺構は、3基の古墳、3基の小穴である。

検出墳の前後関係をみると、S Z 3 周溝一括資料を初葬に伴うものと捉えて、S Z 1 が6世紀後半代、S Z 2 がS Z 1 に後出して6世紀末に近い時期、S Z 3 がS Z 2 とほぼ同時期に造営されたものと考えられる。

地形的には、S Z 1、S Z 2 が調査区内の最高位に、S Z 3 が同じく最低位に築造されている。調査区外の埋没墳の存在を含めても古墳群形成に微地形の微高地選択が行われていないものと思われる。また、S Z 3 の墳丘推定規模が約14mであり、墳丘規模が古墳群内で小さいものではないと思われることから、古墳群内での被葬者数が古墳立地の条件に微地形選択を働きかけているとは考え難い。獅子塚古墳を盟主墳とした興道寺古墳群の被葬者層が、微地形選択を行う余地を与えない程の爆発的な古墳造営を行ったものと想定される。

興道寺古墳群の特性を挙げると、耳川流域において唯一、支尾根・山裾などを選地せず、地形的に好条件な河岸段丘面に古墳群を造営していることと、古墳群が円筒埴輪を有する点では若狭地方では稀な後期群集墳であることである。大陸色豊かな副葬品をもつ獅子塚古墳、須恵器生産窯の興道寺窯、また製塩遺跡である松原遺跡を控えた周辺の歴史的環境を考慮すると、興道寺古墳群の被葬者層は、古墳群の東西に見られる河岸段丘下の後背湿地帯における農耕、あるいは須恵器生産や製塩活動を統括的に管理した、技術者集団の長的立場にあり、獅子塚古墳被葬者は首長とする首長層集団であったことが想定される⁴¹。その居住域は古墳群東側から北側に展開する興道寺遺跡、藤ノ木遺跡などが求められよう。

入江氏によつて紹介されている資料はT K47型式期まで遡ることから（入江 1987）、5世紀末の段階には興道寺窯開窯を契機として、既に古墳群形成の素地が整われ、獅子塚古墳の段階である6世紀初頭から6世紀末までの1世紀の期間に渡って、継々と古墳が造営されたものと思われる。

耳川左岸域にみるこの勢力は、白鳳期以降の興道寺建立、河岸段丘上の生活域の拡大といった素地となっていくものの、現在のところ、興道寺窯開窯の時期から興道寺建立までの時期、河岸段丘面上での人間活動の痕跡が極端に乏しくなる。今後の調査の進展を待つて検討したい。

なお、美浜町東部域の佐田丘陵には、興道寺古墳群とほぼ同時期と思われる佐田古墳群帝釈寺支群が立地する。美浜町教育委員会の分布調査において、地表面に顯在するだけで8基の後期古墳が確認されており、平成4年の試掘調査では4号墳から人物埴輪を含んだ大量の形象埴輪、円筒埴輪が出土しているなど（美浜町教育委員会 1993）、内容的に興道寺古墳群に決して劣るものではない。ただ、佐田古墳群帝釈寺支群を含めて周辺での既往の調査が乏しいため、その性格付け、あるいは興道寺古墳群との比較検討は今後の調査の進展を待つべき⁴²。

I期以前の状況については、今回の調査においては遺構、遺物として明確にその痕跡を示すものは確認されていないが、既往の調査によって弥生時代後期には当該地への人間活動の定着をみることができる。

第2項 II期（鎌倉時代）

該期の遺構は、掘立柱建物跡2棟、棚列1基、土壙2基、小穴48基である。これらの遺構群は、遺構内出土遺物の年代観・埋土の検討などにより、そのほとんどが13世紀後半～14世紀前半に伴うものと考えられる。

各遺構は調査区内の微高地を中心に分布し、河岸段丘縁辺部においてはその分布が疎になることから、明らかに意図的な土地規制が働いている。しかしながら、遺構の分布密度はさほど高いものではなく、今回検出された掘立柱建物跡も大規模なものでないことから大規模な集落が存在したとは考え難い。

周辺地では、微地形の低位部分においても律令期の堅穴建物跡などの遺構が検出されているが、河岸段丘面の低位部分ではその上層に原則的に黒褐色粘質土が律令期の遺構を覆うように堆積していることから、中世の段階に大規模な土地改変があったことが想定される。

美浜町教育委員会による分布調査では、平安時代までは河岸段丘上には全てを網羅するように遺物散布がみられたにも関わらず、鎌倉時代以降の遺物散布が疎になる。何らかの要因により、当該地の微地形の低地部分が農耕地となったため、居住域が限定された可能性が高い。

II期以降の状況は今回の調査において遺構・遺物が明確には検出されてはいないため不明であるが、当該地では江戸時代の越前焼、唐津焼、伊万里焼などの生活雑器類が表採できる。

【参考・引用文献】

- 吉川 登 1980 「付録 第3章 福井県嶺南地方の埴輪について」
『福井県埋蔵文化財調査報告第4集 六呂瀬山古墳群 国道364号線建設に伴う発掘調査報告書』 福井県教育委員会
入江文敏 1987 「V.付1 若狭地方出土の古式須恵器の後封」『上中町文化財調査報告第5集 三生野遺跡』 上中町教育委員会
美浜町教育委員会 1993 「帝釈寺古墳群調査概要」「若狭歴史民俗資料館」

註1 古墳群被葬者の性格を若狭地方首長と同族的な関係にあり、耳川流域に基本的な統治権をもった首長層と位置付ける意見がある（吉川 1980）。

註2 佐田古墳群帝釈寺文群出土の円筒埴輪と、獅子塚古墳あるいは興道寺廐跡出土のそれとの整成技法差から工人集団の差異、あるいは政治集団の差異を意味し、佐田古墳群形成の背景を地勢的な観点から軍事的に重要視されたからとする意見がある（吉川 1980）。

第6章 分析

第1節 興道寺窯跡、及びその周辺の古墳出土須恵器の蛍光X線分析

大谷女子大学文学部文化財学科 三辻 利一

第1項 はじめに

火成岩中には多くの元素が含有されていることは周知の事実である。火成岩が風化して生成した粘土、その粘土を素材として製作された土器にも多くの元素が含まれている。従って、火成岩類、粘土、土器の蛍光X線スペクトルには共通する元素が観測される。むしろ、異なる元素はほとんどないといってよい。ただ、蛍光X線強度は産出地によって異なる。蛍光X線強度は通常、元素の含有量に比例するので、このことは特定の元素の含有量はこれらの産出地によって異なることになる。もし、元素分析によって、その産出地を知ろうとすると、まず、地域の特性を示す元素はどれかを前もって、探しでおかなければならない。

この元素の探索に筆者は窯跡出土須恵器を活用した。須恵器は5世紀代に朝鮮半島から伝えられた高度の製作技法を使って作った、堅い焼き物である。須恵器窯跡は大量の須恵器破片を含んで、各地で見つけられている。これらの破片を大量に分析すれば、1基の窯跡出土須恵器の分析データーはどの程度にまとまるのかが分かる。さらに、各地の窯跡出土須恵器の分析データーを比較すれば、どの元素が地域の特性を示すかが分かる。こうした考え方から、20年以上の年月をかけて、全国各地の窯跡出土須恵器を分析した結果、K、Ca、Rb、Srの4元素が有効に地域の特性を示す元素であることが分かった。

筆者はこの研究を始めた当初、エネルギー分散型の装置を使用した。この装置では測定しながら、蛍光X線スペクトルを観測することができるので、各地の須恵器の蛍光X線スペクトルの比較から、4元素を容易に選び出すことができた。その後は、各元素の正味の蛍光X線強度を測定し、その結果をK-Ca、Rb-Srの両分布図上にプロットして、窯跡出土須恵器の地域差を表示することにした。古墳出土須恵器の産地を推定するためには、これらの図上で窯跡に対応させればよいのであるが、現在、より正確な方法として2群間判別分析法が適用されている。この方法の根底にある考え方は元素の指紋合わせの考え方である。そのため、現在、地域の特性を表す元素を指紋元素と呼んでいる。この方法を適用して、興道寺窯跡出土須恵器の元素の指紋を明らかにするとともに、周辺の古墳出土須恵器が興道寺窯の製品であるのか、それとも、外部地域からの搬入品であるのかを検討した結果について報告する。

第2項 分析方法

須恵器試料小片はまず、タングステンカーバイド製の刃をもつ小型研磨機で表面を研磨し、タングステンカーバイド製乳鉢（高度9.5）の中で100メッシュ以下に粉碎した。粉末試料は塩化ビニール製リングを枠にして、高圧をかけてプレスし、内径20mm、厚さ5mmの錠剤試料を作成した。粉碎することの意味は試料を均質化することと、一定形状の測定試料を作成するためである。蛍光X線分析は相対分析であり、標準試料を含めて、測定試料は一定形状をもつことが必要である。

作成された錠剤試料は試料ホウルダーに固定され、その試料ホウルダーは自動試料交換機に並べられた。蛍光X線分析には理学電機製の波長分散型の装置が使用された。分光結晶はNaに対してはTAP、K・C

aに対してもG e、F e・R b・S rに対してはL i Fが使用された。また、N a、K、C aの蛍光X線の測定には比例計数管を、F e、R b、S rの蛍光X線の測定にはシンチレーションカウンターを使用した。正味の蛍光X線強度を同時に測定した岩石標準試料、J G-1の対応する元素の蛍光X線強度で割って標準化値として表示した。もちろん、いくつかの岩石標準試料を使って、J G-1による標準化値と地質調査所から報告されている各元素の分析値との間に直線性があることが前もって、確認されている。

第3項 分析結果

今回分析した資料の分析データを第10表にまとめてある。全分析値はJ G-1による標準化値で表示されている。このデーターのうち、K、C a、R b、S rの分析値を使って判別分析にかけ、これらの試料のうちどれが地元、興道寺窯の須恵器胎土に対応するのか、また、対応しないものは果たして、古墳時代最大の須恵器生産地である大阪府堺市、陶邑窯群の須恵器胎土に対応するかどうかについて検討することにした。

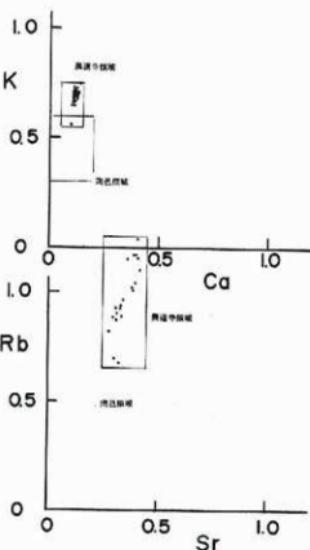
番号	資料	試料番号	出土遺跡等	報告書番号	測定年度	K	C a	F e	R b	S r	N a	B2(興道寺)	B2(陶邑)	B2(上中)	推定地
1	須恵器	13-2116	興道寺古墳群 S Z 1 棚塗	33	12年度	0.734	0.119	3.56	0.956	0.325	0.384	3.8	36.4	39.4	興道寺
2	須恵器	13-2117	興道寺古墳群 S Z 1 棚塗	34	12年度	0.828	0.111	2.01	0.699	0.318	0.296	5.7	13.2	77.1	興道寺
3	須恵器	13-2118	興道寺古墳群 S Z 1 棚塗	35	12年度	0.467	0.093	1.81	0.814	0.308	0.174	46.0	0.36	30.1	陶邑
4	須恵器	13-2119	興道寺古墳群 S Z 1 棚塗	37	12年度	0.729	0.118	1.50	1.28	0.419	0.441	3.6	53.0	49.3	興道寺
5	須恵器	13-2120	興道寺古墳群 S Z 1 棚塗	38	12年度	0.403	0.055	1.54	0.820	0.297	0.188	80.2	2.1	27.6	陶邑
6	須恵器	13-2121	興道寺古墳群 S Z 1 棚塗	36	12年度	0.303	0.060	3.11	0.313	0.239	0.153	118.0	9.8	47.1	陶邑
7	須恵器	13-2122	興道寺古墳群 S Z 1 棚塗	40	12年度	0.428	0.073	2.41	0.618	0.223	0.181	47.8	1.6	10.3	陶邑
8	須恵器	13-2123	興道寺古墳群 S Z 1 棚塗	39	12年度	0.594	0.096	1.96	0.911	0.356	0.206	11.6	13.9	30.9	興道寺?
9	須恵器	13-2124	興道寺古墳群 S Z 1 棚塗	13	12年度	0.486	0.044	3.02	0.549	0.170	0.093	80.0	7.7	17.0	陶邑
10	須恵器	13-2125	興道寺古墳群 S Z 1 棚塗	15	12年度	0.360	0.035	1.21	0.584	0.158	0.077	112.0	3.5	16.1	陶邑
11	須恵器	13-2126	興道寺古墳群 S Z 1 棚塗	16	12年度	0.347	0.083	2.18	0.462	0.262	0.108	105.0	3.5	32.1	陶邑
12	須恵器	13-2127	興道寺古墳群 S D 1 墓上	55	10年度	0.710	0.117	1.31	1.26	0.427	0.389	3.0	53.8	57.2	興道寺
13	須恵器	13-2128	興道寺古墳群 S D 1 墓上	56	10年度	0.572	0.066	2.91	0.615	0.237	0.158	22.1	5.3	10.6	陶邑
14	須恵器	13-2129	興道寺古墳群 S X 2 墓上	312	9年度	0.523	0.077	1.29	0.802	0.335	0.144	36.2	7.7	28.5	陶邑
15	須恵器	13-2130	興道寺古墳群 S X 2 墓上	319	9年度	0.406	0.052	1.71	0.707	0.263	0.044	80.6	7.0	33.1	陶邑
16	須恵器	13-2131	興道寺古墳群 S X 2 墓上	320	9年度	0.777	0.055	2.03	0.427	0.216	0.050	69.0	2.8	16.7	陶邑
17	須恵器	13-2132	興道寺古墳群 S X 2 墓上	317	9年度	0.415	0.056	1.44	0.682	0.199	0.053	104.0	5.2	16.5	陶邑
18	須恵器	13-2133	興道寺古墳群 S X 2 墓上	324	9年度	0.459	0.053	1.92	0.577	0.221	0.069	82.9	2.3	9.7	陶邑
19	須恵器	13-2134	興道寺古墳群 S X 2 墓上	307	9年度	0.327	0.041	1.17	0.497	0.210	0.071	111.0	5.0	24.1	興道寺
20	平瓦	13-2135	興道寺古墳群 S X 2 墓上	459	9年度	0.689	0.110	1.87	0.884	0.309	0.241	1.4	26.3	38.1	興道寺?
21	平瓦	13-2136	興道寺古墳群 S X 2 墓上	458	9年度	0.760	0.109	1.65	1.02	0.385	0.329	20.4	37.9	66.9	興道寺?

第10表 分析資料一覧表

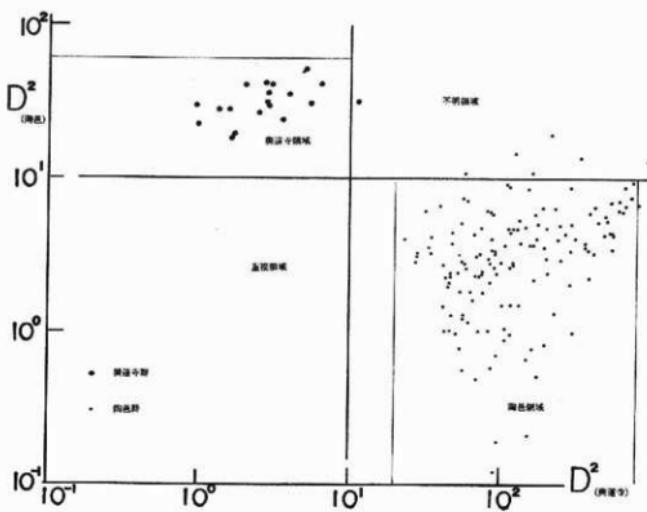
はじめに、地元、興道寺窯の須恵器の化学的な指紋を示すために、興道寺窯出土須恵器のK-C a、R b-S rの両分布図を第46図に示す。比較のための興道寺領域を示してある。この領域はほとんどの試料を包含するようにして、描きやすいように長方形で描かれている。従って、この図で示される領域は定性的であるが、それでも、他の領域と比較する上には便利である。念のため、陶邑窯群の須恵器の分布領域も示してある。陶邑窯の須恵器に比べて、K、R b量が興道寺窯の須恵器には多いことが分かる。この図からも、陶邑

群と興道寺群の相互識別の可能性は十分あることが予想できる。

そこで、両群間の2群間判別分析を行うことにした。第47図にはその結果を示す。両軸にとった D^2 (X)は(X)群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値であり、両群の試料のK、Ca、Rb、Srの分析値を使って計算した。マハラノビスの汎距離とは統計学上の距離であるが、我々が通常使うユークリッドの距離と同じ感覚で使用すればよい。つまり、D値が小さければ、距離が近いということであり、大きければ、遠いということである。距離を計るときの原点が試料集団の重心であるから、1次元の軸上で原点の右側を正、左側を負とするのが普通である。しかし、重心から同じ距離にあるものは正負の符号にかかわらず、等距離にあると判断するわけであるから、計算処理しやすいように二乗して負符号を消去して使用するのが便利である。



第46図 興道寺出土須恵器の両分布図



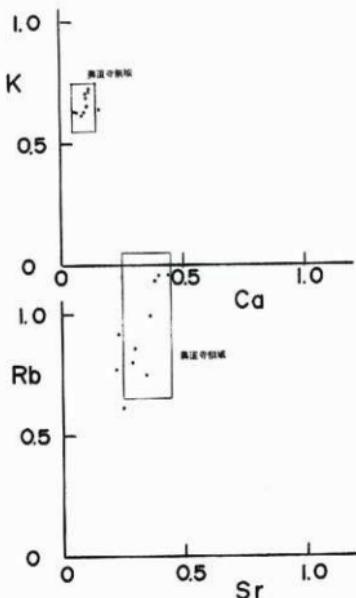
第47図 高邑群と興道寺群の相互識別

そのため、第47図でも、両軸には D^2 値をとってある。第47図をみれば、両群は完全に分離していることがわかるが、このままでは各母集団への帰属条件は不明である。そこで、帰属条件を求めるため、5%の危険率をかけたホテリングの T^2 検定にかけることにした。ホテリングの T^2 式は使用因子数（この場合は4である）、母集団の試料数、 D^2 値の3変数からなる。このうち、使用因子はK、Ca、Rb、Srの4元素であるから4となる。母集団の試料数はそれぞれ、陶邑群、興道寺群の分析試料数であり、既知である。従って、Tは D^2 の関数ということになる。Tは D^2 に関してF分布するので、5%危険率のF分布表より、この検定に合格する D^2 値を求めることができる。

筆者は通常、試料数が50-100程度の母集団を使っているので、この検定に合格するための D^2 値は $D^2(X) < 10$ である。第47図で $D^2(X) = 10$ のところに線が引いてあるのはそのためである。実際、 D^2 （興道寺）<10の領域に興道寺窯跡の須恵器のほとんどが分布していることが分かる。同様に、 D^2 （陶邑）<10の領域に陶邑群の試料のほとんどが分布していることも分かる。こうして、 $D^2(X) < 10$ が95%以上の(X)母集団の試料が分布する領域であり、供給先の遺跡出土須恵器の産地推定において、(X)母集団へ帰属するための必要条件となる。他方、この必要条件を満たす全領域に母集団の試料が分布するかといえば、そうでないことは第47図をみれば、よく分かる。この領域の一部の領域に母集団の試料は分布することは第47図から明らかである。

ここで、分布領域を絞るために、もう一つの条件を導入する必要がある。それは相手群の重心からの距離で決められる。第47図をみると、興道寺群については $10 < D^2(\text{陶邑}) < 60$ であり、陶邑群については $20 < D^2(\text{興道寺}) < 800$ である。この条件は先に求めた必要条件を補足する条件という意味で十分条件ともいえるものである。かくして、この判別図上では興道寺群の領域は $D^2(\text{興道寺}) < 10$ 、 $D^2(\text{陶邑}) = 10-60$ となる。他方、陶邑領域は $D^2(\text{陶邑}) < 10$ 、 $D^2(\text{興道寺}) = 20-800$ となる。両群の95%以上の試料がそれぞれ、この領域に分布することが第47図から確かめられる。

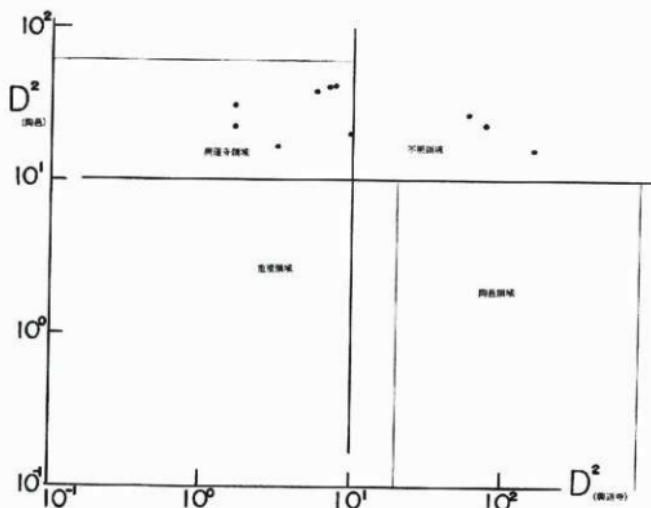
興道寺窯は6世紀初頭に開窯されたと想定されている。この時期には脱られた地域で少數の須恵器窯が見つけられているが、なんといっても、この時期に最も多くの須恵器を生産したのは和泉陶邑である。従って、興道寺窯周辺の古墳出土須恵器の産地を求めるうとすると、興道寺群と陶邑群の2群間判別分析は必要である。第47図を使って産地を推定することになる。もし、地元産の須恵器があれば当然、興道寺窯に分布するはずであるし、陶邑からの搬入品があれば、陶邑窯に分布するはずである。そして、そのいずれの群にも帰属しない須恵器があれば、不明領域に分布するはずである。もし朝鮮半島



第48図 獅子塚古墳出土須恵器の両分布図

からの搬入品を見つけようとすると、伽耶群と興道寺群の2群間判別図を作成しておかなければならぬ。

つぎに、興道寺窯跡周辺の古墳出土須恵器の分析結果を示そう。第48図に獅子塚古墳出土須恵器の両分布図を示す。両図には興道寺領域と陶邑領域が比較のために示されている。多くの試料は両分布図で興道寺領域に対応することが分かる。この図から獅子塚古墳の須恵器は地元、興道寺窯の製品である可能性が大きいことを示す。これらの須恵器が興道寺窯産であることを一層明確にするために、興道寺群と陶邑群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値を4元素の分析値を使って計算し、第47図の判別図上にプロットしたのが第49図である。No 1, 8, 10の3点の試料を除いて他は全て、興道寺領域に分布することが分かる。これらは興道寺窯産の須恵器と推定される。No 1, 8, 10の3点の試料は興道寺群に帰属するための必要、十分条件を満足しなかったので产地不明としたが、陶邑群には帰属しないことは第49図から明白である。K量が多いところから、興道寺窯の製品である可能性は残されている。



第49図 獅子塚古墳出土須恵器の产地推定

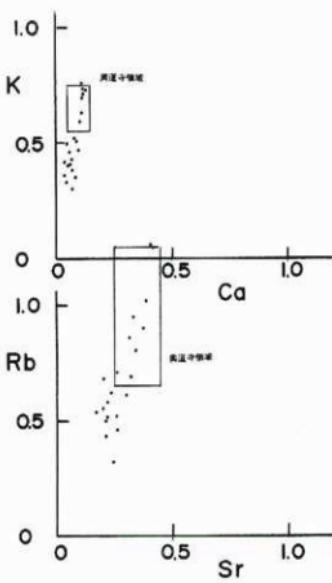
さて、今回は興道寺古墳群、興道寺遺跡出土須恵器を分析した。その結果について説明する。まず、両分布図を第50図に示す。興道寺領域と陶邑領域を参考のために示してある。そうすると、試料は興道寺領域に対応するものと、陶邑領域に対応するものとの二つのグループにおおよそ分かれることが分かる。そこで、今回の分析試料を興道寺群、陶邑群の2群間判別分析図上にプロットしてみることにした。

その結果は第51図に示されている。No 1, 2, 4, 12, 20の5点の試料は興道寺群への帰属条件を満足する。不明領域に分布するNo 8, 21の2点の試料は第10表より、いずれもK, Rb量が多い試料である。興道寺窯への帰属条件は満足しなかったものの、興道寺窯周辺で製作された製品である。ここでは、興道寺産?とした。他の試料は全て、陶邑群への帰属条件を満足し、陶邑産と推定された。产地推定の結果は第10表の

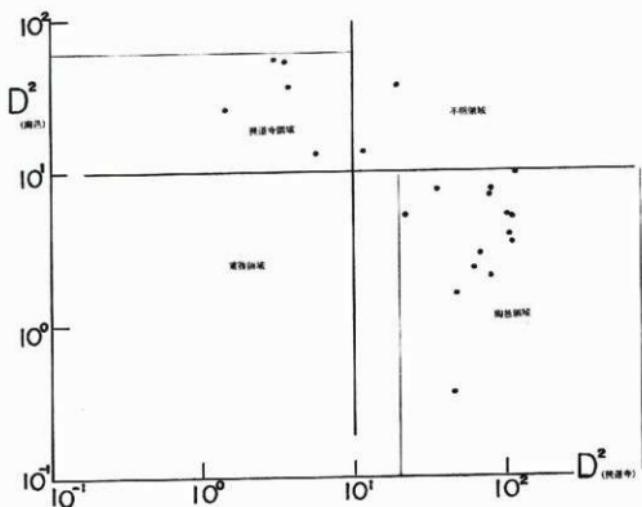
最右欄に示してある。

なお、興道寺窯産と推定された須恵器の中に、Fe量が多いものと、少ないものが混ざっている。興道寺窯出土須恵器の中にも、両者が混ざっていることが確認されている。このことはFeは化学的指紋元素として使い難いことを示している。外見上、灰褐色の須恵器と白色の須恵器が混ざっているのである。従って、色調から、興道寺窯産かどうかを判断することは困難であることを示している。今一度、胎土観察をする必要がある。この例に限らず、元素分析で产地推定された結果は今一度、胎土観察によって再確認して欲しいというのが筆者の考え方である。そうすることによって、产地推定の結果を自然科学者と考古学者は共有することができるからである。

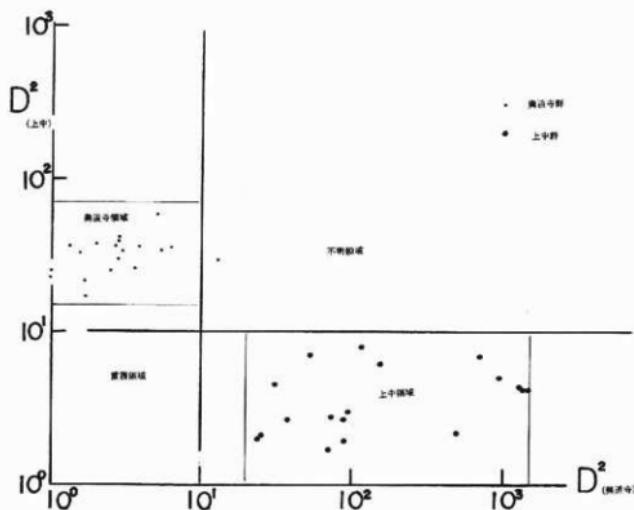
古墳時代後期に属する興道寺古墳群、興道寺遺跡の須恵器に興道寺窯産と陶邑窯群産の須恵器が混ざることは理解できる。ところが、8世紀代に属する興道寺遺跡出土須恵器の中に、多数の陶邑窯産の須恵器が含まれているということはどう理解すべきか。



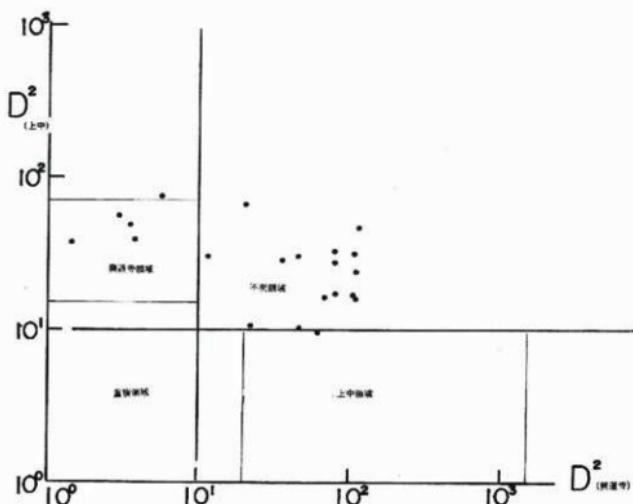
第50図 分析試料の両指紋図



第51図 分析試料の产地推定(1)



第52図 興道寺群と上中群の相互識別



第53図 分析試料の産地推定(2)

従って、筆者は上中群への帰属の可能性について検討した。第52図には興道寺群と上中群の2群間判別図を示す。両者はほぼ完全に分離することが分かる。この判別図上に今回分析した試料をプロットしたのが第

53図である。5点の試料は興道寺領域に分布し、No 8, 21の2点は興道寺領域を少しずれて分布した。上中領域に分布する試料はほとんどなく、第51図で陶邑領域に分布した試料は全て、不明領域に分布した。従って、上中群の須恵器胎土に対応するものは今回分析した試料の中には含まれていないということである。果たして、8世紀代に入ても、興道寺遺跡へ陶邑から須恵器が供給されたのであろうか。このことも今後の課題となる。

第4項 まとめ

以上の結果、獅子塚古墳へは陶邑産の須恵器が供給されず、興道寺窯から須恵器が供給されたことが元素分析のデーターから示された。興道寺窯開窯期のMT15型式期とほぼ同時期の獅子塚古墳には興道寺窯からののみの搬入といった一元的供給形態であったことを示している。獅子塚古墳へ須恵器を供給するために興道寺窯が開窯されたとする考古学研究者の推察が確認されたことになる。

一方、獅子塚古墳を盟主墳とする興道寺古墳群からは陶邑窯群、興道寺窯、双方から須恵器が供給されたことが判明した。古墳時代後期には、興道寺古墳群、興道寺遺跡ともに陶邑窯跡群、興道寺窯の双方から須恵器が供給され、二元的な供給形態が存在したことを示している。第5章第2節第2項での分類のA類が陶邑窯跡群に、B群が興道寺窯にそれぞれ产地を対応できよう。

今後の興味ある問題は、陶邑窯跡群に产地が求められる須恵器群が直接興道寺古墳群に搬入されたものかといった供給の方法、ルート、あるいは興道寺窯産須恵器の時期毎の供給範囲を把握することである。

また、律令期の興道寺遺跡には須恵器類は陶邑窯跡群から、瓦類は在地の興道寺から供給されたことが元素分析のデーターから示された。これまで、興道寺遺跡近辺での律令期の瓦陶兼業窯の存在が推定されてきたが、胎土分析の結果からそのことを明らかにできない。律令期の興道寺遺跡からは精製された粘土を用い、精巧なヘラ磨き・暗文調整が施されたいわゆる畿内産土師器・皿類が一定量出土しており、これらと同一の供給ルートに乗って須恵器群が興道寺遺跡に搬入された可能性がある。律令期における若狭地域最大の須恵器窯群である末野窯群からの須恵器搬入は考えられず、陶邑窯群から須恵器類が供給されたことが事実なのか、陶邑群と同様の化学属性を持つ地域の須恵器窯から供給されたのかは今後の課題である。従って、古墳時代後期から一貫して陶邑窯からの須恵器供給が継続した可能性があるが、現段階では資料の蓄積を待つて検討したい。

今回の分析結果はこのように多くの問題を提供することになった。胎土分析は今後、これらの問題を解決する上でおおいに役立つはずである。

[参考・引用文献]

- 三辻利一・森川昌和 1981 「元素分析による古代土器の产地推定の実例(3) - 獅子塚古墳(福井県)出土須恵器-」
〔奈良教育大学紀要第30巻第2号〕 奈良教育大学
美浜町教育委員会 1999 「興道寺遺跡」
美浜町教育委員会 1999 「平成10年度興道寺窯範囲確認試掘調査報告書」
三辻利一 2001 「古代土器の蛍光X線分析によって何が分かるか?」『月刊考古学ジャーナル第471号』 ニュー・サイエンス社
中村 浩 2001 「和泉陶邑窯の胎土分析について」『月刊考古学ジャーナル第471号』 ニュー・サイエンス社

第2節 耳環のEPMA分析結果

財団法人若狭湾エネルギー研究センター 研究部 丸山忠司、長友仁郎

第1項 測定方法

美浜町教育委員会が発掘調査を行った興道寺古墳群から出土した耳環の元素分析を、電子プローブマイクロアナライザ（EPMA）を用いて行った。測定方法は以下のとおりである。

①測定装置：WDS（JXA-8800）

②EPMA測定条件

1) 測定モード：WDS

2) 加速電圧：20kV

3) プローブ電流：約1.0E-07Aおよび5.0E-07A

4) 分光結晶：CH-1：LDE1H (88.525~240.125nm)

CH-2：TAP (61.932~257.032nm)

CH-3：PETH (88.078~239.378nm)

CH-4：LIF (61.476~255.276nm)

CH-5：LIFH (96.962~238.512nm)

5) 観察倍率：1,000倍～5,000倍

③試料条件

試料表面に特徴のある点を選び、計測点とした。

測定試料は直接導電性のカーボンテープで試料台に貼り付け、測定用の試料とした。

第2項 定性分析結果

測定点として次の3点を選び、その部分での元素分析を行った。測定点の各点を第54図に示す。

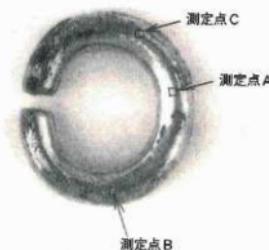
測定点A：金色に輝き、表面のきれいな部分

測定点B：表面が腐食し、穴状になった部分

測定点C：腐食したところとの境界部分

1) 測定点(A)の測定結果

測定個所のSEM写真を写真6に示す。また、元素分析結果の一覧を第11表に示す²¹。写真6に示すように、SEM観察結果によれば表面には細かい傷が確認される。検出された元素はC、O、Cu、Ag、Au、およびHgであった。この部分は主に金(Au)と銀(Ag)から構成され、さらに微量の銅(Cu)



第54図 測定点位置図



写真6 測定点(A)のSEM写真 (倍率1,000倍)

と水銀 (Hg) が含まれている。

検出元素	チャンネル	Crystal	Peak Pos.	Count (cps)	X-ray	Wt%	Atom%
C	1	LDE1H	210.875	875	K α	2.30	20.68
O	1	LDE1H	111.025	6423	K α	2.12	14.34
Cu	5	L1FH	107.312	4735	K α	4.27	7.26
Ag	3	PETH	133.028	8873	L α	16.85	16.90
Au	3	PETH	187.028	120323	M α	66.82	36.69
Hg	3	PETH	173.978	9811	M β	7.64	4.12

第11表 測定点(A)の測定結果

2) 測定点(B)の測定結果

測定個所のSEM写真を写真7に示す。元素分析結果の一覧を第12表に示す。分析の結果、検出された元素はO、Al、Si、P、S、Ca、Fe、およびCuであった。この部分では銅(Cu)と酸素(O)が大量に含まれることから、銅の酸化物が主体を占めている。アルミニウム(Al)とケイ素(Si)は、酸化物の形で土壤中に多量に含まれることから、土壤の付着によるものと考えられる。リン(P)、イオウ(S)、カルシウム(Ca)、鉄(Fe)の元素も微量検出されるが、それらの元素についても土壤付着によるものではないかと推測される。

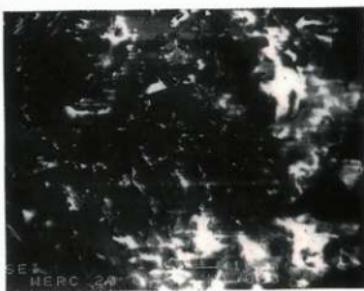


写真7 測定点(B)のSEM写真(倍率1,000倍)

検出元素	チャンネル	Crystal	Peak Pos.	Count (cps)	X-ray	Wt%	Atom%
O	1	LDE1H	111.225	49209	K α	26.76	46.59
Al	2	TAP	90.532	89008	K α	21.38	22.07
Si	2	TAP	77.282	59497	K α	13.23	13.12
P	3	PETH	197.128	3807	K α	1.58	1.42
S	3	PETH	171.978	3663	K α	1.10	0.95
Ca	3	PETH	107.428	2178	K α	0.23	0.16
Fe	5	L1FH	134.762	1628	K α	0.43	0.22
Cu	5	L1FH	107.212	129320	K α	35.30	15.47

第12表 測定点(B)の測定結果

3) 測定点(C)の測定結果

測定個所のSEM写真を写真8に示す。また、元素分析結果の一覧を第13表に示す。分析の結果、検出された元素はC、O、Al、Si、S、Fe、Cu、Ag、Au、およびHgであった。この部分はきれいな表面と腐食した部分を含むことから、両方に存在する元素が検出された。すなわち、金(Au)、銀(Ag)および水銀(Hg)は表面から検出されたものと推測される。一方、アルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、イオウ(S)、鉄(Fe)は腐食部分から検出されたものと推測される。銅については、両方から検出されたものと思われる。

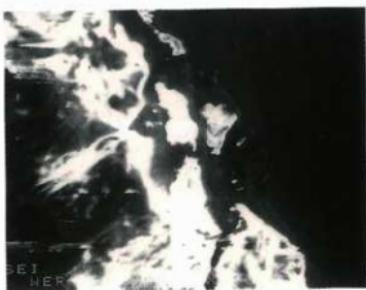


写真8 測定点(C)のSEM写真(倍率1,000倍)

検出元素	チャンネル	Crystal	Peak Pos.	Count (cps)	X-ray	Wt%	Atom%
C	1	LDE1H	209.775	5800	K α	3.54	12.95
O	1	LDE1H	111.225	39755	K α	18.29	50.24
Al	2	TAP	90.532	4600	K α	0.76	1.24
Si	2	TAP	77.282	3458	K α	0.42	0.66
S	3	PETH	171.978	1362	K α	0.27	0.37
Fe	5	LIFH	134.762	2344	K α	0.40	0.32
Cu	5	LIFH	107.362	211638	K α	33.70	23.31
Ag	3	PETH	133.028	26816	L α	7.70	3.14
Au	3	PETH	186.978	29988	M α	31.53	7.03
Hg	3	PETH	173.978	2819	M β	3.38	0.74

第13表 測定点(C)の測定結果

4) 測定点(A)の詳細分析結果

測定面積を狭め(測定倍率を5,000倍に上げる)、金色に輝く表面部分10点をランダムに選び、測定を行った。測定点の1点の定性分析チャートを第55図に示す。測定点10点の平均値の値を第14表に示す。

この時の測定条件は、前記測定条件のうち次の条件を変更して測定を行った。

表面の構成は、金(Au)約64wt%、銀(Ag)約19wt%、銅(Cu)約5wt%、水銀(Hg)約5wt%からなっている。

検出元素	チャンネル	Crystal	Peak Pos.	Count (cps)	X-ray	Wt%	Atom%
C	1	LDE1H	210.646	323	K α	3.92	25.78
O	1	LDE1H	111.025	6423	K α	3.13	17.78
Cu	5	LIFH	107.312	47355	K α	4.87	7.00
Ag	3	PETH	133.028	58739	L α	19.28	16.76
Au	3	PETH	187.028	120323	M α	64.04	30.50
Hg	3	PETH	173.978	9811	M β	4.75	2.17

第14表 測定点(A)詳細分析の測定結果

第3項 面分析結果

境界部分を中心にAu、Ag、Cu、Hg、O、AlおよびSiの各元素について面分析を行った。ただし、この時の測定条件は次のとおりとした。

- ① 加速電圧: 20kV ② プローブ電流: 約3.0E-07A ③ スキャン方法: ステージスキャナ
- ④ スキャンタイプ: 片方向 ⑤ ピクセル: 200 ⑥ ピクセルサイズ: 5 μm ⑦ 測定時間: 30msec
- ⑧ スキャンモード: SPT
- ⑨ 各元素の使用結晶体と波長

- 【Au】 1) X線名: L α 2) チャンネル: 4 3) 結晶タイプ: LIF
- 【Ag】 1) X線名: L α 2) チャンネル: 3 3) 結晶タイプ: PETH
- 【Cu】 1) X線名: K α 2) チャンネル: 5 3) 結晶タイプ: LIFH
- 【Hg】 1) X線名: M β 2) チャンネル: 3 3) 結晶タイプ: PETH
- 【O】 1) X線名: K α 2) チャンネル: 1 3) 結晶タイプ: LDE1H
- 【Al】 1) X線名: K α 2) チャンネル: 2 3) 結晶タイプ: TAP
- 【Si】 1) X線名: K α 2) チャンネル: 2 3) 結晶タイプ: TAP

1) 測定点(a)の結果

腐食部が表面に隆起した状態の部分である。面分析の出力結果を第56図に示す。

測定点(A)の表面部分には多量のHgがAuと同じ領域に分布していることが示されている。またAgもAuとはほぼ同じ領域に分布していることがわかる。腐食し、表層がめくれた部分にはCuが多く分布して

いる。さらにこの部分はOも同様の分布をしていることから酸化銅の形で存在しているか、もしくはA IとS iも同様に分布していることから、腐食した銅に土壤が付着していたものと思われる。表層の小さな傷の部分からAuの濃度が低下し、一方Agの濃度が増大しているのがみられることが、表面のAuを多く含んだ層の下にAgに富んだ層が存在することがわかる。

2) 測定点 (b) の結果

表層に腐食し、陥没した穴を含む部分である。面分析の出力結果を第57図に示す。

表層部分はAuとHgを多く含んだ構成となっている。陥没した所はCuを多く含む構成となっているとともに、AIとSiがみられることが、土壤の付着が考えられる。測定点(a)の場合と同様に、表面のわずかな傷の部分でAuの濃度が低下し、Agに富んだ部分がみられる。

3) 測定点 (c) の結果

表層の傷の部分である。面分析の出力結果を第58図に示す。

表層部分はAuとHgを多く含んだ構成となっている。AuとHgはほぼ同じ部分に分布している。線状のAu濃度が低下している領域からAgの多く含んだ部分が現れていることが確認される。さらに深いところと腐食の進んでいる部分は、CuとOが多く含んだ部分となっている。この部分は酸化銅の存在が推定される。

4) 測定点 (d) の結果

測定点(C)の表層のめくれた部分をさらに拡大して面分析を行った。面分析の出力結果を第59図に示す。

表層部分はAuとHgを多く含んだ構成となっている。AuとHgはほぼ同じ部分に分布している。表層のめくれた部分と、傷の深い部分はCuを多く含んでいる。傷の浅い部分はAgを多く含んでいる。

第4項 まとめ

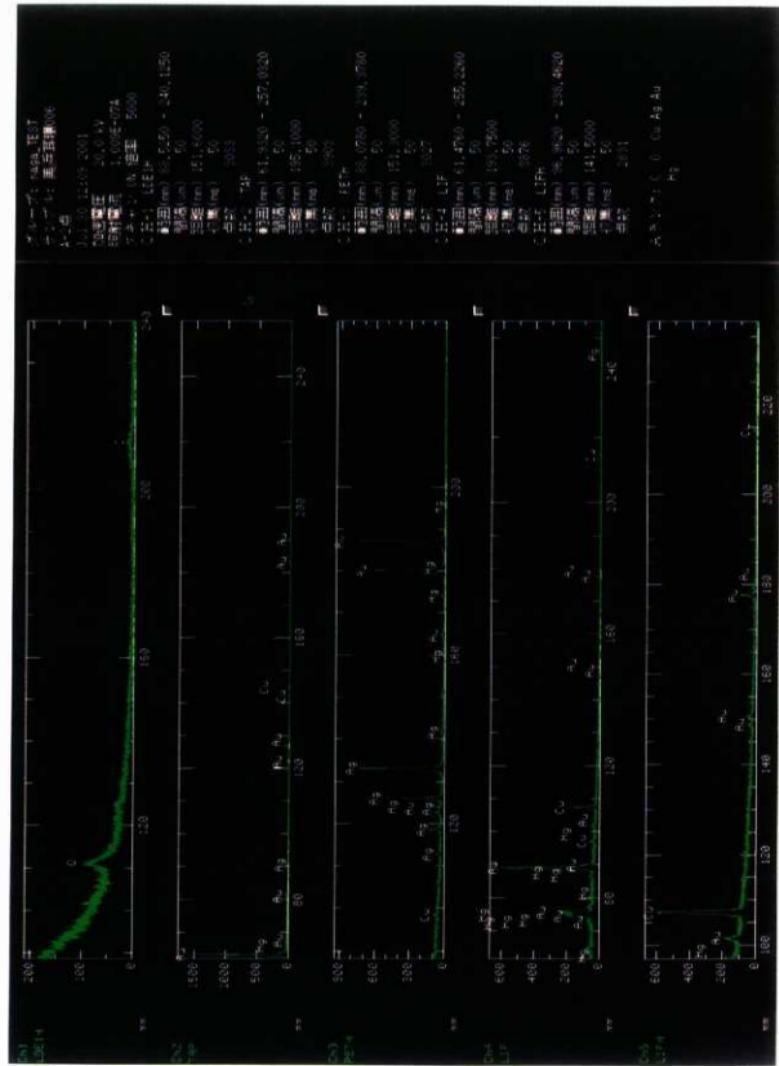
金色に輝く表面には細かい傷が確認された。これは、傷の状態からいって製作時に鏡面を得るために研磨された傷跡のようにも思われる(村上 1996)。表面は、金(Au)・銀(Ag)・銅(Cu)、さらに水銀(Hg)の合金からできている。

金属組成の構成は、表面が金(Au)と水銀(Hg)を多く含んだ層があり、その下に銀(Ag)を多く含んだ層、さらにその下に銅(Cu)であることがわかった。表層部に水銀(Hg)が含まれていることから金のメッキ工法のひとつとして考えられる金アマルガム法による鍍金工法がとられたのではないかと推察される。元素の半定量分析の結果から表面の金濃度は約64%とかなり高い値を示した。

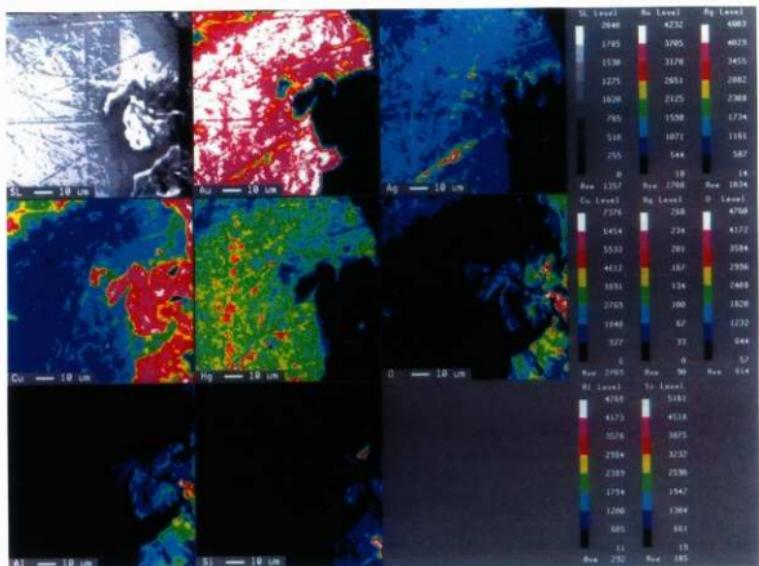
【参考・引用文献】

村上 隆 1996 「古代貴金属像を支えた金工技術」『'96 特別展 黄金に魅せられた豪人たち』島根県立八云立つ風土記の丘

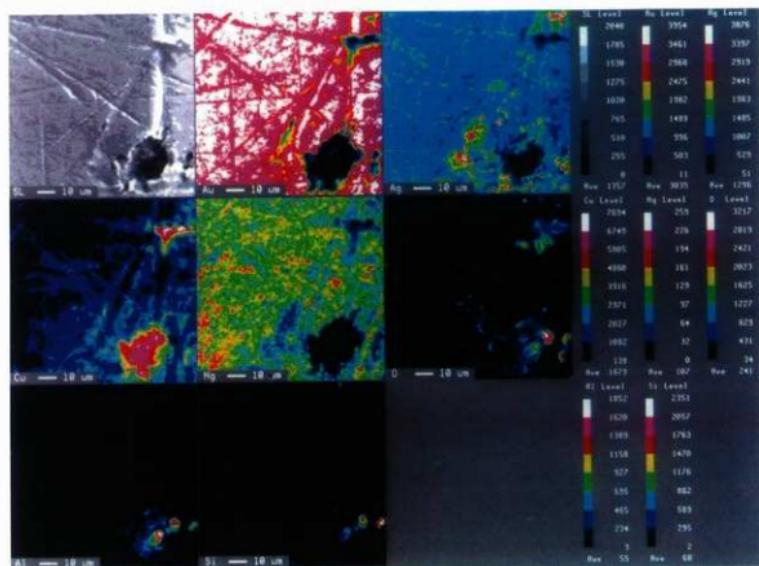
注1 Wt%とAtom%については、定性分析時の半定量の結果を用いた。



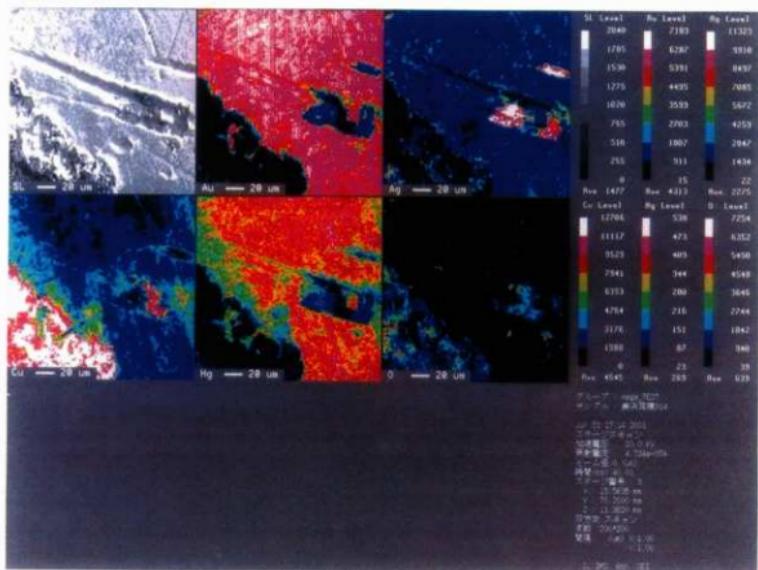
第55図 測定点(A)の定性分析チャート



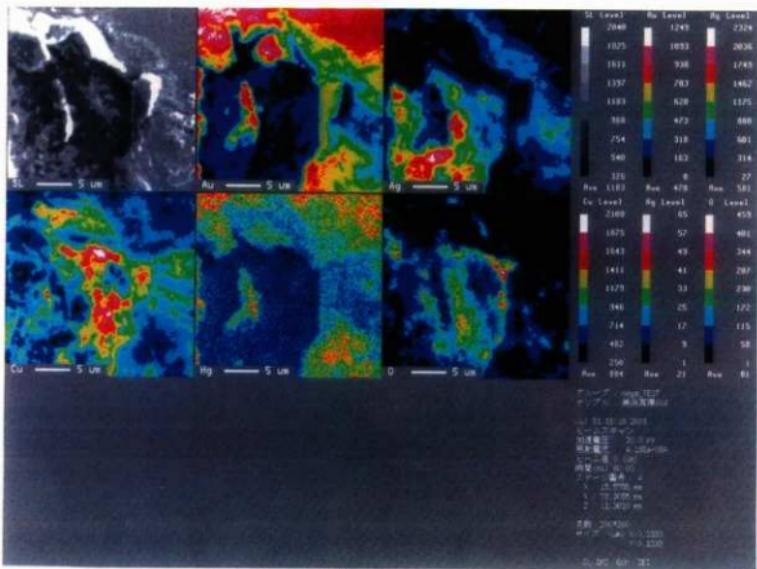
第56図 測定点(a)の面分析結果



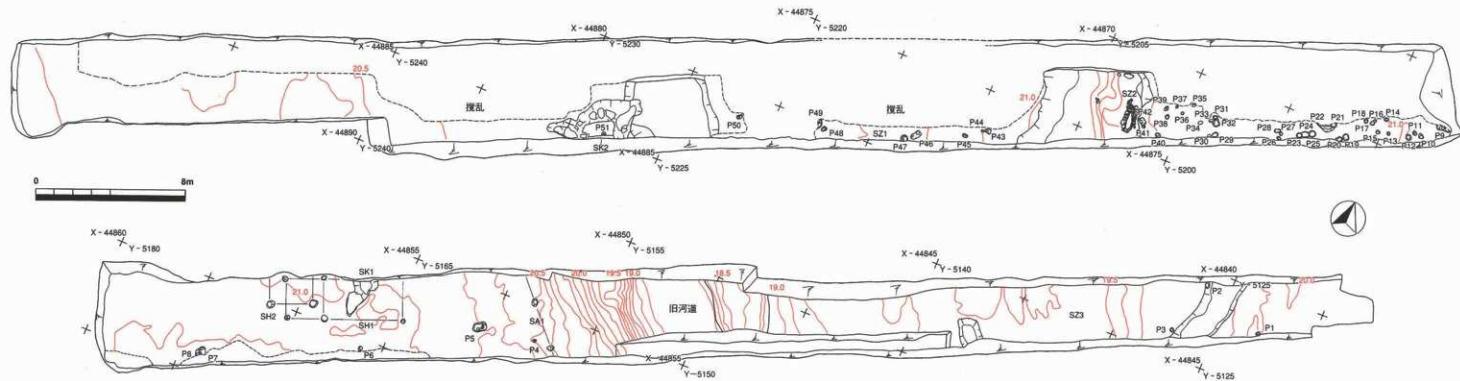
第57図 測定点(b)の面分析結果



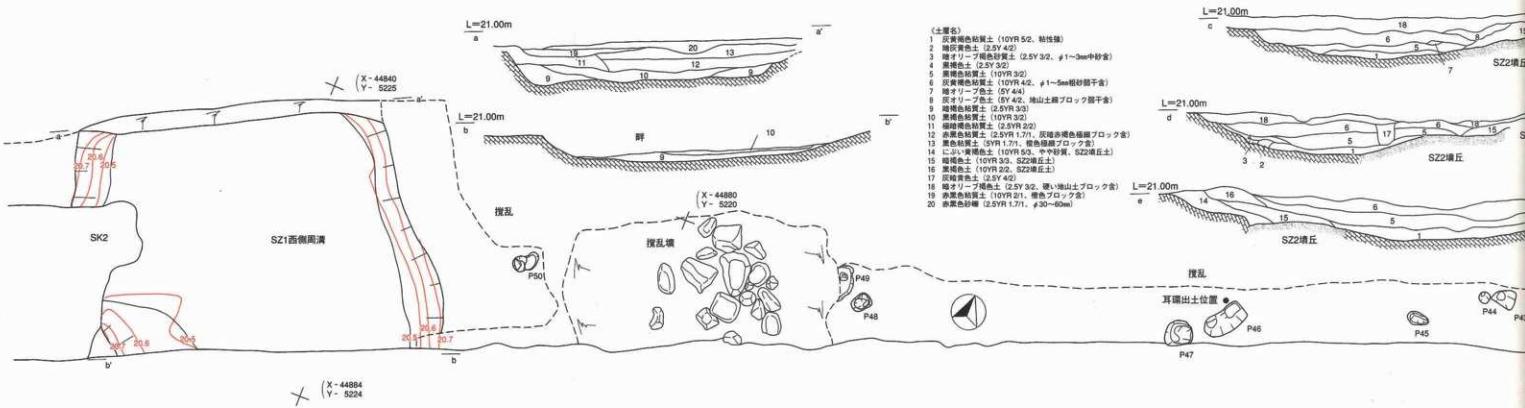
第58図 測定点(c)の面分析結果



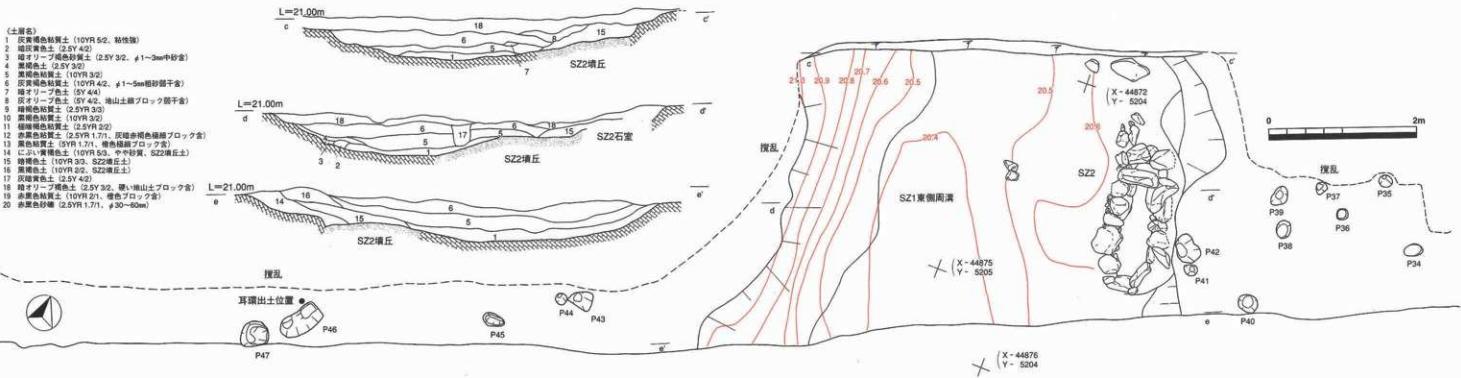
第59図 測定点(d)の面分析結果



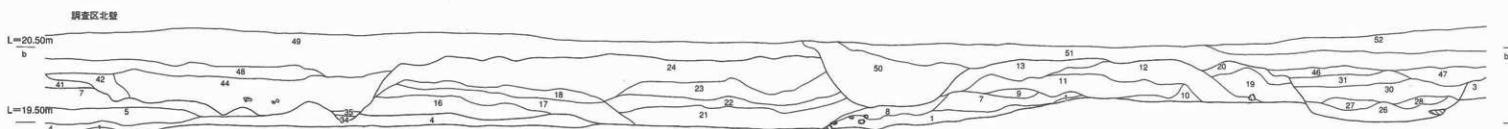
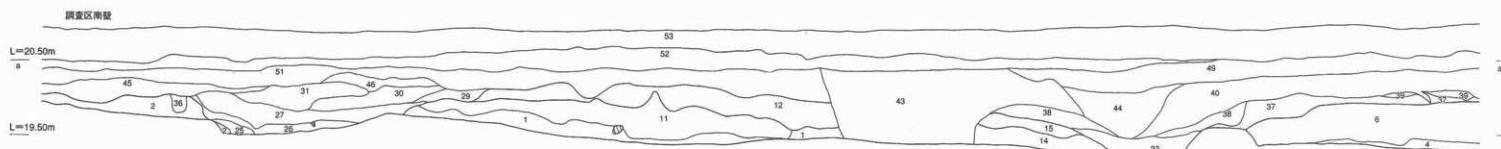
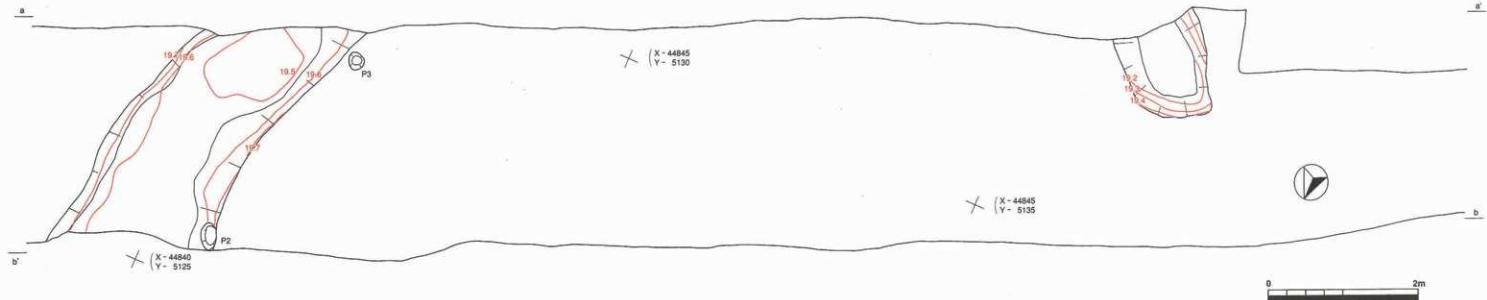
別添図1 調査区平面図 (S = 1/200)



別添図2 SZ1 平面・セクション実測図 (S=1/50)



別添図2 SZ1平面・セクション実測図 (S=1/50)



(土層名)

- 1 黒褐色粘土質土 (SYR 4.0、山山)
- 2 黒褐色粘土質土 (7.5YR 4.0、山山)
- 3 棕色灰質土 (7.5YR 6.0、粗砂、 $\phi 10\text{--}50\text{mm}$ 峰多、山山)
- 4 棕色灰質土 (7.5YR 5.0、粗砂)
- 5 棕色灰質土 (7.5YR 5.0、粗砂)
- 6 棕色粘土質土 (7.5YR 4.0)
- 7 黑褐色粘土質土 (7.5YR 4.0、粗砂含)
- 8 黑褐色粘土質土 (7.5YR 4.0、粗砂含)
- 9 黑褐色粘土質土 (7.5YR 3.0、山山)
- 10 黑褐色粘土質土 (7.5YR 5.0)
- 11 黑褐色粘土質土 (7.5YR 3.0、粗砂含)
- 12 黑褐色粘土質土 (2.5YR 5.1、粗砂含)
- 13 黑褐色粘土質土 (7.5YR 2.1、粗砂含)
- 14 黑褐色粘土質土 (7.5YR 2.1、粗砂含)
- 15 黑褐色粘土質土 (7.5YR 3.0、粗砂含)
- 16 黑褐色粘土質土 (7.5YR 3.0、粗砂含)
- 17 黑褐色粘土質土 (7.5YR 3.0、粗砂含)
- 18 黑褐色粘土質土 (7.5YR 3.0)

- 19 黑褐色粘土質土 (10YR 5.0)
- 20 黑褐色粘土質土 (10YR 3.0、粗砂含)
- 21 黑褐色粘土質土 (10YR 3.0、粗砂含)
- 22 黑褐色粘土質土 (7.5YR 3.0、粗砂含)
- 23 黑褐色粘土質土 (7.5YR 2.1、粗砂含)
- 24 黑褐色粘土質土 (7.5YR 2.1、粗砂含)
- 25 黑褐色粘土質土 (7.5YR 1.7)、褐褐色土質土
- 26 黑褐色粘土質土 (10YR 3.0、粗砂含)
- 27 黑褐色粘土質土 (7.5YR 3.0)
- 28 黑褐色粘土質土 (10YR 5.0) ~ 褐褐色膠狀土 (7.5YR 5.0)
- 29 黑褐色粘土質土 (7.5YR 2.1、粗砂含)
- 30 黑褐色粘土質土 (7.5YR 2.1、粗砂含)
- 31 黑褐色粘土質土 (7.5YR 3.0、粗砂含)
- 32 黑褐色粘土質土 (SYR 2.1、粗砂含)
- 33 黑褐色粘土質土 (7.5YR 3.0、粗砂含)
- 34 黑褐色粘土質土 (7.5YR 2.1、黑褐色沙質土)
- 35 黑褐色粘土質土 (7.5YR 3.0)
- 36 黑褐色粘土質土 (10YR 2.1、明褐色土層、P1付土)
- 37 黑褐色粘土質土 (7.5YR 2.1) ~ 褐褐色膠狀土 (7.5YR 5.0)
- 38 黑褐色粘土質土 (SYR 2.1、粗砂含)
- 39 黑褐色粘土質土 (7.5YR 2.1、粗砂含)
- 40 黑褐色粘土質土 (7.5YR 3.0、粗砂含)
- 41 黑褐色粘土質土 (10YR 3.0、粗砂含)
- 42 黑褐色粘土質土 (7.5YR 2.1、粗砂含)
- 43 黑褐色粘土質土 (7.5YR 1.7) ~ 黑褐色土質土 (7.5YR 2.0)
- 44 黑褐色粘土質土 (7.5YR 4.0)
- 45 黑褐色粘土質土 (7.5YR 2.0、粗砂含)

- 46 黑褐色粘土質土 (7.5YR 2.1、粗砂含)
- 47 褐褐色粘土質土 (SYR 2.1、粗砂含、 $\phi 10\text{--}50\text{mm}$ 峰含)
- 48 黑褐色粘土質土 (7.5YR 2.1)
- 49 黑褐色粘土質土 (7.5YR 1.7)
- 50 黑褐色粘土質土 (7.5YR 1.7)
- 51 黑褐色粘土質土 (7.5YR 3.0、粗砂含)
- 52 黑褐色粘土質土 (7.5YR 3.0、粗砂含、Mangan 含)
- 53 密土

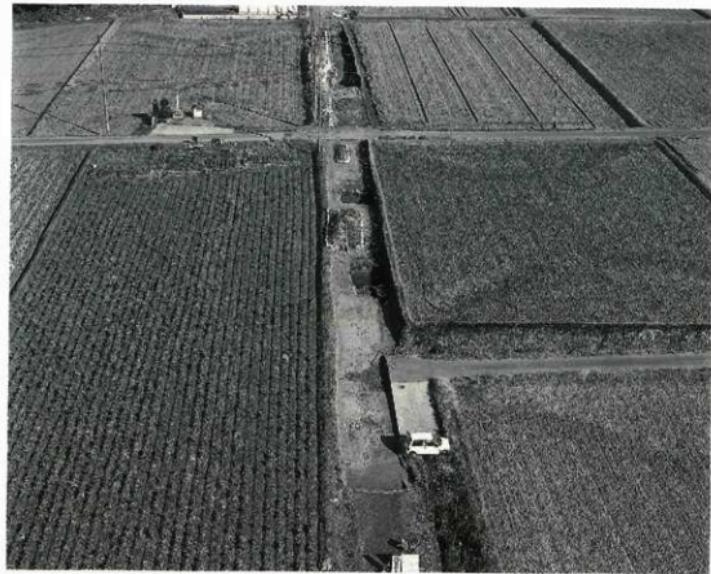
1 ~ 4 : 1 類別土壤
7 ~ 8 : S 2.3 類土
36 ~ 38 : 2 類土壤

別添図 3 S Z 3 平面・セクション実測図 (S=1/50)

図 版



調査区全景（東から）



調査区全景（西から）



調査前現況（南から）



表土除去状況



調査区基本層序



調査区東区（西から）



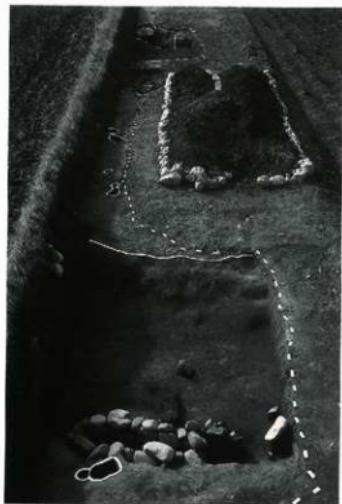
旧河道検出状況（西から）



調査区西区（東から）



旧河道士層断面



S Z 1 完掘（東から）



S Z 1 完掘（西から）



S Z 1 東側周溝完掘（東から）



S Z 1 東側周溝土層断面



S Z 1 西側周溝完掘（西から）



S Z 1 西側周溝土層断面



S Z 1 耳環出土状況



S Z 1 東側周溝内遺物出土状況



S Z 1 地山攢乱穴



S Z 1 地山攢乱石材



S Z 2 完掘（東から）



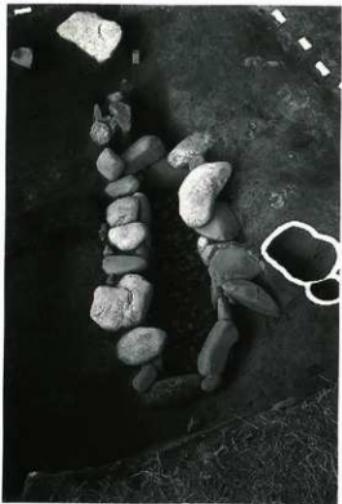
S Z 2 完掘（南から）



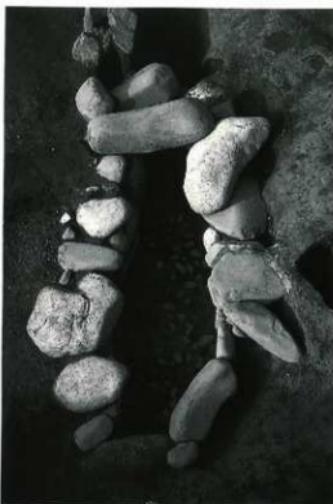
S Z 2 墓丘上土層断面 1



S Z 2 墓丘上土層断面 2



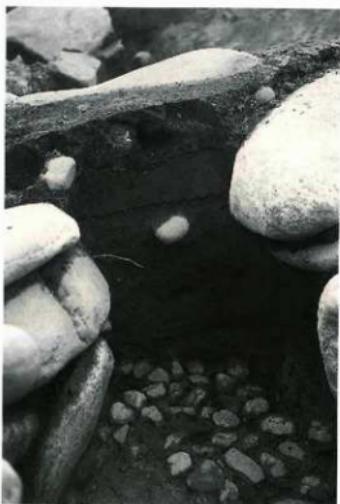
S Z 2 石室完掘1 (南から)



S Z 2 石室完掘2 (南から)



S Z 2 石室床面



S Z 2 石室内土層断面



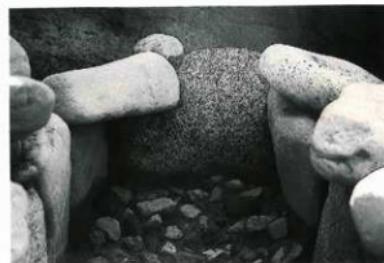
S Z 2 石室遺物出土狀況 1



S Z 2 石室遺物出土狀況 2



S Z 2 石室奧壁



S Z 2 石室前壁



S Z 2 石室左側壁



S Z 2 石室右側壁



S Z 2 墓丘土層斷面 1



S Z 2 墓丘土層斷面 2



S Z 2 墓丘除去状況



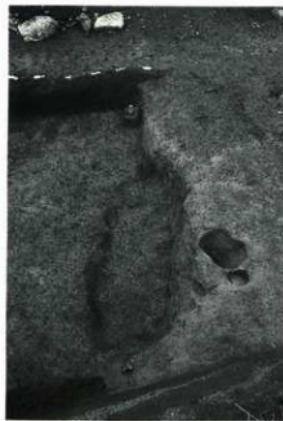
S Z 2 石室基底石



S Z 2 石室左側壁基底石



S Z 2 石室右側壁基底石



S Z 2 石室墓壙完掘 1



S Z 2 石室墓壙完掘 2



S Z 3 完掘（東から）



S Z 3 完掘（西から）



S Z 3 東側周溝土層断面（南壁）



S Z 3 東側周溝土層断面（北壁）



S Z 3 西側周溝土層断面（南壁）



S Z 3 西側周溝土層断面（北壁）



S Z 3 塗丘土層断面（南壁）



S Z 3 周溝内遺物出土状況 1



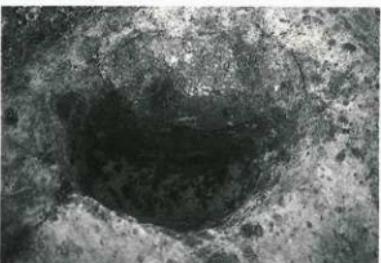
S Z 3 周溝内遺物出土状況 2



S Z 3 周溝内遺物出土状況 3



SH1・SH2・SK1・SA1 実掘（西から）



SH1-P1 半裁



SH1-P2 半裁



SH1-P3 半裁



SH1-P4 半裁



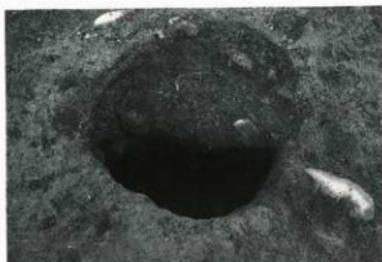
SH1-P5 半裁



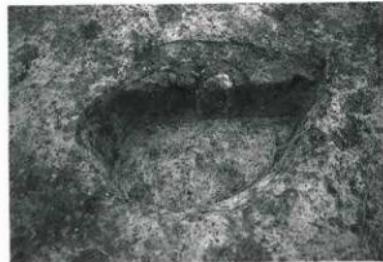
SH 1 - P 1 遺物出土状況 1



SH 1 - P 1 遺物出土状況 2



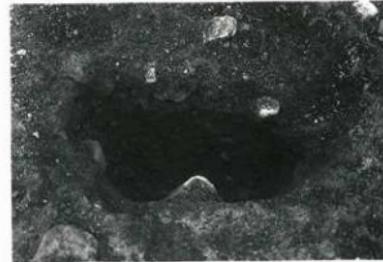
SH 2 - P 1 半裁



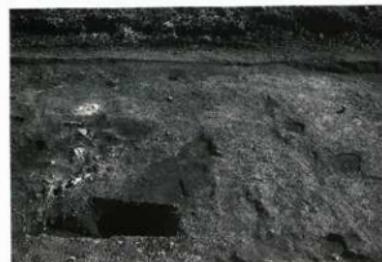
SH 2 - P 2 半裁



SA 1 - P 1 半裁



SA 2 - P 2 半裁



SK 1 検出状況（北から）



SK 1 土層断面



SK 2 完掘 (北東から)



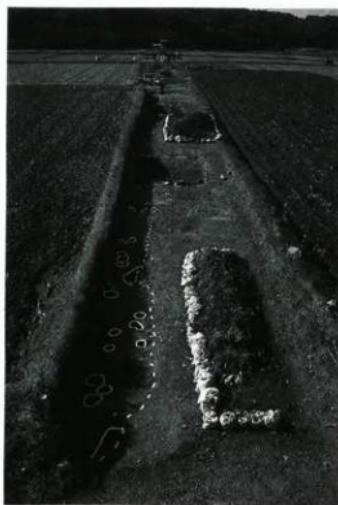
SK 2 完掘 (北西から)



SK 2 土層断面 (西)



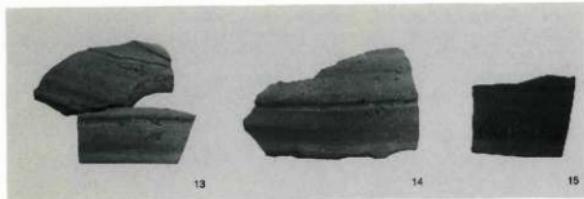
SK 2 土層断面 (東)



西区中世小穴群1 (東から)



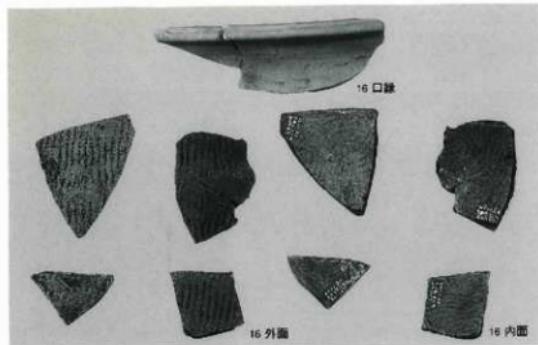
西区中世小穴群2 (東から)



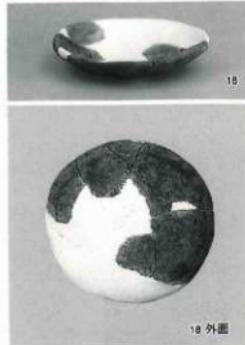
S Z 1 周溝須惠器杯口蓋



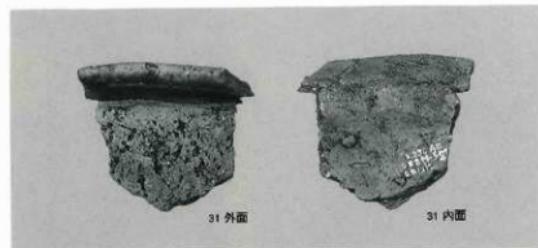
S Z 1 耳環



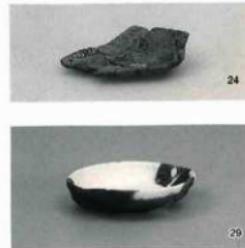
S Z 1 周溝須惠器邊



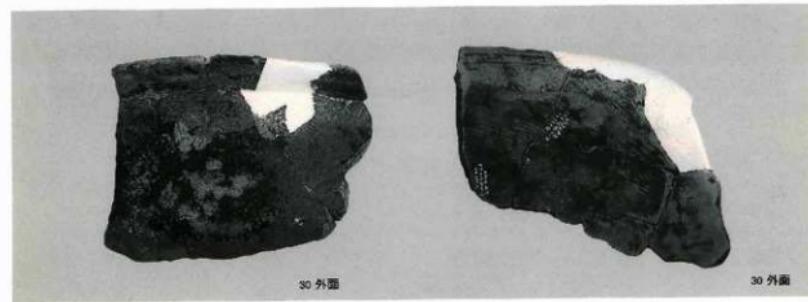
S Z 1 周溝土師器皿



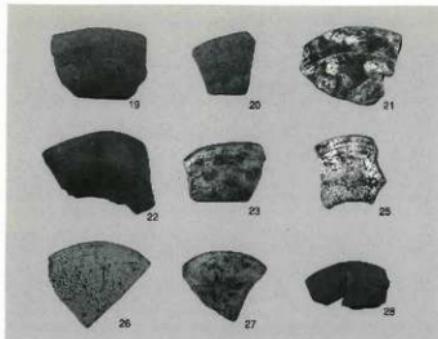
S Z 1 周溝土師器鍋



S Z 1 周溝土師器皿



S Z 1 周溝土師器鍋



S Z 1 周溝土師器皿



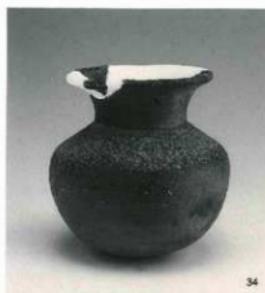
S Z 2 石室須惠器杯H

32



33

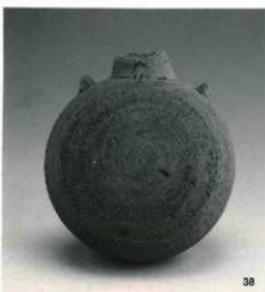
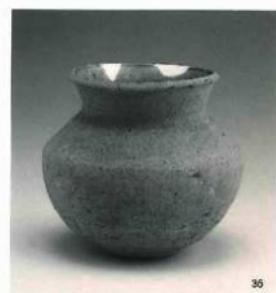
S Z 3 周溝須惠器広口壺



34

S Z 3 周溝須惠器広口壺

35



36

S Z 3 周溝須惠器提瓶



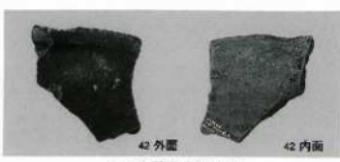
37

S Z 3 周溝須惠器提瓶

38



41



S Z 3 周溝土師器縲

S Z 3 周溝越前焼擂鉢

S Z 3 周溝越前焼擂鉢



S Z 3 周溝須惠器壺



S Z 3 周溝須惠器台付壺



S H 1 - P 1 土篩器皿

S H 1 - P 1 土篩器皿

S H 1 - P 1 土篩器皿

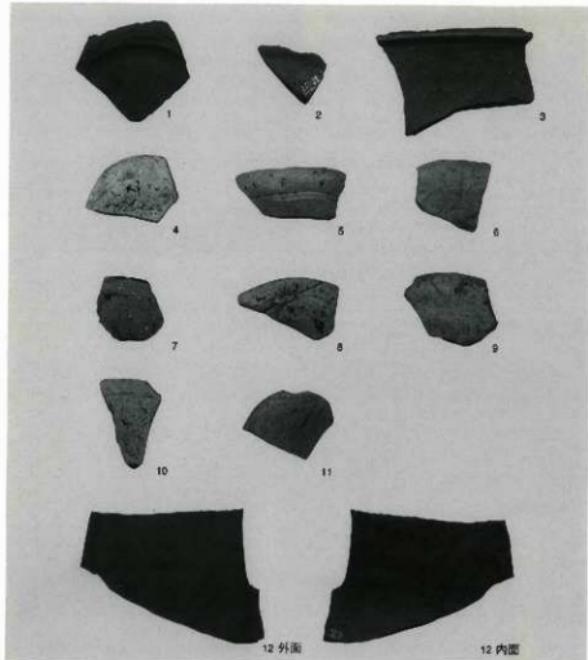


S H 1 - P 1 土篩器皿



S H 1 - P 1 土篩器皿

S K 2 土篩器擋鉢



中世（II期前）堆積層出土土器

報告書抄録

ふりがな	こうどうじこふんぐん							
書名	興道寺古墳群							
刷書名	県営中山間地域総合整備事業 美方地区に伴う発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	大谷女子大学文学部文化財学科			三辻 利一				
	財団法人若狭湾エネルギー研究センター			丸山 忠司				
				長友 仁郎				
	京福コンサルタント株式会社地質部調査部			鳥居 直也				
	美浜町教育委員会事務局			松葉 竜司				
編集機関	美浜町教育委員会							
所在地	〒919-1192 福井県三方郡美浜町郷市25-25							
発行年月日	西暦 2002年3月20日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	***	***			
興道寺古墳群	福井県三方郡 美浜町興道寺	18442	30074	135 56 01	35 35 44	20001005 20001228	1,436	長道拡幅
	主な時代	種別	主な遺構	主な遺物			特記事項	
	古墳(後)	古墳	円墳 3 小穴 3	須恵器・土師器・製塙土器・ 耳環			豊穴系小石室の検出	
	中世	集落	掘立柱建物 2 横列 1 土壙 2 小穴 48	陶器・土師器				

(2002年3月20日発行)
県営中山間地域総合整備事業
美方地区に伴う発掘調査報告書

「興道寺古墳群」

発行 美浜町教育委員会
〒919-1192
福井県三方郡美浜町郷市25-25
TEL 0770-32-1111
FAX 0770-32-1115

印刷 若越印刷株式会社
〒914-0037
福井県敦賀市道口63-10-1
TEL 0770-22-5600㈹
FAX 0770-23-2288

この電子書籍は、2002年3月20日、美浜町教育委員会が発行した『興道寺古墳群 県営中山間地域総合整備事業美方地区に伴う発掘調査報告書』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精确な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、美浜町教育委員会、美浜町立図書館にあります。これ以外にも福井県立図書館、福井県教育委員会、福井県内の市町教育委員会や図書館、近隣の都道府県教育委員会や図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにも寄贈・献本しています。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

この電子書籍の底本作成時に他機関等から写真・図表等の提供を受けている場合がありますが、電子書籍を作成し『全国遺跡報告総覧』にアップロードする上で、複製権、公衆送信権にかかる許諾を受けていないものについては、該当部分を削除し、白抜きとしています。これらの写真等の閲覧は底本にて行ってください。

書名：興道寺古墳群

発行：美浜町教育委員会

〒919-1138 福井県三方郡美浜町河原市8号8番地（美浜町歴史文化館）

電話：0770-32-0027

電子書籍制作日：令和2年(2020)3月17日